ISSN 1884-9504

機能言語学研究

第９巻　　2017 年 7 月

論文

SFL に見る主題解釈の変遷と日本語テクストの主題的解釈 1
龍城正明

Rhetorical Unit分析のフレームワークの再構築 21
三宅英文

英語ビジネスEメールにおける依頼・命令のジャンル構造の指標 37
水澤祐美子

小学校国語科教科書に採択された絵本において 55
学習可能なバイモーダル・テクストの枠組み
奥泉　香・水澤祐美子

絵本における文と絵の補完関係 73
早川知江

自閉症スペクトラム障害者の物語絵本のナラティブ 97
から検証する認知的共感の欠損
加藤　澄

日本機能言語学会

Foreword

It is my great pleasure to publish Vol.9 of *The Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics*, especially because the number “9” has a significant meaning in JASFL. As this journal appears every other year, 18 years have passed since the first issue of the journal was published. Turning18 symbolically shows that this journal has grown to maturity, since in Japan the age of 18 is established as the voting age. Regarding this point, I must say that this issue of *the Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics* represents a new era of Systemic Functional Linguistics in Japan.

Over the past two years, the context of the world has been significantly changing in politics, economics and societies. In accordance with this trend, the context of languages and their functions have been transforming due to advances in ICT technology. One of our responsibilities is to shed light on how to analyze how languages work and how languages are utilized in our societies in order to propose measures for prosperous social life. Our latest issue includes articles contributing to these tasks.

This volume covers a wide range of topics with contributions reflecting current research trends, such a proposal of analytical framework of Japanese in the Kyoto Grammar, a review of rhetorical unit, a discourse analysis from generic structural viewpoints, analysis of picture textbooks with multimodal focuses, analysis of complementary relationships in a picture book, and clinical text analysis from therapeutic viewpoints. Though there is no particular order to the articles themselves, they have been grouped into theoretical reviews, discourse analysis and applications. All these articles will interest readers of this journal, and their insights will impact the framework of Systemic Functional Linguistics.

I hope that this journal will be of interest to those who study Systemic Functional Linguistics not only in Japan but also globally, since SFL has now spread and is studied all over the world.

President of JASFL
Masa-aki Tatsuki, Ph.D.

機能言語学研究

Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics

第 9 巻　2017 年 7 月　目次

論文

SFL に見る主題解釈の変遷と日本語テクストの主題的解釈 1
龍城正明

Rhetorical Unit分析のフレームワークの再構築 21
三宅英文

英語ビジネスEメールにおける依頼・命令のジャンル構造の指標 37
水澤祐美子

小学校国語科教科書に採択された絵本において 55
学習可能なバイモーダル・テクストの枠組み
奥泉　香・水澤祐美子

絵本における文と絵の補完関係 73
早川知江

自閉症スペクトラム障害者の物語絵本のナラティブ 97
から検証する認知的共感の欠損
加藤　澄

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

『機能言語学研究』
Proceedings of JASFL
編集委員
Editorial Board of *Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics* and *Proceedings of JASFL*

編集長 Chief Editor
佐々木真（愛知学院大学） SASAKI, Makoto (Aichi Gakuin Univerisity)

副編集長 Vice Chief Editor
南里敬三（大分大学） NANRI, Keizo (Oita University)

編集委員 Editorial Board Members (Alphabetical Order)
綾野誠紀（三重大学） AYANO, Seiki (Mie University)

デビット・ダイクス（四日市大学） DYKES, David (Yokkaichi University)

福田一雄（新潟大学） FUKUDA, Kazuo (Niigata University)

飯村龍一（玉川大学） IIMURA, Ryuichi (Tamagawa University)

伊藤紀子（同志社大学） ITO, Noriko (Doshisha Univeristy)

岩本和良（杏林大学） IWAMOTO, Kazuyoshi (Kyorin University)

角岡賢一（龍谷大学） KADOOKA, Ken-ichi (Ryukoku University)

小林一郎（お茶の水女子大学） KOBAYASHI, Ichiro (Ochanomizu University)

三宅英文（安田女子大学） MIYAKE, Hidefumi (Yasuda Women's University)

バージニア・パン（立命館大学） PENG, Virginia (Ritsumeikan University)

佐藤勝之（武庫川女子大学） SATO, Katsuyuki (Mukogawa Women's University)

龍城正明（同志社大学） TATSUKI, Masa-aki (Doshisha University)

鷲嶽正道（愛知学院大学） WASHITAKE, Masamichi (Aichi Gakuin University)

SFL に見る主題解釈の変遷と日本語テクストの主題的解釈

Change in the definition of Theme in SFL and the Japanese text analysis from the Thematic point of view

龍城正明
Masa-aki Tatsuki
同志社大学
Doshisha University

Abstract

This paper proposes a new system of Japanese text analysis by applying the concept of various themes of the Kyoto Grammar in the framework of SFL. The Kyoto Grammar is a treatment of analyzing Modern Japanese in the framework of SFL.

Compared to English, Japanese texts often do not manifest Subject or Finite elements. Subject is an important element in Interpersonal function, together with Finite, both of which organize the concept of a clause. Thus, a subjectless unit in Japanese is no longer called a clause. In this paper, such unit is called "Quasi Clause" and an attempt is made to analyze the Japanese Quasi Clause from the viewpoint of Textual function implementing the concept of Theme.

Theme, however, should not be analyzed in a single clause but in multiple clauses forming a set of text. Regarding this point, the original Prague School idea of theme advocated by Mathesius is incorporated in the treatment of Theme in SFL to construct an analysis more suitable to Japanese.

Accordingly, this paper maintains a set of Japanese clauses and Quasi Clauses, which is named a Communicative Unit (CU). In this unit, several Themes, such as Supra Theme (ST), Veiled Theme (VT), Consequent Theme (CT), are advocated in order to analyze several quasi clauses properly. By making use of this thematic treatment, this paper tries to analyze the newspaper editorial.

1. はじめに

本論文は，ハリデー(Halliday)の選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics=SFL)[1] の枠組みで、「主題（テーマ）」と呼ばれる概念が日本語では、どのように扱うのが適切かを the Kyoto Grammar と呼ばれる日本語分析手法を用いて分析するものである。まず、主語と主題の概念の違いを SFL ではどのように定義づけているかを考察し、日本語には主語という要素より、主題という要素が適切であることを論じる。次に、主題という概念がどのように定義づけられてきたかを *An Introduction to Functional Grammar* の初版から第 4 版に至るまでの定義の変遷をたどり、主題は単に節という単位の中で分析されるのではなく、コンテクストという概念を取り入れて一つのテクス

トの中で分析される概念であることを見ていく。その観点から主題という概念が最初に分析されたマテジウス(Mathesius)による主題の扱いをチェコ語の分析によって概観し、これによって，主題展開がどのようにテクストの中で進められるのかを参考に、日本語テクストの分析に援用することにしたい。

主題を考察する上で、常に主語との関連が問題となってくるが、この点については、ハリデーも言及している如く、日本語には「は」という主題を具現する格助詞があるので、主語を具現する「が」とは区別して用いることにする。特に、主語という概念が節を構成する単位である点に鑑み、主語の定義をするのに、節という文法的単位を用いた場合、それが日本語に適用されるのが適切かどうかを考察する。本論では,節という概念に対して、日本語テクスト分析では「伝達的機能(Communicative Unit)」という単位を提唱し、そこでの主題構造について分析することとする。

先ずは，ハリデーの言う英語分析の基本単位となっている主語と定性という 2 つの単位の主語という扱いについて、それが何を意味するか、また日本語ではどのように扱うのが適切かを考察することから論を始める事とする。

2. 日本語の主語分析に関して

SFL の枠組みでは、英語の談話分析における基本単位は節(clause)であることがよく知られている。この節という単位をもとに、観念構成的、対人的、テクスト形成的という 3 つのメタファンクションといわれる機能が同時的に関わることにより、言語の具現を可能にしているといわれる。その点から「主語」という概念は対人的機能により具現されるもので、「主題」と呼ばれるテクスト形成的機能により具現される要素とは異なった分析、解釈が用いられてきた。

主語という概念はいわゆる文法的概念により、文法的に定義される要素である。それはハリデーの言う定性とよばれる節の中で命題を具体化する要素、即ち、時制、モーダル、極性を司る要素と相まって、対人的機能として、主語と定性という語順なら平叙文であり、これは話し手による聞き手への「情報提供」となり、定性と主語という語順になれば、疑問文を構成しているので、これは話し手が聞き手への「情報探求」という分析がなされた。ここでの主語と定性は明らかに節構造に関わっているために、文法的機能ということができる。しかし、英語では極めて自然であるこのような文法的機能を基本に据えた主語と定性という 2 要素の語順解釈のみにたよると、世界の言語では必ずしもこの 2 要素が具現しない場合も多々見られる。例えば、ラテン語やイタリア語の場合は主語としての要素は動詞語幹に組み込まれることがよく知られているため、ラテン語の *ego* やイタリア語の *io* のような代名詞は、ほとんど具現されることはない [2]。このような言語では動詞語幹に人称変化が具現するために、通常は主語に相当する語彙が具現されなくても、主語という概念が消失しているということにはならない。しかしながら、日本語のように主語という概念があるにもかかわらず、語彙としても、また動詞語幹としても具現されない場合、この主語という単位をどのように扱えば

よいのかは常に議論の的となってきた。このために、極端な場合は、「日本語には主語は存在しない」などと言われることがあるが、実際、日本語に主語は存在しないのであろうか。

日本語の場合、英語のように主語という要素が必ず具現する必要はなく、また定性という要素も英語のモダリティー表現に用いられる法助動詞の如く「一語で具現される」わけではない。モダリティー表現となると、「愛するかもしれない」のように、「愛する」に「かもしれない」が付加され、この時制が変化すると、「愛するかもしれなかった」と「愛したかもしれなかった」のように、「愛する」という動詞も、「しれなかった」という法助動詞も共に時制の変化を受けることになる。また疑問節に関しても、日本語では節末に疑問助詞「か」を付与することにより具現されるので、英語のように主語と定性とが転換するという形で具現されるわけではない。したがって、日本語の定性という要素は英語とは性質を異にしているという点で、英語と同じように分析することはできない。しかしながら、定性という概念が時制、モーダル、極性を具現する要素であるとするなら、日本語であろうと他の言語であろうとこの概念が成立するのは当然のことである。このように定性という性質をもつ要素は個別言語的であるとはいえ、日本語には本当に主語や定性がないといえるのだろうか。言語の伝達として、主語や定性がないなら、日本語母語話者はどのようにして伝達内容を伝えているのか。また、英語のように主語と定性からなる「節」という単位を分析の基本単位とできないなら、日本語では何を分析の基本単位とすればよいのか。これは日本語のテクスト分析にとって大きな問題といえる。

本論では、「主語」とは文法的な単位で、節を構成するのに重要な単位として用いる主語と定性という概念の一つであると考える。しかし、この主語が「何について話しているのか」という観点から、別のメタ機能的分析である「主題」として分析した場合、主題は「何について話しているのか」を的確に具現する要素となりうるのである。言い換えれば、この主題がないということは、それに続く題述と結びつく相方がいなくなるということになってしまう。その結果、発話、もしくは論述の意味が不可解になるという危険性を含んでいる。このようにテクスト形成的観点から捉えた主題と題述という概念は発話構造にとっても大切な概念であり、ハリデーはこれをテクスト形成的機能から分析するのである。

以上、3 つのメタ機能という分析によれば、例 (1) にはそれぞれのメタ機能からの要素をもって分析することが可能である。

(1)　Robin gave Margaret a gold watch.

表 1: 例(1)のメタ機能

	Robin	*gave*		*Margaret*	*a gold watch*
対人的	Subject	Finite	Predicator	Complement	Complement
観念構成的	Actor	Process: material		Beneficiary	Goal
テクスト形成的	Theme	Rheme			

表 1 の分析からわかるように、主語と呼ばれる要素はテクスト形成的機能からみれば主題(Theme)と捉えることが可能であり、特に、日本語のように、主語と定性からなる節という単位が明確に分析されない言語では、常に主語という概念を用いて分析する必要性の是非が問われることになる。その意味では、日本語の分析においては、対人的機能（文法的機能）としての主語の分析という方法より、テクスト的形成機能からみた主題という概念を用い、より広いテクスト形成という観点から分析を進めた方が適切であると思われる。

日本語の主題を考察する場合、日本語には「は」という格助詞があり、これは主語を表す格助詞の「が」とは区別して用いられる事から、日本語には「は」という主題を具現する助詞が付随した要素を主題と捉える事とする。そこで、次節では、主題という概念が主語とは異なる要素であるという点を確認した上で、SFL におけるハリデーの主題解釈について、*An Introduction to Functional Grammar* に見られる主題解釈がどのように変遷したかを見ていくことにする。ここでは、主題という概念を定義したチェコ語を用いて定義したマテジウスの分析も見ていくことにする。

3. ハリデーの主題についての定義，解釈の変遷

ハリデー理論の総括的枠組みは 1985 年に出版された *An Introduction to Functional Grammar* に詳しいが、本書は選択体系機能言語学者にとってのバイブルとも言われている。本書は上述の 3 つのメタ機能に関して、「意味」の観点から分析し、解釈を与えている。本論では特にテクスト形成的機能における clause as message の中で展開されている主題の解釈について、1995 年以降に出版された第 2, 3, 4 版にも言及しながら、主題の解釈がどのように変化したかを追う。これにより、主題が日本語テクスト分析に有効な手段であることを探ることにしたい。

まず、1985 年に出版された *IFG 1st ed.*:39 では以下のように定義されている。

(2) the Theme is the starting-point for the message; it is what the clause is going to be about.

(*IFG 1st ed.* 39)

これに先立つハリデーの主題と過程構成に関する先駆的論文である“Notes on transitivity and theme in English Part 2” (1967: 212)では、主題については (3) に示すごとく、しごく簡単に述べられている。

(3)　theme means ‘what I am talking about.’

次に、*IFG 2nd ed.*では、主題に関し、以下のような記述が見られる。

(4)　The Theme is the starting-point for the message; it is the ground from which the clause is taking off

(*IFG 2nd ed.* 38)

以上の定義からも主題とはメッセージの起点であり、その意味では「その節が開始される基点である。」と同時に「今、何について話しているか」という点が強調された説明となっている。

しかし、ここで注意したいのは、ハリデーの主題に対する定義と分析は、英語の基本的単位である節を基礎に行われているため、上述の 3 つのメタ機能分析もすべて節、即ち、「単独の節」を分析したものであるといえる。SFL の理論的枠組みとして、節を分析するには妥当であるが、テクスト形成的観点から言えば、「主題－題述」という概念は決して単独の節を対象にしたものではない。これは、あくまでもテクストという集合体の中での分析されるのが主題－題述の本質というべきである。この点について、「主題－題述」という概念が提唱されたプラーグ学派の分析をもとに、主題の本質を追ってみることにする。

そもそも theme[3] とはプラーグ学派の言語学者であるマテジウスがチェコ語やロシア語のように語順が比較的自由な言語において話し手の「内容・視点」を分析するのに用いられた、文の実勢的構成(Functional Sentence Perspective)において提唱された概念である(Mathesius, 1961)。ここでは文を 2 つの基本的な内容単位を含む要素に分割し、一つは「何かを述べる部分」、そして今一つは「それについて述べられる部分」とされる。前者を陳述の「基礎」、あるいは「主題」と呼び、後者の基礎について述べる部分は、陳述の「核」または「実際の叙述（題述）」と呼ばれる[4]。このような概念は，英語のように主語と定性という語順が厳密に守られている言語ではさほど重要ではないが、チェコ語のように柔軟な語順をもつ言語ではこの分析は非常に有効に作用する。

この点について、マテジウス(Mathesius,1961: 101)は以下の (5a)を示して、“The point in question may be demonstrated by the constituent sentences of the following Czech utterance.”と述べている。ここでの重要な点は、主題展開とは、マテジウスの言うように、決して単文（節）によって分析できるものではなく、utterance（発話）、即ち「集合体」の中で考察されるべき、という点である(Mathesius,1961: 101-103)。

(5) a. Jan velmi dobře prospíval. Ve škole horhvě naslouchal každému slovu svých učitelů a doma mu pomáhal otec, kdykoli mu byla nějaká uloha přilíš těžká

b. Jan very well prospered. At school eagerly he listened to every word of his teachers and at home to him helped father, whenever for him was a task too difficult.

(5a) はマテジウスによって示されたチェコ語のテクストであり、(5b) はチェコ語を英語に逐語訳した例である。これを見る限り、(5b) は、英語の語順としては不適切なものもある。マテジウスによると、チェコ語の最初 2 文は英語に置き換えるには問題なく、英語に置き換えた場合も語順は問題なく配置されている。しかし、次の文、*a doma mu pomáhal otec* では *otec* (=father) というチェコ語の主語にあたる語彙が文末にある為、英語の語順に沿って逐語訳することは不可能であると言う。しかし、チェコ語のような比較的語順の自由な言語にはこれが可能で、例え、語順が OVS として具現しても問題はないといえる。このなぜ OVS という語順が具現するのかを theme-rheme の枠組みで分析すると、次のようになる。

(5a) のテクストでは、ヤン *(Jan)* の活躍ぶりを報告するのに、学校 *(Ve škole*）での状況をあげ、次に家庭 *(a doma*) での状況をあげる。この家庭での状況では、「父 *(otec)* が困った状況にある場合は彼 (*Jan*) を助ける」という意味内容を表すのに *otec*（父）が主語であるにもかかわらず、その位置は文末にきている。これは以前の文脈では *Jan* について述べていたのに対し、新しく *otec* という主語が登場するために、これが陳述の核となる。同時に行為の主体を示すことになるので、文末におかれたのである。一方で、*Jan* を表す *mu* （三人称与格）は直前の文からの一貫性が保たれることになり、*mu* が主題の位置に具現しているのである。これにより、このようなテクスト（集合体）では、主題である *Jan* はつねに文頭にあり、これが文の基礎となり、新しい要素である *otec* が具現すると、これが文の核、即ち題述となることから文末に置かれることになるのである。

言い換えれば、*Jan* という主題は、2 つ目の文では *naslouchal* (he listened) として具現された後、次文からは *mu* という 3 人称与格で具現されている。この *mu* は与格であるとはいえ、意味的には「何について話しているのか」=Jan についての話」という主題であることから、常に文の基礎となる文頭に置かれているのである。例えば、*a doma mu pomáhal otec* は英語の逐語訳なら at home to him helped father であるが、これを英語の語順に直すと father helped him at home となり、father という新しい情報＝核(rheme)が文頭に来てしまうことになる。これではこのテクストにおける主題としての *Jan*、またそれを受けた人称代名詞の *mu*（彼，与格）の主題としての役割が壊されてしまう。さしずめ日本語なら「父が」という主語を用いたとしても、チェコ語同様「家では彼を父が助ける」という語順で、父という主語は文頭にくることなく、*Jan*（彼）という主題を常に文頭にもってくることができる。もっと言えば、日本語では、「*Jan* は大変よく成功していた。」という文で始まるテクストなら、それに続く内容は「学校では先生たちの言うことをよく聞き、家では何か難し過ぎる問題があればいつでも父親が助けてくれた。」のよう

になり、*Jan* のことを述べていることが明白なら、いちいち「彼は」という主題は具現されなくてもよいことになる[5]。

本来の theme とはこのチェコ語や日本語の例に見るテクストにおいて、一連の話し手が作り出すエピソードで、話し手が今、何について話しているのを述べる要素である。その意味では、Halliday (1967, 1985) に示されている主題の定義に沿った解釈が可能となるが、留意すべき点は、先述のごとく、単文（節）における「今何について話しているのか」という主題解釈ではなく、テクストという一連の集合体での話し手の首尾一貫した内容を theme という要素をもって結束性を保っているという点が重要なのである。この点がなければ、チェコ語の主題展開による語順の変化は具現されないことになる。言い換えれば、自由な語順をもつチェコ語ゆえに、その発話がなされる状況、コンテクストを鑑みて語順が決定されるのである。その結果、統語的な制約をうけない、伝達的機能からみた theme-rheme という考え方が生まれるのである。

この点に関して言えば、*IFG 3rd ed.* : 64 では、以下に見るように、コンテクストという概念が導入されている。

(6) The Theme is the element which serves as the point of departure of the message; it is that which locates and orients the clause within its context.
「主題はメッセージの出発点としての役割を果たし、その節をコンテクスト内に配置してコンテクストに向かわせるものである」
(*IFG 3rd ed.* 64)

上記の第 3 版以降は、マティセン(Matthiessen)が大幅な改訂に携わり、*IFG* の本体には各所でかなりの例文を加えている。その結果、コーパス的な役割を果たしていることも意義のある改訂となっている。ここで興味ある点は、本来の主題としての役割である「メッセージの出発点としての役割」という定義は変更なく述べられているが、ここにコンテクストという概念が導入された点であろう。主題が具現された節をコンテクスト内に置くことによってコンテクストに即した方向を見定める、という点である。コンテクストを勘案する限り、ここではハリデーが定義した単独節[6]としての主題の分析ではなく、コンテクストによって具現される集合体を念頭においた解釈と言えるだろう。もっともハリデーの枠組みでは 3 つのメタ機能を(1)で見たように、単独節として記述しているので、それぞれのメタ機能に対しての Subject, Actor, Theme という表記は正しいと言える。しかし、主題という概念は決して単独節だけで理解できるものではなく、その点が *IFG 1st and 2nd eds.* では明確に記述されてこなかったのも事実である。

このコンテクストという概念を主題分析に取り入れることによって、上述したマテジウスのチェコ語の例における theme - rheme の扱いや、以下に見る日本語テクストにおける伝達的ユニット (CU) や覆面主題 (VT) という概念がより明確に理解されることになる。因みに、*IFG 4th ed*: 89 では以下のよ

うに *IFG 3rd ed.* とはほぼ同様の記述がなれているが、一点、最近のアメリカ英語の影響か、the element which であった関係代名詞 which が the element that のように that に修正されている。

(7) The Theme is the element that serves as the point of departure of the message; it is that which locates and orients the clause within its context.
・*IFG 3rd ed.* と同内容
・関係代名詞 which -> that (*IFG 4th ed*. 89)

以上、*IFG 4th ed.*ではマティセンの改訂により、*IFG 1st and 2nd eds.* でハリデーが示した主題の定義も、単に節における「メッセージの出発点」としての役割のみにとどまらず、テクストを対象としたコンテクストという概念に言及し、主題がコンテクストの内容に即した方向を見定めるという点を付加した点は大いに評価できるものである。

4. 伝達的単位(CU)に見る日本語の主題的解釈

本節では、日本語の主題という概念について、日本語のテクスト、特に社説（読売新聞）というジャンルを取り上げ、そこに見られる日本語の主題に関する分析方法について考察することとする。このテクスト分析では、主語や目的語がない、あるいは定性にあたる要素がないと言われる日本語の言語事象をとりあげる。そこから節としては不完全な単位の分析を通して、日本語母語話者がどのようにテクストを解釈しているのかを探ることにする。ここでの分析は日本語の記述構造を分析する枠組みである、the Kyoto Grammar（龍城、2009）によって行なうこととする。The Kyoto Grammar による分析とは、現代日本語の記述に即して分析を旨とする意味で、日本語分析に適した分析として、新しく伝達的単位(Communicative Unit=CU)という概念を提唱し、節を超えたテキストベースの分析を試みることにする。CU とはテクストの最初に具現するスープラ主題と呼ばれる要素が以後に影響を与える単位である。これにより、日本語のテクスト分析を行う場合は、英語とは異なり、節という単位を用いる必要がない点、さらに日本語テクスト分析では、主題という観点からの分析が適切である点を考察する。

先ず、確認すべきは、先述のごとく主語と定性という単位はあくまでも対人的機能における文法的（統語的）要素であるという点である。この対人的機能から見た主語と定性をもって、日本語テクストを扱おうとすると、確かに主語と定性に相当する単位が欠落しているので、これを節とは呼べない。従って、このような主語の欠落した単位を対人的機能の観点からは、本論では疑似節(Pseudo Clause)と呼ぶことにする。しかしながら、これが、早計に日本語には節がないとか、「主語にあたる要素」がないということにはならない。

統語的観点から見れば、疑似節が多く具現する日本語でも、テクストという視点からみれば、そのテクストの始発にあたる部分には必ずと言って良い

ほど主語と定性に当たる要素が具現している。言い換えれば、この部分には、日本語テクストにも主語と定性を含む、節が具現することになる。これは、話し手が始発部分では必ず「何について話しをするのか」を明確にしておく必要があり、その意味では、始発部分には必ず主語にあたる要素が具現されるといっても過言ではない。

日本語のテクストでは始発節には必ず文法的主語が存在するが、それ以降についてはテクスト内の首尾一貫性をもって理解できる場合は、その主語は隠されているとみるのが適切な分析といえる。ただし、この場合はあくまでも主語ではなく、主語をうけた「主題」という概念をもって、以後の疑似節は形成されていくと見るべきである。

主語と主題の関係でいえば、日本語では「～が」が主語を具現し、「～は」は主題を具現すると言われる。このような 2 つの助詞の機能については日本語文法論に詳しい。特に、「は」の機能の一つである、テクスト内の「ピリオド越え」という分析は、三上の『像は鼻が長い』に始まり、久野 [7] や大野は、「は」の機能について明確に記述している [8]。しかし、これらの分析でも文という観点からの分析が多く、テクストという集合体の中で分析しているとは言い難い。三上はピリオド越えという概念のもとで、「『X は』がピリオド（マル、句点）を越えて、次々の文まで及んでいく例は珍しくありません」[9] と述べているが、あくまで文という概念を用いた分析といえ、ピリオド越えをはたす「は」の機能が、どの範囲まで適用されるのか、即ち、本論でいう CU という観点については詳しくは述べていない。

実際には主題というのは、「何について話しているのか」を明確にする要素であるという点からみれば、機能的な相違はあるにしても、主語と主題にはその意味的な解釈には大した違いはないと見てよい。当然ながら、日本語におけるテクスト内で主語として扱われる要素であっても、これをテクスト解釈からみれば、特に CU 内で初出の場合 [10] は「～が」で始まる要素は、主題と解釈できる場合が多い。言い換えれば、この初出の「が」に関しては、主語と主題という機能を併せ持っていると言える。要は情報構造の観点から初出の場合、新情報は「～が」から始まることが多く、それを受けて具現する旧情報が「～は」で具現されることが多いために、情報構造とは別に、初出の主語は主題として認識されることになったのであろう。

しかし、問題は、始発部分以降に見られる主語や定性のない疑似節をどのように扱うかである。そこで、主語と定性を備えた節から始まり、それに後続する疑似節が多く含まれる単位を「ひとつの集合体」と捉え、これをテクスト形成的な伝達機能の観点から捉えた単位である CU として分析する。

この CU に具現する複数の疑似節にも始発節からの結束性により、主語や定性と呼ばれる要素が浮き上がってくる。しかし、あくまでもこれはテクスト形成的機能から一つの「まとまり」として捉えることになるので、これらを主語や定性という文法的な概念を用いて分析することには、その妥当性が問われることになろう。したがって、このような隠れた要素 (Veiled Element=VE)を含む、節よりも大きな単位を設定するにあたり、この単位が

文法的であるとは言えない点に着目し、テクスト形成的機能から見た、新しい概念のもとでCUを提唱するのである。ここでは、「話し手の意図」という観点を重視したテクスト形成的機能から捉えるので、「何が」にあたる部分を主語ではなく「何について話しているのか」を表す主題と捉えることにする。言い換えれば、従来の主語という概念はハリデー理論では対人的機能に属する要素であることから、テクスト形成的機能からは、主題という概念をもってこれに充てることにするのは妥当な分析といえよう。しかし、このように分析すると、疑似節と分析された単位には主語や定性の存在が確認できない。したがって、本論では始発部分に具現された主題がCU内では単に隠れていると捉えることとする。このような始発部分に具現された主題は、そのCU全体に影響を及ぼすことから、スープラ主題(Supra Theme=ST)と呼ぶ。

以上の点から、テクスト内に隠れているとされる主題は、伝達的機能からみてスープラ主題を基とした覆面要素からなる主題であり、これを本論では覆面主題(Veiled Theme=VT)と呼ぶ。さらに、対人的機能として隠れた定性は、それを含有する覆面題述(Veiled Rheme)と呼ぶことにしたい。さらに、CU内で一見主語 のように見える「が」を伴う要素も、あくまでもCU内に具現するスープラ主題と関連がある主題によって解釈がなされるという分析から、それはスープラ主題によって導かれた帰結主題(Consequence Theme=CT)と呼ぶ[11]。この帰結主題には当然ながら、スープラ主題に関連した覆面要素(Veiled Element=VE)が必要となる。

したがって、本章では、一般に知られた主語という概念ではなく、ハリデーの言うテクスト形成的機能から捉えた主題という概念を拡大し、機能的範疇が異なる意味で、主語に替わる概念として、主題という概念を用いて分析する。以下ではこの主題という概念に基づき、本論で提唱するCU分析に沿って、テクスト分析を進めることにする。

先ずは、日本語テクストとして、「衛星ひとみの分解　宇宙の藻くずになってしまう」と題された『読売新聞社説　2016年4月23日』の冒頭部分を見てみよう。

(8)　観測衛星がばらばらに壊れる重大事故である。残念な事態だ。X 線天文衛星「ひとみ」が、高度約580キロ・メートル上空で11個に分解していることが分かった。宇宙航空研究開発機構（JAXA）が2月に打ち上げ、本格観測前の動作確認を行っていた。3月26日に地上との正常な通信が途絶え、本体部分が異常回転しながら飛行しているのが確認された。姿勢制御システムの誤作動により、「ひとみ」が自らの姿勢を把握できなくなったのが原因とみられる。回転を止めようと、エンジンが自動噴射されたが、予め入力されていた設定値が誤っていたため、回転がさらに速まった。この遠心力で、観測装置や太陽電池パネルの一部などが引きちぎられたと考えられる。

このテクストも最初の節には「観測衛星が」という主語をもつ始発節から始まっている。しかし、次の単位にはもはや主語はなく、その意味では疑似節となる。しかし、これには始発節に具現された「重大事故」という情報から「重大事故は」という覆面要素があるとすれば、「重大事故は残念な事態だ。」と明確に主題－題述が備わった単位になる。しかし、ここでは「重大事故は」具現されておらず、またこれは前節の題述となる要素が、次単位の主題として理解されていると考える。即ち、「重大事故は」とは、主題展開により、前節からの結束により出現してくる要素であるが、これは具現していない要素である以上、これは主語とはいえない。このようなテクスト上には具現しない主題は、覆面主題として分析される。次に「X 線天文衛星『ひとみ』が」という新しい主語が具現するが、これは、前節では「観測衛星」と一般化して述べていた衛星に対し、具体的にその観測衛星について述べていくのに、X 線天文衛星「ひとみ」がという具体的な名称をもつ衛星であることを明示したからである。その意味では、この主語は新しい始発主題である。したがって、「ひとみ」という観測衛星を新たなスープラ主題として分析する。これに続くテクストには「宇宙航空研究開発機構が」が主語であることから、ここからまた新しい CU が展開するかに見えるが、ここには宇宙航空研究開発機構が打ち上げたのは、何かは述べられていない。そこで、スープラ主題から導かれる「ひとみを」という覆面要素を補うと、「宇宙航空研究開発機構 (JAXA) が 2 月に打ち上げたのは「ひとみ」であり、この「ひとみ」について「動作確認」を行っていた」という記述であることが理解できる。言い換えれば、新しい主語である「宇宙研究開発機構が」が打ち上げたのはまさしく「ひとみ」であり、その意味では、この目的語となる覆面要素「ひとみ」は、スープラ主題によってその情報が導きだせたことになる。そこで、これは新しい CU とは分析せず、先行する CU 内に属する単位と分析し、このような一つの CU 内に具現する新しい主語（スープラ主題とは関連を持たない）をもった単位であっても、CU 内のスープラ主題により意味解釈に影響を受ける単位は「付加的情報単位 Additional Information Unit = AIU 」と呼ぶ。これは、この単位に主語が具現しているとはいえ、伝達的機能からは同一 CU 内の他の要素にスープラ主題によって情報が補足されていると分析するしかしながら、ここでの留意点は、主語「宇宙航空研究開発機構」は「ひとみ」とは直接的な関係にない。したがって、これは後述する帰結主題とは性質を異にするもので、この主語がスープラ主題と直接関係がないという点で、AIU と呼ぶのである。この分析を用いなければ、新しい主語が具現する都度、無駄に CU の数だけを増加させることとなり、テクスト内の首尾一貫した内容とかけ離れた分析になる恐れがある。それを避けるためにも、本論では AIU という単位を提唱する。これにより、本分析が単に文法的機能としての主語からなる節を基本とし、これが新たな CU を創出するという分析ではなく、スープラ主題に導かれた覆面要素を持ったテクスト的機能からなる伝達的機能を重視した分析であるという点に留意するべきである。 さらに、この点から、AIU 内には具現しない目的語も CU 内にある AIU

であるからこそ、これらの目的語が「ひとみ」であると理解することができるのである。即ち、「宇宙航空研究開発機構(JAXA)が 2 月に打ち上げ」たのは、「ひとみ」であり、「宇宙航空研究開発機構(JAXA)が、「ひとみ」の本格観測前の動作確認を行っていた」という分析が可能となる。従って、ここではこの「ひとみ」には主題という概念は用いることはできないが、「ひとみ」が CU 内での一連の覆面要素 (Veiled Element=VE) として分析することは可能であろう[12]。

これに続く、「3 月 26 日に地上との正常な通信が途絶えた」のも、主題となる要素が欠落しているので、何について話しているのかは理解しにくい。しかし、日本語母語話者にとって、これは覆面主題である「ひとみ」をテクスト理解において常に補足して理解しているので意味解釈には問題はないと言えよう。即ち「（ひとみは）3 月 26 日に地上との正常な通信が途絶え、」と解釈するのが妥当である。同様に、「本体部分が」では、これが主語であるが、これも「（ひとみの）本体部分がとならなければ、何の本体かは明白でない。したがって、ここでも「ひとみ」という覆面要素を補うことから理解できる帰結主題ととるのが妥当な解釈ということになる。

しかし、この部分を英語に翻訳するとなると、必ず、「ひとみ」を主語とした「ひとみ」もしくは前段から受け継ぐ主語の要素として、she などの代名詞が主語として必要となり、これによって節という完結した単位として分析されることになろう。この点からも日本語は節という完結した単位を基本単位にしていないという傍証となろう。

同様に、次節では「自らの姿勢を」という記述があるために、自らとは何かを正確に理解させる為に、再度「ひとみが」という主語が用いられている。これ以後は「（ひとみは）回転を止めようと」のように、「ひとみ」は覆面主題として扱われている。また、この節では、①エンジンが自動噴射された、②設定値が誤っていた、③回転がさらに速まったという 3 つの節が節複合として具現されている。しかし、ここでも①「エンジンが自動噴射された」のは「ひとみ」のエンジンであり、②「設定値が誤っていた」のも「ひとみ」であり、さらに③「回転がさらに速まった」のも「ひとみ」であることから、この一連の節複合にはすべて「ひとみ」という覆面要素を設定することが可能である。

特に、①において「エンジンが」という明白な主語が具現しているが、この位置は決して節頭ではなく、節中に置かれていることにも注意する必要がある。いわゆるここでは明白な主語がマテジウスのいう「文の核＝題述」として具現されているので、主語であるにもかかわらず、英語のように節頭には具現していないことになる。実は、この要素は「が」を伴う要素として、「エンジンが」「設定値が」「回転が」という 3 つの主語と理解されるが、これも何のエンジンで、何の測定値、何の回転かというと、すべて「ひとみ」というスープラ主題に帰結する覆面要素であることが分かる。したがって、このような要素は CU 内の覆面要素を含む帰結主題と分析できる。これによって、この CU 内では、「ひとみ」というスープラ主題の基で、覆面主題、帰

結主題と分析される要素が適切に運用されているといえるのである。

以上のように、テクストを一つの CU として分析すれば、始発節に具現した主語＝主題（ひとみ）は CU 内で話の内容を適切に伝えるために確実に保全されてスープラ主題という機能から覆面主題へと変化することによりテクストが展開される。また、CU 内では主語と見える要素が具現しても、内容理解にはスープラ主題を基にして補足しなければならない情報が必要であることから、帰結主題や付加的情報単位という概念が必要となる。その意味でも日本語には文法的な意味での主語は明示されなくても、テクスト内では主語にかわる主題という概念のもとに適切に意味理解がなされていることになる。コミュニケーションにおいては、一つの命題を述べるのに、「誰が」「何が」あたる要素が無ければ内容把握は極めて困難になる。その意味でも日本語には主語がないのではなく、主題という概念にとってテクストが展開されているのであり、これをもって分析すると、CU 内での一連の内容展開が問題なく理解することができる。

以下では、主語を主題という概念に置き換え、それに結束された覆面要素を含む覆面主題や帰結主題を補うことで、「ひとみ」というスープラ主題を基にした主題展開がなされる。これにより、テクスト(8) は CU という形態をもったテクストであるということが分析できることを示したい。下記 (9) では、節構造を主として ST を基本として、VE を含む VT や CT などを用いて分析してみる。

(9) a [ST 1]観測衛星がばらばらに壊れる重大事故である。
b [VT]（重大事故は）残念な事態だ。
c [ST 2]X線天文衛星「ひとみ」が、高度約 580 キロ・メートル上空で 11 個に分解していることが分かった。
d 宇宙航空研究開発機構(JAXA)が [VE]（ひとみを） 2 月に打ち上げ、（宇宙航空開発機構が） [VE]（ひとみの）本格観測動作確認を行っていた。
e [VT]（ひとみは）3 月 26 日に地上との正常な [CT]通信が途絶え、
f [VE]（ひとみの） [CT]本体部分が異常回転しながら [VE]（ひとみの）[CT]飛行しているのが確認された。
g [VE]（ひとみの）姿勢制御システムの誤作動により、[ST 3]「ひとみ」が自らの姿勢を把握できなくなったのが原因とみられる。
h [VT]（ひとみは）回転を止めようと、[VE]（ひとみの）[CT]エンジンが自動噴射されたが、予め入力されていた [VE]（ひとみの）[CT]設定値が誤っていたため、[VE]（ひとみの）[CT]回転がさらに速まった。
i この遠心力で、[VE]（ひとみの）[CT]観測装置や太陽電池パネルの一部などが引きちぎられたと考えられる。

以上の分析結果から(9)を CU によって分析すると、(10) に示すように A、B、C という 3 つの CU に分析することができる。

(10) **A　観測衛星が　(ST1)**
1（重大事故は）(VT) 残念な事態だ
B　X 線天文衛星「ひとみ」が (ST2)————————————
1 宇宙航空研究開発機構が　（ひとみの）(VE)———— **AIU**
（宇宙航空研究開発機構が）（ひとみの）(VE)————
2（ひとみは）(VT1)————————————————
3（ひとみの）(VE) 本体部分が (CT1)————————————
4（ひとみの）(VE) 飛行しているのが (CT2)————————
C　（ひとみの）(VE)———**「ひとみ」が (ST3)** ————————
1（ひとみは）(VT) 回転を止めようと　————————————
2（ひとみの）(VE) エンジンが (CT1)————————————
3（ひとみの）(VE) 設定値が　(CT2)————————————
4（ひとみの）(VE) 回転が　(CT3)　————————
5（ひとみの）(VE) 観測装置や太陽電池パネルの一部など
が　(CT4)　————————

以上のように B、C のスープラ主題である「ひとみ」から導き出せる覆面主題「ひとみ」を明示的に表示することにより、(10 B1-4)、 (10C1-5)と分割された 2 つの単位は、すべて覆面主題(VT)、もしくは覆面要素(VE)を含んだ帰結主題(CT)となる CU とみることができる。その結果、A に具現する「観測衛星が」という独立した CU に加え、このテクストでは 3 つの CU を用いて、「ひとみ」を基礎に展開されていると分析できる。特に A という CU には「ひとみ」という語彙は具現していないものの、ここでいう観測衛星が、「ひとみ」を指しているのは明白であろう。しかし、通常日本語においては、(9) に示すようにすべての主題や覆面要素がテクスト上に具現することはまれである。よって日本語テクスト分析には、この非明示な要素である覆面要素を含む覆面主題や帰結主題と呼ばれる概念が必要とされる。したがって、これらはテクスト上に具現することはないので、「日本語には主語がない」ということでなく、CU と分析される単位の中で、主語は隠れた主題「覆面主題」として認識される。また，主語が具現されているように見える単位にも、実は意味内容を正しく理解するには、スープラ主題からの情報を補い、それによる覆面要素を含む主題(CT)として分析される必要がある。これにより、このような主語を伴う主題は帰結主題と分析されるのである。さらに、CU 内の一見スープラ主題と関係ない主語を備えた単位には「付加的情報単位(AIU)」という分析が必要とされ、今回の分析では、その中で目的語が隠れている場合は、それらはスープラ主題により導きだせる覆面要素として分析を行った。

5. おわりに

以上のように the Kyoto Grammar の枠組みによる CU 分析とは一つの明確な始発単位の主題（通常は ST としても具現するが、この場合は、主語と主

題とを併せ持った要素とみる）を基準として、そのスコープが及ぶ範囲までをいう。そのために、通常は、(10B,C) のように、覆面主題や帰結主題を含む比較的長いユニットを構成することもあれば、(10A) のように文法的要素とされる主語と定性からなる単独節と同一視される単一のユニットであることもありうる。このように、CU とは、文法的な節とは異なり、テクスト理解に関わる意味の結束性と主題という要素とを絡めた新しいテクスト形成的機能から見た集合体としてのユニットであることを理解されたい。本テクストでは節や疑似節、あるいは節複合という文法的な観点を見据えた上で、主語を主題という概念で置き換えて示したが, その結果､(9) に示したように、節や疑似節など 9 つの単位として展開される。しかし、CU 分析によると、これは 3 つの CU から構成されることになる。このように CU という分析方法は従来の文法的な展開とも異なる分析である。CU というテクスト形成的なメタ機能からの単位を提唱しているので、ここでは文法的な主語という概念を用いず、あくまでも主題という概念のもとで分析を行った。特に、主語という要素が具現しているにもかかわらず、その主語は ST とは関係なく、目的語にあたる覆面要素に ST からの情報を付加しなければ意味内容が理解不足になる場合は、付加的情報単位(AIU)とした。これはこの主語が新しいスープラ主題ではなく、同じ CU 内の情報単位として分析するという方法を提唱した。この分析によると、例えば「（ひとみの）自己修理とそれによる無事な航行を楽しみに待ちたい。」のように、主語がなくそれ故、筆者と読者を一体化した「我われ」という主語を補足した場合に意味理解が可能な単位が生じた場合の分析にも適用することができる。いわゆる英語でいう editorial we が省略されているような要素であるが、これにはそれが属している CU 内の AIU として分析することにより、その主語がスープラ主題とは異なる（この場合は「我われ」）からといって、新しい CU を設定する必要はなくなるのである [13]。

これにより、CU という単位が単に文法的な主語という概念をもとにした単位とは異なる概念であることを理解する必要がある。日本語テクスト分析を行う基本単位としての CU を用いることで、母語話者としての日本人がテクスト分析において認知的に意味内容を正しく理解することが可能となり、日本語テクスト理解の方策の一つとして、日本語学習者にもテクスト理解に役立たせることができる。その意味で、テクストの CU 分析とは、日本語の実勢的な観点から見た分析に適したテクスト分析であり、主語という文法的な概念にとらわれず、主題という観点から分析できるという利点があるのである。

以上、本論では the Kyoto Grammar の枠組みで CU という単位を提唱し、その中で結束性をもって具現される種々の主題という概念を用いて日本語のテクスト分析が可能なことを見てきた。マテジウスが提唱し、チェコ語のテクスト分析に用いた主題という概念を基に、日本語では常に主題が節頭に具現する必要がないという点をみた。マティセンによって、コンテクストという概念をもって拡大解釈された SFL の主題の定義が, 従来の単独節の分析

のみならず[14]、集合体としての単位に適用されるとするなら、本論でいう CU という集合体もその対象になりうる。このような集合体としての主題分析を用いるなら、SFL で分析されている英語という個別言語に見る主題分析（この場合は，主題は常に節頭に具現する要素となる。）に限らず、日本語の主題構造にも有用であるということができよう。これにより、SFL の日本語分析に新しい視点をもって理解されれば、筆者としては望外の喜びである。

註

1. ここでの SFL とは M. A. K. Halliday によって提唱されている言語理論のことで、 詳しくは *An Introduction to Functional Grammar, 2nd ed.and 3rd ed.*を参照のこと。
2. ラテン語では *cogito ergo sum*　I think therefore I am. のように、*cogito* や *sum* は *ego* が内包されているので、英語訳のように**ego cogito ergo ego sum* とはならない。
3. 本論では、主題を SFL の術語として扱う場合は、Theme とし, 一般的な術語としては、theme のように t は小文字で表記する。
4. Mathesisus によって提唱された術語である「陳述の基礎」とは *základ výpovědi* であり、「陳述の核」とは *jádro výpovědi* である。*výpovědi* は「発話、伝達」の意もあるが、飯島周訳（『ヴィレーム･マテジウス　機能言語学』）にならい、「陳述」とする。これらの英訳形は the basis of the statement と the nucleus of the statement となるが、一般にはこれが theme と rheme ということになる。
5. この場合 *Jan* を主題として後続する一連の「彼は」（ここでは *mu* ）が the Kyoto Grammar における Veiled theme（覆面主題）という概念として分析することができる。
6. 要するに、ハリデーは 3 つのメタ機能解釈から単節を用いて、本論でも示したように観念構成的、対人的, テクスト構成的の 3 点から節の要素を主語、行為者、主題と分析したが、主題については単節ではなく、発話として、集合体として分析することが重要な点である。
7. 久野（1973）p. 27-「『ハ』と『ガ』（その一）（その二）」を参照のこと。
8. 大野（1999）p. 46-「文法なんか嫌い―役に立つか」を参照のこと。
9. 三上（1960）p. 117-　また「ピリオド越え」については第 2 章 2 以降参照のこと。
10. ここでの初出とは、CU 内で具現される「が」を伴う単位である。しかし、CU 内の「が」を伴う要素もスープラ主題と関連がつけられない場合は、それは主題ではなく、単に主語と分析する。
11. スープラ主題や覆面主題、帰結主題についての詳しい説明は龍城(2004)を参照のこと。
12. 一方で、先述の如く、本節では「宇宙航空研究開発機構（JAXA）が」として、明確な主語が具現しているが（故に AIU と分析）、この主語は CT とはなり得ない。したがって、ここには主題となる要素は曖昧である。この

ように明確な「が」が付与された主語を含む CU 内で CT となりえない節では、スープラ主題から導き出せる覆面要素の目的語も一種の主題として分析することは可能かと思われる。即ち、テクスト内での首尾一貫性を考えると、まさしく CU 内での覆面要素であるからこそ主題として分析可能となる。言い換えれば,復元可能であるからこそ、CU 内での覆面要素になるのであり、よって,これは首尾一貫性のあるテクスト、即ち CU 内での主題であるといえる。英語の主題は周知の如く、節頭という位置によって決定されるが、日本語のように語順が比較的自由な言語では、主題が常に節頭に具現するとは言い難い。そもそも主題とは、その節の中で話し手が一番伝えたい事項とするなら、それは既述の項目（覆面要素となりうる）であれば、これは目的語であってもそれを主題として分析することは可能である。しかし、この分析では、あくまでもその目的語となる覆面要素が CU 内のスープラ主題から導くことが可能で、その節には明確な主語「が」を伴っているが、同じ CU 内での CT にはなり得ない場合としたい。この場合は、例えば、Veiled Object Theme(OBT)という名称が適当かもしれない。言い換えれば, この要素は覆面要素であっても、単なる「目的語省略」ではないと言える。要は主語と主題とは同一ではなく、また主題が英語のように節頭という位置に限るものではないという点が重要である。この点こそが日本語の主題構造の特徴ではないかと考える。しかし,これは、まだ試論の段階で、この分析にはさらなるデータ分析や明確な定義が必要となろう。

13. 実際に、 このような例として、「（我われ）は（はやぶさの）無事な帰還とカプセルの中身を楽しみに待ちたい。」という記述が読売新聞社説（2010.6.12）にある。ここでの主語は明らかに、editorial we としての「我われ」であるが、この主語は CU のスープラ主題である「はやぶさ」とは関連はない。

14. もちろん、主題についての主題展開(thematic progression)に関しては、集合体としての分析はあるが、かといって、この場合も theme-rheme の分析単位としては単独節であることに変わりはない。

参考文献

Eggins, S. (1994) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*. London: Pinter.

Eggins, S. (2004) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics* (2nd ed.). London: Continuum.

Eggins, S. and Slade, D. (1997) *Analyzing Casual Conversation.* London: Cassell.

Fawcett, R. P. (1997) Invitation to systemic functional linguistics: The Cardiff Grammar as an extension and simplification of Halliday's systemic functional grammar. *Helicon,* 22: 55-136.

Halliday, M. A. K. (1967) Notes on Transitiity and Theme in English Part 2. *Journal of Linguistics* 3.2: 199-244.

Halliday, M. A. K. (1973) *Exploration in the Functions of Language*. London: Edward Arnold.

Halliday, M. A. K. (1976) *Halliday: System and Function in Language*. Oxford: Oxford University Press.
Halliday, M. A. K. (1978) *Language as Social Semiotic: The Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Edward Arnold.
Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Arnold.
Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2nd ed.*. London: Arnold.
Halliday, M. A. K. (2005) *Studies in English Language (Collected Works of M. A. K. Halliday, 7)*. London: Continuum.
Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1985) *Language, Context and Text: Aspects of Language in a Social-semiotic Perspective*. Geelong, Victoria: Deakin University Press.
ハリデー.M.A.K. &ハサン.R. (1991) 『機能文法のすすめ』（筧壽雄訳）東京：大修館書店
Halliday, M. A. K. and Martin, J. R. (eds) (1981) *Readings in Systemic Linguistics*. London: Batsford.
Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (1999) *Construing Experience through Meaning: A Language-based Approach to Cognition*. London: Cassell.
ハリデー、M.A.K. (2001)『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』（山口登，筧壽雄訳）東京：くろしお出版
Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar 3rd ed.*. London: Arnold.
Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar 4th ed.*. London: Routledge.
久野暲(1973) 『日本文法研究』東京：大修館書店
Mathesius, V. (1961) *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis.* Hague: Mouton.
マテジウス、V. (1981) 『ヴィレーム・マテジウス　機能言語学』（飯島周訳）東京：桐原書店
Martin, J. R. (1992) *English Text: System and Structure*. Amsterdam: John Benjamins.
三上章 (1960)『象は鼻が長い』東京：くろしお出版
大野晋 (1999)『日本語練習帳』東京：岩波書店
龍城正明 (1997)「選択体系機能言語学における基本概念と主要術語：transitivity の解釈を中心に」『月刊言語』4 月号，pp. 86-97．東京：大修館書店
龍城正明 (2004)「Communicative Unit によるテーマ分析　The Kyoto Grammar の枠組みで」『同志社大学英語英文学研究』76: 1-20．同志社大学人文学会
龍城正明（編）(2006)『ことばは生きている：選択体系機能言語学序説』東京：くろしお出版
龍城正明 (2008)「『は』と『が』のメタ機能からの再考」*Proceedings of JASFL* 2: 135-149．日本機能言語学会
龍城正明 (2009)「The Kyoto Grammar と日本語分析」『日本語学』4 月号, pp. 60-72. 東京：明治書院
Ventola, E. (ed.) (1987) *The Structure of Social Interaction: A Systemic Approach to the Semiotics of Service Encounters*. London: Pinter.

山口登 (1991)「ハリデーの主要術語集／著作案内」『月刊言語』4 月号, pp. 78-81. 東京：大修館書店

Young, D. J. (1980) *The Structure of English Clauses*. London: Hutchinson & Co. (Publishers) Ltd.

Rhetorical Unit分析のフレームワークの再構築
Reformulation of the framework of Rhetorical Unit Analysis

三宅英文
Hidefumi Miyake
安田女子大学
Yasuda Women's University

Abstract

Systemic Functional Linguistics (SFL) focuses on field, tenor, and mode in context and places them in its linguistic theory. Rhetorical Units, advocated by Cloran, are one of the frameworks that explain intermediate structural units of texts in terms of the material situational setting. They are an interesting format to investigate the relationship between context and text, well-suited to the analysis of mother-child conversations. However, it is sometimes difficult to apply this format to analyses of other text types. The main reason for this seems to lie in the adoption of modality in the time axis of event orientation and the coupling of first- and second-persons in the central entity axis. Therefore, this paper tries to reformulate the framework of Rhetorical Units so that they can better account for other text types.

1. 研究目的

SFL は言語とコンテクストの関係を重視する理論である。これまで、それらの関係について多くの議論がなされ、いくつかのモデルが構築されている。Cloran (1995, 1999, 2000, 2010) の提唱する Rhetorical Unit（修辞ユニット、以下 RU）もその一つである。このモデルは、Bakhtin の chronotope (chronos = time; topos = space) という概念を基にしており、SFL 理論の意味層において時間と空間の組合せからテクストを構成する下位単位を考察しようとするものである (Cloran 2010: 29)。

このモデルは、彼女の研究対象である母子間の会話の構造特性をうまく説明できるように作られている。しかし、それ以外のテクストの分析に用いると、時折うまく分類できない例に出くわすことになる。そこで本論文では、RU の問題点を探り、それを改善することで RU をより幅広いテクストの分析に対応できる形に改変する。

2. SFL 理論における言語とコンテクストの関係

コンテクストへの依存を議論する際、最も分かりやすい例は、コミュニケーションが行われている場面状況 (material situational setting) への言及がどれだけ行われているかということである。これは、典型的には exophoric な表現として具現される。This や I、here、today などの deixis を含む言語活動は、material situational setting に直結していると考えられる。しかし、SFL 理

論においては、それ以上の側面が検討の範囲に含まれている。

Martin (1992: 509) はコンテクストと言語の関係について、"… mode mediates contextual dependency — the extent to which a text constructs or accompanies its field." と説明している。ここで Martin が述べている mode とは、"the role language is playing in realising social action (1992: 508)" である。これは、音韻のレベルの tonality と tonicity、節レベルの Theme と Information、名詞句レベルの deixis、動詞句レベルの tense、節と句レベルでの substitution と ellipsis などの文法項目が関連すると説明している。同時に、mode は interpersonal および experiential の機能の仲介をするため、interpersonal な側面では monologue か dialogue かという semiotic space、experiential な側面では、action か reflection かという semiotic space に関与している。

Martin and Matruglio (2013) は、この Martin (1992) のコンテクストと言語の関係についての議論を整理し直し、3 つメタ機能におけるコンテクスト依存性を次のようにまとめている。

> From the perspective of textual meaning, the key variable is **implicitness** — to what extent does a text depend on exophoric reference, substitution or ellipsis (to its material situation setting to use Hasan's term …) and in addition scaffold its composition with layers of high level periodicity. From the perspective of interpersonal meaning the key variable is **negotiability** — to what extent is a proposition or proposal arguable, and if arguable, to what extent does arguability depend on the moment of speaking (in terms of temporality or modality). From the perspective of ideational meaning the key variable is **iconicity** — to what extent are semantic relations realised as congruent configurations of process, participant and circumstance which unfold in discourse in the sequence in which they occur in the field. Grammatical metaphor, …, is a powerful resource for composing high level Theme and New, for adjusting negotiability (as 'direct' vs 'indirect' speech acts) and scrambling iconicity (as everyday vs heavily 'nominalised' discourse). (Martin and Matruglio, 2013: 89)

Cloran の RU は対人的な側面を重視したモデルであるため、その有効性を考えるために、ここでは Martin and Matruglio (2013) の唱えるコンテクスト依存性の中でも特に対人的側面を中心に検討を加えたい。

Martin and Matruglio (2013) によれば、対人的な意味におけるコンテクスト依存性は直接 negotiation が行える状況にあるかどうかに関わる問題である。これは、(1)人称、(2)時制、(3) modality、(4) aspect によって左右される。

まず、人称についてであるが、exophoric な表現において、直接 negotiation に関与できる 1 人称、2 人称への言及の方が、3 人称への言及よりもその場のコンテクストへの依存性が高い。また、話題の中心は節の主語 (Subject) によって示されるため、1 人称、2 人称が主語として取り上げられるほどコンテクストへの依存度が高くなると考えられる。

次に時制の問題であるが、現在時制の方が過去や未来時制よりもコンテクストへの関連性が高くなる。Martin and Matruglio (2013) は現在時制の中でも「現在」と「現在の現在」を区別し、次のように述べている。

> With material and behavioural processes, simple present tense in English refers to habitually recurring events, not specific ones (e.g. *the students laugh a lot in history class*.) The choice of simple present or present in present tense is thus an important variable as far as contextual dependency is concerned. Although habitual recurring events can be associated with specific participants (i.e. *John laughs all the time in history class*), they tend to be associated with generic participants (i.e. *the students laugh a lot in history class*), further weakening contextual dependency. (Martin and Matruglio, 2013: 81)

Modality を用いた表現は、時間と出来事の関係を分断するため、コンテクストへの直接的依存性を減少させる。その一方で、発話時点における話者の出来事に対する判断を表す役割も果たしている。

> Modality does however involve subjective assessments of probability, usuality, inclination, obligation and ability on the part of speakers (in declaratives) and listeners (in interrogatives), and so is in a sense interpersonally dependent on the moment of speaking. (Martin and Matruglio, 2013: 81)

John might be staying at a different hotel. は、「現在の現在」時制に生じている出来事に対する発話時における話者の予想である。つまり、modality は出来事が生じる時間を表す時制とは別の形で material situational setting と関わっているのである。

Aspect も脱文脈化に関わる要素である。Halliday (1994: 241, 278) の述べる aspect（-ing や to 不定詞で表される imperfective / perfective）表現については、その部分が含む命題は直接交渉の対象にならないため、コンテクストへの依存度が低くなる。たとえば Did you see him playing the piano? という節においては、あなたが見たか見なかったかが直接の問題となり、「彼がピアノを弾いていた」という部分は交渉の対象から外れてしまうのである。そのため、この部分はコンテクスト依存性が低くなる。

Martin and Matruglio (2013) は、modality と aspect の問題に絡めて if 節や投射節についても言及している。**If you can't find an answer**, get someone to help you. や Do you wanna **go and get my box**? という節を例に挙げ、以下のような説明をしている。

> In the conditional example above, the teacher displaces student's ability to find an answer from the here and now by constructing it as a supposition; in the proposal example, the teacher displaces her proposal that the student get the box by formulating a more indirect request, projecting her proposal with a question as to whether the student wants to do or not. In either case, the clause in bold is not only directly negotiable (not directly arguable as discussed above), but is further removed from the here and now as either a 'modalised' proposition with an 'if' about it (condition) or a modulated proposal about potential action (projection). (Martin and Matruglio, 2013: 82)

条件文や投射節を用いた表現は、第一に直接的な交渉の対象から外れる部分となること、第二に対人的文法メタファーによって現場性を低下させることにより、コンテクスト依存度を低下させる働きがあるのである。

以上の 4 つが interpersonal な側面におけるコンテクストの依存性を決定する要素である。次のセクションでは、Cloran の提唱する RU の特定方法に着目し、これらのコンテクスト依存度を左右する要素がどのように取り込まれているのかを考察する。

3. Cloran の RU モデル

3.1. RU の理論的背景

Cloran (2010) の提唱する RU は、意味層における枠組みである。Hasan (1996: 117-8) によれば、意味層は 4 つのランクから構成されている。

> … I would propose a four-unit rank scale at the semantic level; moving from the largest to the smallest these are: text, rhetorical unit, message and text radical.

Text radical とは、意味層における最少の単位で、message を作り出す entity、event、quality などの要素である。これらの要素は、語彙・文法層において、それぞれ名詞句、動詞句、形容詞句などによって具現化される。

次に、Text radical の組合せによって message が構築される。Hasan (1996) によると、message は [punctuative] な特性を持つ単位と [progressive] な特性を持つ単位で構成されている。

[punctuative]な特性を持つ message とは、小節および定形表現のことである。この中には、“Good morning.” や “Hi.”、“How do you do?” “Have fun.” といった挨拶表現に加え、“Great!” などの感嘆表現、“Yes.” や “Never.” 等の簡略化された返事表現が含まれる。これらの表現は形式が決まっており、拡張性がない。

一方、[progressive] な要素を持つ単位は、およそ clause または clause complex に相当する。この単位は、語彙・文法層において観念構成、対人、テクスト形成機能を含んでいる。ただし、[progressive] な message であっても、投射節を伴う節複合については、以下のような条件がある。

> … a message is said to be construed by a clause which is ranking (non-embedded) and non-projected. This means that wherever a clause complex is formed by two ranking clauses which are related by the logico-semantic relation of projection … then only a single message is construed. … a projecting clause cannot construe an element of the generic structure of a text ... (Cloran, 2010: 31)

投射を伴う節複合の場合、投射する側の節は情報源を表し、投射された側の節が内容を表している。従って、投射された側の節が message として扱われることになる。

Cloran (2010) は、これらの [progresseive] な要素を持つ message において、対人機能の Mood 構造を RU の決定要素としている。

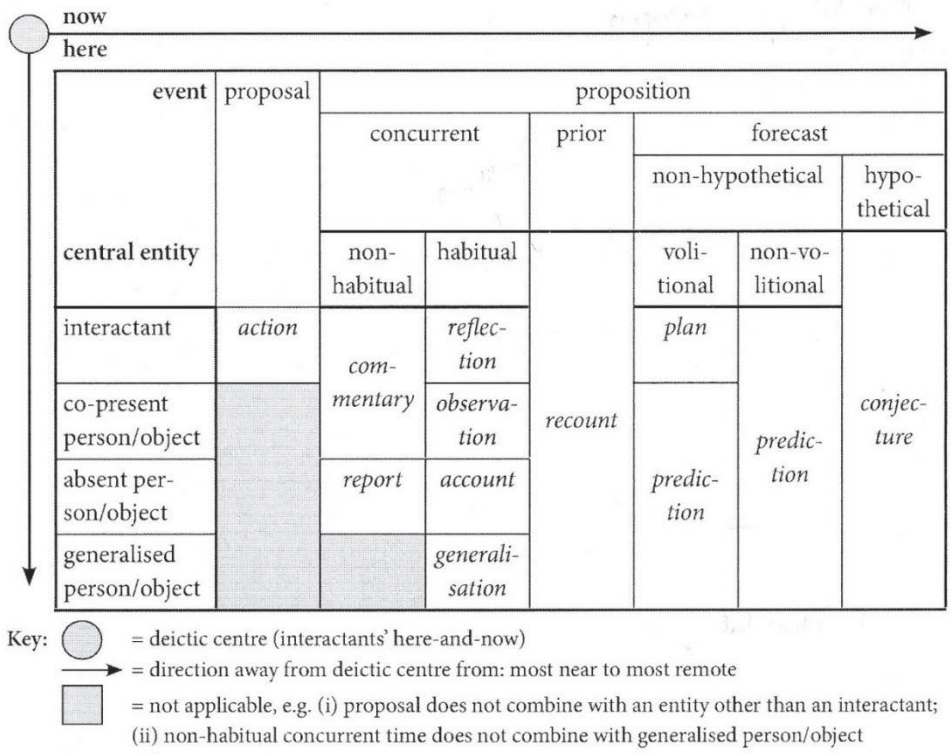
> Thibault shows how the self and its agency emerge in and through the self’s dialogic engagements with others … via the interpersonal grammatical resources of the mood

system in which are located the various categories of space- and time-in-relation-to-the-self, i.e. the instantiations of the Mood categories Subject and Finite. These same resources provide the specific categories for the classification of a unit of discourse called the rhetorical unit … (Cloran, 2010: 29-30)

3.2. RU の特定

RU は、Speech Function（発話機能）、Central Entity（中核要素、以下 CE）、Event Orientation（現象定位、以下 EO）の 3 つの要素によって決定される。Cloran の提唱する RU モデルは徐々に変化しているが、2010 年モデルの枠組みは下記のようになっている。

表 1: Values of central entity and event orientation in the identification classes of rhetorical unit



(Cloran, 2010: 52)

Speech Function は、そのコミュニケーションが goods-and-services のやり取りを主な目的としているのか (proposal)、information のやり取りを主な目的としているのか (proposition) によって区別される。Cloran は、言語の役割が補助的 (ancillary) であるほど現場依存性が高く、構成的 (constitutive) であるほど現場依存性が低いという視点から、proposition よりも proposal の方が deictic center に近いと考えている。

CE は、その message の中で話題の中心となっている entity である。その役

割は Mood 構造の Subject によって表される。ただし、Subject が経験的な意味を持たない場合には特殊な割り当てがなされる。Cloran (1995) によれば、It's raining. の場合には CE は存在せず、It's lucky that we left early. のような Thematized comment を持つ節は that we left early、It's July that is the coldest month. のような predicated Theme を持つ節は July が CE となる (Cloran, 1995: 378)。また、there is 構文の場合、existent を CE とする (Cloran, 1995: 379)。これらの CE が、material situational setting に存在するものなのか、存在しないものなのかが RU の区分の基準の一つとなる。

EO とは、その発話で描写されている event が concurrent、prior、forecast のどの時間枠 (temporal reference)に位置づけられるかという問題である。この時間枠は主に Mood 内の Finite、Residue の circumstantial adjunct、または時を示す従属節との関連によって決定される。Cloran (2010: 41-42) は We are beginning work next week? という例文を用い、"the temporal reference of the event is realised by the adjunct *next week*" と説明している。つまり、この例文の語彙・文法層における「時制」表現は「現在の現在」であるが、未来の時を示す circumstantial adjunct によって意味層における時間枠は forecast に分類されるようになるのである。

Concurrent、prior、forecast の 3 つの時間枠で、一番現場性が高いのは「現在」時制で示される concurrent である。Concurrent の時間枠は、習慣性・繰り返しの有無によって non-habitual と habitual に下位分類される。現在の発話の場面と同時に生じている状態や一度きりの行動は non-habitual に分類され、発話時に縛られない習慣的行動、状態は habitual に分類される。

また、Cloran は、EO の中に時間の概念以外の要素を取りこんでいる。

> Events may be construed not only in terms of time but also in terms of speaker's assessment of their probability and/or necessity. Indeed, events may even be hypothesized, i.e. predicted to (possibly) occur *if* certain conditions pertain. (Cloran, 2010: 42)

Cloran は、forecast を non-hypothetical なものと hypothetical なものに区分し、更に non-hypothetical なものについては volitional なものと non-volitional なものに下位分類している。

Cloran の提唱する RU は、以上のような Speech Function、CE、EO によって区分され、Action、Commentary、Report、Reflection、Observation、Account、Generalization、Recount、Plan、Prediction、Conjecture の 11 の RU が設定されている。Cloran (2010) は、このようにして導き出された RU とコンテクストとの関係を以下のように説明している。

> … those RUs closest to the ancillary end of this continuum are those in which the rhetorical configuration is such that (a) the central entities are the interactants themselves, and (b) the events referred to are occurring concurrently with the moment of speaking or will occur immediately as a consequence of the message (as in the RU Action). This way of thinking about the RU classes permits us to postulate them as the relevant categories

in the realisation of the role of language in the social process. (Cloran, 2010: 53)

RU 同士は、text の展開において中心的な役割を果たすものとそれをサポートするものの組合せを作り出し、そのような RU の結束構造が集結してある text を構成するのである。

4. RU の枠組みの検討

4.1 EO の問題

Cloran の RU モデルは、Martin and Matruglio (2013) に挙げられている interpersonal な側面のコンテクスト依存に関わる人称、時制という要素をうまく取り込んでいる。話題の中心となる主語に用いられる人称は CE として、出来事の生じる時間は EO として、それらの組合せが here and now をコンテクストの中心とする material situational setting からどのくらい離れているかを示すことができるようになっている。

しかし、この枠組みを運用してテクストの分析を行おうとするといくつかの問題に遭遇することになる。第一の問題は、EO において時間の概念と modality の概念が共有されていることである。これは、RU モデルが当初から抱えている問題である。

RU モデルの EO の歴史的変遷は下記のようになっている。

表 2: EO in Cloran's 1999 Model

Prior	Concurrent		Future		
	Non-habitual	habitual	Goods & Services exchange	Information exchange	Hypothetical (possible-conditional)

表 3: EO in Cloran's 2000 Model

Habitual	Realis		Irrealis		
	Concurrent	Prior	Goods & Services Exchange	Information Exchange	
				Forecast	Hypothetical

1999 年モデルでは、EO は時間軸に沿った時間枠の設定となっているが、2000 年モデルでは realis と irrealis という概念が導入され、時間枠の中から future という枠組みが消えている。この形がそのまま 2010 年モデルに引き継がれ、今度は forecast を上位概念として non-hypothetical と hypothetical の区分がなされるようになっている。

もともと 1999 年モデルにも存在した hypothetical という EO カテゴリーであるが、Future 内の information exchange と hypothetical の区分は message の Finite によって判断されるようになっていた。

> It was further predicted that the regulative context may also contain some rationale for the action. In fact, this element occurs in both extracts. In both, the rational involves the forecasting of the possible consequences which are inherent in the child's actions. The rationale is couched in slightly different terms in each extract however; in Extract 3, the forecast is construed by the RU Prediction, in Extract 4 by a Conjecture. There is a degree of certainty about the predicated consequences in Extract 3 which is lacking in the Conjecture of Extract 4. (Cloran 1999: 48)

この Extract 3 に当たる message は、"if you fall off that chair you'll hurt your back … (Cloran 1999: 47)" であり、Extract 4 に当たる message は "if you fall back, you might crack your head (Cloran 1999: 48)" である。つまり、これらの例は両方とも Future を表すものであるが、will と might の差が Prediction と Conjecture の RU の違いを生み出す差異となっているのである。

Cloran の 2010 年モデルでは、Conjecture RU を下記のように定義している。

> Speaker predicts what **might** happen at some future time given certain **conditions**. The actualization of a **possible** future event is **conditional** on the occurrence of some other event. (Cloran, 2010: 69)

ここで注意しておかなければならないのは、このモデルの中では、modality によるコンテクスト依存性の低下は未来の時間枠の中でしか考えられていない点である。確かに未来の出来事と modality の間には、共に here and now に対して irrealis であるという共通点がある。しかし、先に挙げた Martin and Matruglio (2013) の指摘にもあるように、future の示す irrealis とは異なり、modality には「発言内容」と「発話時における話者の評価」を結び付けるという働きがある。また、Modality は未来の時間枠にのみ働く概念ではなく、どの時間枠にも適用できる概念である。そのため、未来の時間と modality の両者をひとくくりで考えるには無理が生じる。Cloran のモデルでは、現在の状況に反する仮定 If you had had proper breakfast, you wouldn't be hungry now. や過去の出来事に反する仮定 If I had passed the entrance examination, I would have gone to the university. における RU の特定ができなくなってしまうのである。このような時間軸とは別の脱文脈化は、比喩的な表現にも当てはまるだろう。そこで、modality や比喩によるコンテクスト依存性の低下を示すためには、三次元的なモデルを用意し、EO を表す時間軸とは別の軸を設定する必要が出てくる。

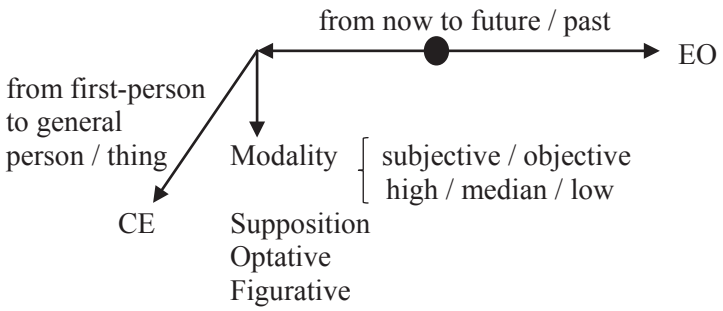


図 1: RU の確定要素

Modality や比喩を EO から切り離せば、種々の仮定表現、If only she were here. や I wish I had passed the exam. などの願望表現、I should have gotten up earlier. などの後悔を示す表現、He speaks as if he knows everything. などの比喩表現も純粋に event の生じた時間枠を中心に考えることができるようになる。If only she were here. は CE を she とする concurrent: non-habitual で optative Commentary、I wish he had passed the exam. は CE を he とする prior で optative Recount、I should have gotten up earlier. は CE を I とする prior で modalized Recount、He speaks as if he knows everything. は CE を he とする concurrent: habitual で Figurative Observation のように RU を特定できるのである。この方式に従えば、先の Cloran の you might crack your head. は modalized Prediction に位置づけられることになり、modality の軸を整備すれば、It is probable that you will crack your head.や I'm sure you will crack your head.などのような subjective / objective の差異や high / median / low の区別も可能になり、より明確に脱コンテクスト化を示すことができるようになるであろう。更に、この方式であれば proposition だけでなく、If I were you, I would take the job. のような助言に対しても、modulated Action という位置づけを与えることが可能になる。

次の問題は、EO の未来の時間枠の設定である。未来を語る場合、ある程度確定されたものと単なる予想である場合がある。たとえば、「現在の未来」時制 is going to do は、予定された未来 (We're going to eat out tonight.) あるいは現在知覚することができる状況から推測される未来 (It's raining. We're going to get wet.) を表す。同様に、「現在の現在」時制である be doing も、未来の時を示す circumstance を伴って予定を表すのに用いられる。これらは、現在の material situational setting に未来の行動や状態を決定する要因があるという点で、単なる未来の予測よりもコンテクスト依存度が高い。更に、話者のその場での決定を表す will do (Let's go drinking, shall we? という誘い掛けに対する I think I'll go home and have some rest.) も現在の時点で未来の行動に対する判断を下しているという点で現在の material situational setting に準拠する表現であると考えられる。

これらの表現で示される EO の時間枠を捉えるためには、意味層における未来の時間枠を 1 つにするのではなく、subsequent: presumed と subsequent: assumed という 2 つの枠を設定するのが良いと思われる。subsequent とは、prior（過去）、concurrent（現在）に続く未来を示す時間枠である。subsequent: presumed の枠に含まれる RU は、My next birthday will fall on Sunday.などのように必ず訪れる未来を表す Foreseeing、話者が発話時以前から立てている予定あるいは話者のその場での決定を表す Plan、雨雲という現在目の前にある根拠から降雨を予測する Deduction が考えられる。Promise (I'll never be late again.) や warning (I'll smack you if you do it again.) など話者の意思 (volition) を伴う表現は、Plan と同様の位置づけにすることが可能であろう。

このような 2 つの未来の枠組みを設定すれば、Huddleston and Pullum (2002) が指摘する now と will が共起するような例が解決される。

> Now we will have to wait until Friday. (Huddleston and Pullum, 2002: 212)
> Now we will / may not be in time to see the start. (Huddleston and Pullum, 2002: 210)

従来の Cloran の枠組みでは、now は concurrent、will は forecast の EO を指し示すため、これらの例文の EO の範疇分けは難しい。しかし、subsequent に帰属する 2 つの時間の枠組みを設定すれば、now は発話時のコンテクストへの言及あり、will have to wait、will / might not be in time to see は発話時から見た event の生じる未来の時間枠への言及となり、これらの表現はどちらも subsequent: presumed の時間枠に組み込まれることになる。また、modal verbal operator の扱いは modality 表現として別軸での扱いとなるため、will が may や might になっても EO の位置関係は変わらない。どの modal verbal operator を用いた場合も、EO は subsequent: presumed となるのである。

ただし、will は常に未来性を持つわけではない。Swan (2005: 194) の示す "Don't phone them now ― they'll be having dinner." の例では、will に未来性はなく、probability を表す modal verbal operator となっている。このような場合の EO は、circumstance である now の示す concurrent となる。

では、意味層において過去の細分化した時間の枠組みが必要であろうか。ここで問題になるのは、語彙・文法層における「現在の過去」時制の取り扱いである。この時制形式の表す意味を考えると、EO の過去の時間枠の細分化は必要ないのではないかと考えられる。

まず「過去」と「現在の過去」の示す時間的概念の差であるが、ここには重複が存在する。Swan (2005: 442) は、"We normally use the present perfect to announce news ... But when we give more details, we usually change to a past tense." と述べている。同じ時間枠に生じた event が、「過去」「現在の過去」の両方の時制で示されるのである。更に、Swan (2005: 444) は、ニュースの伝達の際、イギリス英語が「現在の過去」を用いるのに対し、アメリカ英語では「過去」を用いることを報告している。従って「現在の過去」で表される EO の

時間枠を判断する場合、ただ単に時制形式から判断するのではなく、発話内容と material situational setting との結びつきから判断する必要があるのである。Oh, honey, I lost / I've lost they keys. (Swan 2005: 444) のように過去に生じた event の伝達に重点があれば prior、I can't go on holiday because I have broken my leg. (Swan 2005: 438) のように現在残っている「状態」My leg is broken now. に重点があれば、concurrent に区分するのが適切であろう。

「現在の過去」 (has done / has been doing) の表すその他の意味を考えてみると、I have seen this film before. のような「経験」は、過去の積み重ねがその人の「現在の状況」に恒久的に影響を及ぼすため、concurrent: habitual に分類できそうである。I have drunk 5 cups of coffee this morning.や My hands are dirty because I have been fixing the car.などのように、現在の material situational setting に痕跡を残しながらもその「行動」が発話時には既に終わっている場合、process の完了に焦点があるため、prior に範疇分けすることができるだろう。このように考えると、「現在の過去」で表される表現は大抵 prior か concurrent に区分できそうである。ただし、「行動の継続」を表す Josh has been waiting for Sue for an hour. / Ken has been learning calligraphy for a long time. のような場合、その EO は concurrent となるが、その区分が habitual であるか non-habitual であるかは、event の内容や継続の期間による主観的な判断に頼らざるを得ない。

Cloran の 2010 年モデルの EO における最後の問題点は、here and now に対する prior と forecast の位置づけである。Concurrent が here and now に最も近いのは異論のないところである。だが Cloran は、prior と forecast について、realis - irrealis の観点から prior の方が forecast よりも here and now に近いと考えている。しかし、subsequent に presumed のような枠組みを設定すると、必ずしも prior の方が forecast よりも here and now に近いとは言えなくなる。遠い過去もあれば、現在の material situational setting の直後に具現する未来もあるのである。そこで本論文で提案するモデルでは、EO の配列は物理的時間軸に沿った形を用いることとする。

以上のような時間軸に沿った枠組みを設定すると、時制表現、adjunct、他の節との組み合わせによって表される EO の時制枠はおよそ表 4 のように設定されることになる。

表 4: EO と主な時制表現

意味層	Prior	Concurrent		Subsequent	
	・過去の動作や状態、予定 ・完了した行動 ・発話直前までの行動	**habitual** ・慣習的行動 ・現在の状態 ・経験 ・継続	**non-habitual** ・非慣習的行動 ・一時的状態	**presumed** ・現在の時点で確実視される未来の行動や状態	**assumed** ・未来に予測される行動・状態
語彙・文法層	did was doing had done had been doing was going to do has done+(数・量) has been doing	does has done +(before) has been doing +(期間)	is doing (now) has been doing +(期間)	will do (その場における決定/意思) is going to do is doing +(未来時) does+(未来時)	will do

4.2 CE の問題

次は、CE の問題について考えてみたい。Cloran の RU モデルが抱える CE の問題は、interactant という 1 人称と 2 人称の共通枠である。この枠は分離して考える方が良いと思われる。

ここでは、You're always complaining.という concurrent: habitual に分類される例を考えてみよう。これは聞き手に対する批判であるが、Cloran の枠組みでは、I も you も interactant として同じ CE に範疇分けされるため、Reflection に範疇分けされることになる。しかし、このような話し相手に対する批判は I と you との間に対人的距離があることを示しており、この場合の you に対する陳述はむしろ 3 人称の entity を描写する Observation に近い。このような事例を考えると、proposition における 1 人称と 2 人称の枠組みは分離するべきである。

4.3 RU 設定の問題

Cloran の 2010 年モデルでは、Speech Function、EO と CE の組合せで 11 の RU を設定しているが、ここではその組合せの問題を取り上げる。まず、Plan である。Cloran のモデルでは、Plan は CE が interactant、EO が forecast: non-habitual: volitional の組合せによるものと設定されている。しかし、実際には Plan は interactant 以外の CE、volition 以外の枠組みでも生じる。下記の Swan (2005) の例を見てみよう。

> The president is to visit Nigeria next month. (Swan 2005: 90)
> The princess will arrive at the airport at 14:00. She will meet the President at 14:30, and will then attend a performance of traditional dances. (Swan 2005: 194)

Professor Baxter will be giving another lecture on Roman glass-making at the same time next week. (Swan 2005: 220)

これらの例文において CE はいずれも 3 人称であり、volition とは無関係である。このことは、未来の時間枠では、CE の区分だけで RU を設定することは難しいことを示している。そのため、未来の時間枠では、同じ CE と EO の組合せの中に複数の RU の混在を認めざるを得ない。

次に CE が generalised person / object、EO が concurrent: non-habitual の組合せである。Cloran のモデルでは空欄となっているが、次のような例を考えてみたい。

All Leicester fans are eagerly waiting for the first Premiere League title in the club's134-year history.

この場合、all Leicester fans は class 全体を表すものであり、general entity と考えられる。また、「現在の現在」時制 (are waiting) は、concurrent: non-habitual を表している。このような組合せに対しては、Report RU を割り当てるのが適切ではないかと考えられる。

5. まとめ

Cloran の提唱する Rhetorical Unit は、対人的側面に重点を置いたフレームワークであり、テクストのコンテクストへの依存度を明確に示してくれる。しかし、そのフレームワークはいくつかの点で改善の余地がある。検討の結果得られたのは下記のフレームワークである。

表 5: Revised RU Model

<table>
<tr><td rowspan="2">発話機能
(Speech Function)</td><td rowspan="2">中核要素
(Central Entity)</td><td colspan="6">現象定位 (Event Orientation)</td></tr>
<tr><td>過去
(Prior)</td><td colspan="2">現在（Concurrent）
deictic center ○</td><td colspan="2">未来（Subsequent）</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>habitual</td><td>non-habitual</td><td>presumed</td><td>assumed</td></tr>
<tr><td>提言
(Proposal)</td><td>1&2 人称</td><td></td><td>Action</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="5">命題
(Proposition)</td><td>1 人称</td><td rowspan="5">Recount</td><td>Reflection</td><td rowspan="2">Commentary</td><td rowspan="5">Foreseeing
Plan
Deduction</td><td rowspan="5">Prediction</td></tr>
<tr><td>2 人称</td><td rowspan="2">Observation</td></tr>
<tr><td>発話状況内にある人、モノ</td></tr>
<tr><td>発話状況外にある人、モノ</td><td>Account</td><td rowspan="2">Report</td></tr>
<tr><td>一般化された人、モノ、コト</td><td>General -ization</td></tr>
</table>

このフレームワークを用いれば、オリジナルの RU フレームワークよりも幅広いテクストに対応できるのではないかと考えられる。例としてアメリカ・カリフォルニア州にある the Getty Center で配布されているパンフレットに掲載されている作品の紹介を見てみよう。

GALLERY N 103
1 The highly detailed **Basin with Deucalion and Pyrrha**, [which retains its original brilliant colors,] was probably purely decorative, 2 but bowls like it would have been used at the dinner table for the washing of hands.

この作品の説明文は 2 つの大節と 1 つの埋め込み節で構成されている。従来の RU の枠組みでは、第 1 節は Recount で問題ないが、第 2 節は Recount か Conjecture かで分析不能となってしまう。また、第 1 節における probably が表すモダリティーも分析に取りこめない。しかし、本論で提唱する新しいフレームワークを用いれば、EO とモダリティーが分離されるため、第 1 節は mood adjunct を含む modalized Recount、第 2 節も modalized Recount として分析することが可能となる。この説明文では、キュレーターはこの作品を制作の時点と結びつけながらも、realis としてではなく、そこに negotiation の余地を残す形で来館者に情報を提供しているのである。

RU 分析の改善すべき点はフレームワークだけに限らない。その厳格な運用のためには、節複合における RU 同定の適切さも必要となる。Cloran の分析を細かに検証していくと、特に prefaced message における CE の扱いにおいて曖昧な点が観察される。以下の 2 つの節が異なる RU に分類されるには明確な理由が必要である。

Reflection
… but I don’t know whether they really did or not. (Cloran 1995: 380)
Recount
I don’t remember what I did with it. (Cloran 2010: 39-41)

今後は投射節を含む表現にも注目し、更に RU 分析の精度を高めてゆきたい。

参考文献

Bache, C. (2008) *English Tense and Aspect in Halliday’s Systemic Functional Grammar*. London: Equinox.

Bloor, T. (1998) ‘Conditional Expressions: Meanings and Realizations in Two Genres’. In A. Sanchez-Macarro and R. Carter (eds), *Linguistic Choice across Genre*. Amsterdam: John Benjamins. 47-63.

Cloran, C. (1995) ‘Defining and Relating Text Segments: Subject and Theme in Discourse’. In R. Hasan and P.H. Fries (eds), *On Subject and Theme*. Amsterdam: John Benjamins Co. 361-403.

Cloran, C. (1999) 'Contexts for Learning'. In F. Christie (ed.), *Pedagogy and the Shaping of Consciousness*. London: Continuum. 31-65.

Cloran, C. (2000) 'Socio-Semantic Variation: Different Wordings, Different Meanings'. In L. Unsworth (ed.), *Researching Language in Schools and Communities*. London: Continuum. 152-183.

Cloran, C. (2010) 'Rhetorical Unit Analysis and Bakhtin's Chronotype'. *Functions of Language* 17.1: 29-70.

Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. 東京：開拓社

Eggins, S. (1994) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*. London: Pinter.

Fries, P.H. (1995) 'Patterns of Information in Initial Position in English'. In P.H. Fries and M. Gregory (eds), *Discourse in Society: Systemic Functional Perspectives* Vol.5. Norwood: Ablex. 47-66.

Greenbaum, S. (1996) *The Oxford English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Halliday, M.A.K. (1978) *Language as Social Semiotic: The Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar* 2nd Edition. London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K., and Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.

Halliday, M.A.K., and Hasan, R. (1989) *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective* 2nd Edition. Oxford: Oxford University Press.

Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. (1999) *Construing Experience through Meaning*. London: Continuum.

Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar* 3rd Edition. London: Hodder Arnold.

Hasan, R. (1995) 'The Conception of Context in Text'. In P.H. Fries and M. Gregory (eds), *Discourse in Society*. Norwood: Ablex.138-283.

Hasan, R. (1989) *Linguistics, Language, and Verbal Art*. Oxford: Oxford University Press.

Hasan, R. (1996) 'Semantic Networks: a tool for the analysis of meaning'. In C. Cloran, D. Butt, and G. Williams (eds), *Ways of Saying: Ways of Meaning Selected Papers of Ruqaiya Hasan*. London: Cassell. 104-131.

Hornby, A.S. (1976) *Guide to Patterns and Usage in English* 2nd Edition. Oxford: Oxford University Press.

Huddleston, R. and Pullum, G.K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.

Leech, G. and Svartvik, J. (2002) *A Comprehensive Grammar of English* 3rd Edition. Essex: Pearson Education.

Martin, J.R. (1992) *English Text: System and Structure*. Amsterdam: John

Benjamins.
Martin, J.R. and Matruglio, E. (2013) 'Revisiting Mode: Context In/dependency in Ancient History Classroom Discourse'. In 黄国文 (ed), *Studies in Functional Linguistics and Discourse Analysis* (V). 北京：高等教育出版社. 72-95
Martin, J.R. and Rose, D. (2007) *Working with Discourse.* London: Continuum.
Matthiessen, C.M.I.M., Teruya, K., and Canzhong, W. (2008) 'Multilingual Studies as a Multi-dimensional Space of Interconnected Language Studies'. In J. Webster (ed), *Meaning in Context: Implementing Intelligent Applications of Language Studies*. London: Continuum. 146-220.
Matthiessen, C.M.I.M., Teruya, K., and Lam, M. (2010) *Key Terms in Systemic Functional Linguistics*. London: Continuum.
Quirk, R. and Greenbaum, S. (1975) *A University Grammar of English* 4th Edition. London: Longman.
Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman.
佐野大樹、小磯花絵 (2011)「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係—」,『機能言語学研究』6: 59-81
Swan, M. (2005) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
田中弥生 (2012)「修辞ユニット分析によるＱ＆Ａサイト　アットコスメ美容事典と Yahoo!知恵袋の比較」, *Proceedings of JASFL,* 6: 45-58
Teruya, K. (2006) *A Systemic Functional Grammar of Japanese* Vol.1 and 2. London: Continuum.
Thomson, A.J. and Martinet, A.V. (1986) *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
Thompson, G. (2004) *Introducing Functional Grammar* 2nd Edition. London: Arnold.
Thompson, G. and Thompson, S. (2009) 'Theme, Subject and the Unfolding of Text'. In G. Forey and G. Thompson (eds), *Text Type and Texture*. London: Equinox. 45-69.

英語ビジネスEメールにおける依頼・命令のジャンル構造の指標

Generic Structure Potential for Genre of Directives in English Business Emails

水澤祐美子
Yumiko Mizusawa
成城大学
Seijo University

Abstract

The business situation has dramatically changed for the past decades. Computers are currently essential in workplaces, and business email writing is of great importance. Many Japanese companies, moreover, engage in global business, and Japanese businesspersons are required to write emails in English for effective communication. Writing a business English email, however, is no easy task because many aspects have to be taken into consideration. Although Japanese businesspersons require the basic skills of writing English emails, the linguistic research on the business context has not fully developed, compared to the research on the academic context (Forey, 2004). This study attempts to identify a genre of Directives in the business writing, setting out a model structure of business email writing. In the analyses, theoretical frameworks, especially Generic Structure Potential and Register analyses within Systemic Functional Linguistics are utilized. The results of the linguistic analyses show an effective model of business email writing of the Directive genre.

1. はじめに

グローバル化の流れに伴い、社内での公用語を英語とする会社も増え、英語でコミュニケーションをとる必要性が以前にも増して高まっている。染谷(1999)が行った調査では、英語でビジネスメールを書く回答者が 20%近くにのぼっていると判明した。染谷の調査は 15 年以上前に行われ、現在では、英語でビジネスメールを書くことは日常的な業務となりつつあることが推定される。また、現代のビジネスを取り巻く環境は、非常に速い速度で変化している。瞬時に世界からの情報を受容し発信するために、オフィスでのコンピューターの使用は切要となり、仕事上のコミュニケーションの手段として、電子メールが従来コミュニケーション手段であった電話や手紙に取って代わっている（日本ビジネスメール協会, 2014）。日本ビジネスメール協会の調査によれば、コミュニケーションに使用される手段の具体的な割合について「E メール」(98.45%)が最多となっている。次に「電話」(91.98%)、「会う」(89.87%)と続く。4 位にあたる「ファクシミリ」(28.76%)の割合は、上位 3 つのコミュニケーション手段と比較すると格段に低い。さらに、手紙がコミュニケーションの手段として使用される頻度は少なく、「その他」(3.38%)[1]

の一部に数えられている。このように、E メールは日常の仕事を遂行する上で、必須の存在であることが分かる。ビジネス・コンテクストにおいて英語で E メールを書く必要性の高まりは今後も続いて行くであろう。

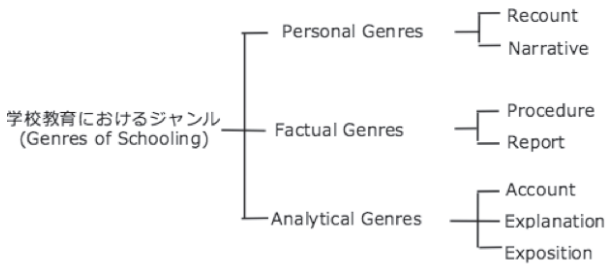
ビジネス英語は、特定目的のための英語（English for Specific Purposes、以下 ESP）の分野の一部として研究が進められてきている。しかし、ビジネス・コンテクストについての言語学的な視点による研究は、アカデミック・コンテクストと比較すると歴史が浅い(Forey, 2004)。「ビジネスの世界で良い結果を収めるために必要とされるライティングの技術は、アカデミックな形式とは非常に異なる」(Canavor, 2012: ix)と言われており、ゆえに、ビジネス・ライティングはアカデミック・ライティングとは異なったアプローチが必要である。ビジネスの現場では、フォーマリティが必要とされる場合に手紙を送付したり、急を要する場合に電話をかけたりする場合を除いては、多くの場合 E メールが伝達手段として使用されるようになってきている。E メールを書く際には手紙とは異なる特徴が存在するため、E メールライティングに必要とされる表現や構成が存在する(Canavor, 2012)。本稿では、選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics、以下 SFL）の理論的な枠組みを援用し、E メールを媒体とする英語ビジネス・ライティングの依頼・命令ジャンルの特定を試みる。

2. 英語ビジネス・ライティングとジャンル・アプローチ

近年になり、ESP の一部としてビジネス・コンテクストにおける英語ライティングの研究が盛んに行われてきている(Forey, 2004; Nelson, 2006; Zhang, 2013)。例えば、Nelson(2006)は、ビジネス・ライティングとアカデミック・ライティングの相違点について研究し、語彙の選択や統語的な選択、構造的な特徴が両者では異なると述べている。また、教える側の教師と実際に仕事をしている実務家とでは、英語ビジネス・ライティングの着眼点が異なるとする研究もある(Forey, 2004; Zhang, 2013)。これまでアカデミック・コンテクストにおけるジャンル・アプローチについては、多くの研究がなされてきているものの(cf. Swales, 1990; Martin and Rose, 2008; Schleppegrell, 2004; Hyland, 2004, 2015; Martin, 2014)、ビジネス・コンテクストにおけるジャンル・アプローチは研究が少なく、英語ビジネス・ライティングのジャンルはまだ十分に確立しているとは言い難い(Bargiela-Chiappini & Nickerson, 2014, Rutherford, 2013)。

アカデミック・コンテクストにおけるジャンルでは、SFL の視点からも包括的な研究がされている。例えば Schleppegrell(2004)は、SFL の枠組みを用いて学校教育におけるジャンル(Genres of Schooling)を分類している。彼女によれば、ジャンルは内容により 3 種類に大別され、さらに、その下位分類は 7 種類になると論じている（図 1）。3 種類のジャンルは “Personal Genres”、“Factual Genres”、“Analytical Genres” である。さらに、“Personal Genres” は、“Recount” と “Narrative” の 2 種類に、“Factual Genres” は、“Procedure” と “Report” の 2 種類に、“Analytical Genres” は、“Account” 、“Explanation” 、

そして “Exposition” の 3 種類に細別できる。



(Schleppegrell, 2004: 85)

図 1: アカデミック・コンテクストにおけるジャンルの分類

このように、アカデミック・コンテクストにおいては、ジャンルの分類が体系的に行われているが、それと比較すると、ビジネス・コンテクストにおいては体系的にジャンルが構築されていない。Bargiela-Chiappini and Nickerson(2014)の著書では、英語ビジネス・ライティングにおける個々のジャンルについて言及しているものの、包括的な英語ビジネス・ライティングのジャンルを提示するに至っていない。

SFL の視点から英語ビジネス・ライティングのジャンルを検討する研究は、これまでにも行われてきた(Iedema, 1997; Mizusawa, 2009)。Iedema(1997)は、組織における談話は管理のための実践を通じて達成され、談話は提供、記録、命令の 3 つに分類されると定義している。これはジャンルに近いものであるが、実際には会社で使用されるビジネス・ライティングは細分化されており、より詳細な検討が必要である。Mizusawa(2009)では、媒体を E メールに限定せずに、オーストラリアの職場で使用された英語ビジネス文書を SFL に基づく分析枠組みの 1 つである「ジャンル構造指標(Generic Structure Potential、以下 GSP)」を援用して、依頼・命令のジャンルを特定した。

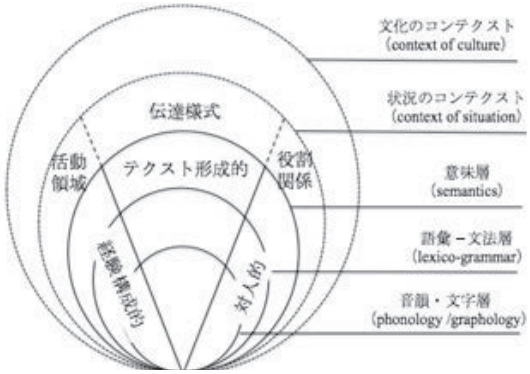
しかし、これまでの研究は、ビジネス・コンテクストの特定のジャンルに対する言及に留まり、ビジネス・ライティングのジャンルに対して E メールを媒体とした包括的なモデルを提示してはいない。なお、ジャンルの概念については次節で詳説する。

英語ビジネス E メールライティングのジャンルを明らかにすることで、語彙や文法、語彙－文法の表す意味、テクスト全体の構成といった諸要素が明示化され、より効果的な指針を学習者に与えることができると考えられる。具体的には、英語ビジネス・ライティングのジャンルを特定するにあたり、GSP を応用して、ジャンルを特定する手がかりとする。次節では、まずジャンルを概観し、次に SFL におけるジャンルの定義を説明する。さらに本稿で使用する GSP と言語使用域(register)について詳述する。

2.1 ジャンルとは

「ジャンルはファジーな概念である」(Swales, 1990: 33)と言われている。このジャンルのファジーさは、研究者によりジャンルの定義が異なることに表れている。ジャンルは「言語を使用する抽象的で社会的に認識された方法のことを指す」(Hyland, 2003: 21)と定義されることもあれば、「個々の社会的な動作主の行為の結果である」(Kress, 1989: 10)と定義されることもある。いずれの研究者にしても、共通していることは「ジャンル分析はテクストの洞察に満ち、深い記述を与える」(Bhatia, 1993: 11)ということであろう。

Hyland(2003)は、ジャンルを扱う3つのアプローチの1つとしてSFLを挙げている。SFLにおいても研究者により定義が異なる。Martin(1992: 505)は、ジャンルを「ステージ（段階）ごとに分けられた目標志向の社会的過程(staged goal-oriented social processes)」と定義し、あるテクストの全体的構成は、概略構成(schematic structure)を分類することにより明らかになるとしている(Martin, 1992)。この概略構成を1つ1つ重ねることにより、ある特定のジャンルが成り立つ。一方、Hasan(1985, 1996)は、あるジャンルを特定するために、テクストの3つの側面「何が話されているか」、「相手は誰か」、「使用されている媒体は何か」を明らかにし、これらのヴァリエーションによりジャンルが特定されると考える。ここで述べられている「何が話されているか」、「誰が相手か」、「何が媒体として使用されているか」という3つの側面は、言語使用域(register)を規定する要素として扱われる。言語使用域は、層化(stratification)の概念(Martin & Rose, 2008)における状況のコンテクスト層において、言語が使用されている状況のコンテクストを定めるものとされている。それぞれ、「話されている内容」を活動領域(field)、「相手」を役割関係(tenor)、「使用されている媒体は」を伝達様式(mode)とSFLでは呼ばれ、語彙ー文法層におけるメタ機能(metafunction)である経験構成的機能、対人的機能、テクスト形成的機能と対応している。以下の図2に層化、メタ機能、言語使用域の関係を図示する。



（Martin & Rose, 2008: 10, 一部筆者による追記）

図 2：層化、メタ機能、言語使用域の関係

図 2 が示すように、状況のコンテクストにおける活動領域・役割関係・伝達様式が、それぞれ言語資源層の各層（意味層、語彙－文法層、音韻・文字層）における経験構成的・対人的・テクスト形成的メタ機能に対応している。

本稿では、Hasan(1985, 1996)が定義するジャンルに基づき、次節で詳述する GSP を使用し、英語ビジネス・ライティングにおける E メールを媒体とした文書を分析する。Hasan の定義するジャンルにより、テクスト内の語彙や文法、語彙－文法により表現される意味、そして、テクストの全体的構造を明らかにしながらジャンルを特定することで、ジャンルごとのより詳細な分析が可能となると考える。

2.2 ジャンル構造指標（GSP）

GSP は抽象的なカテゴリーであり、ある特定のジャンルのテクスト構造を明らかにする分析ツールである(Hasan, 1985, 1996)。分析において GSP は、テクストで使用されている語彙や文法を選び出し、それらが表わす意味を明らかにし、テクストを要素に分け、ジャンルを特定する(Hasan, 1985, 1996)。ジャンルを特定するためにはまず、テクストを必須要素(obligatory elements)と選択要素(optional elements)に分ける。必須要素は、あるテクストが、ある特定のジャンルと見なされるために、必ずそのテクストに存在しなければならない要素である。一方、選択要素は必ずしも存在する必要はなく、その有無により、テクストが個性を帯び彩られるような要素である。GSP を明らかにするために必要とされる事項は 3 つである。すなわち、1) GSP を構成する必須要素と選択要素、2)必須要素と選択要素を認定するために必要な、それぞれの要素で表現される意味的属性(semantic attributes)、および 3)その意味を具現するために使用される語彙－文法の型である。以下にこれらの事項をまとめる。

GSPを明らかにするための事項

1：GSPを構成する要素：必須要素・選択要素

2：各要素に表れる意味的属性

3：使用される語彙－文法の型

（Hasan, 1985, 1996, 訳語は筆者による）

Hasan(1985, 1996)は、GSP を店頭における店員と客の英語での遣り取りや、英語のおとぎ話にあてはめ、ジャンルの特定を行った。その後、GSP は英語の話しことばや書きことばに応用され、様々な分野でジャンルが特定されてきている。例えば、病院での看護師の会話のジャンルを特定した研究(Santiano et al., 2011)や、英語の研究論文のアブストラクトのジャンルを特定した研究（Fartousi and Dumanig, 2012）などがある。GSP を使用し、英語ビジネス・ライティングのジャンルを特定した研究では、Mizusawa(2009)が、英語ビジネス文書における依頼・命令のジャンルの GSP を特定した。ジャンルの特定にあたり、ビジネス・ライティングの、特に依頼・命令のジャンルでは、以下の 6 つの要素が確認された。「開始(Commencement)」、「方向付け(Orientation)」、「正当化(Legitimation)」、「指示(Direction)」、「勧告(Exhortation)」、そして「結び(Completion)」である。これらの要素のうち、「指示」のみが必須要素となり、それ以外の要素 5 つは、全て選択要素である。図 3 に英文ビジネス・ライティングにおける依頼・命令ジャンルの GSP を示す。

（開始）^ （方向付け） ^ [（<正当化>）・指示・（勧告）] ^ （結び）

（Mizusawa, 2009: 73, 訳語は筆者による）

図 3：英文ビジネス・ライティングにおける依頼・命令の GSP

ここで、図 3 に記されている各記号の説明を行う。まず図 3 において、「丸括弧（(　)）で囲われた要素」は選択要素である。「開始」、「方向付け」、「正当化」、「勧告」、「結び」がこれに該当する。この 5 つの要素は選択要素なので、必ずしも依頼・命令ジャンルにおいて存在する必要はなく、依頼・命令のジャンルを特徴付けるために表出する場合もある。次に、丸括弧で囲われていない要素「指示」は必須要素である。依頼・命令の GSP では「指示」が必須要素にあたる。あるテクストが依頼・命令のジャンルであると特定されるためには、「指示」の要素が必ずそのテクスト内に表出されなければならない。さらに、「山括弧（<　>）で囲われた要素」は、ほかの要素の中に含まれる可能性がある。つまり、依頼・命令ジャンルにおいて「正当化」は、

選択要素（丸括弧）なので、表出する場合と表出しない場合があるが、表出した場合は、ほかの要素の中に含まれる可能性があるということになる。また、要素間に見られる「中黒（・）」は、前後の要素が角括弧（[　]）に囲まれた範囲内で入れ替わり可能ということを示している。依頼・命令の GSP では、必須要素の「指示」、および、選択要素の「正当化」と「勧告」の要素は、各要素が前後する可能性を示している。一方、「カレット（^）」は、前後の要素の順番が決まっていることを示す。依頼・命令の GSP の例では、まず「開始」から始まり、次に「方向付け」が順次表出する。その後角括弧の範囲内で順番は前後する可能性があるが、「正当化」、「指示」、「勧告」が続く。最後に選択要素「結び」が存在する場合は、その要素で終わる。要素上の右から左に向かって弧を描く矢印は、それらの要素が反復して生じる可能性を示す。

以上の要素をすべて含有する英語のビジネスレターを下記に記す。左には各要素が付されている。

開始	1	X th July, 200X
	2	Dear Staff Member
	3	RE: New Policy on Alcohol and Drugs in Employment
方向付け	4	I am writing to you
	5	to advise
	6	that the University has introduced a new Policy on Alcohol and Drugs in Employment.
	7	This document provides a framework for supervisors and employees
	8	to ensure [[they are fulfilling their duties of care to ensure a safe working environment for all people at the University]].
正当化	9	The policy addresses issues [[surrounding the impact [[that consumption of alcohol and use of drugs can have on an employee's ability [[to perform their duties]]]]]].
指示	10	Key elements of the policy include: ・That it is a requirement [[that employees do not work under the influence of alcohol or drugs]].
	11	・Zero tolerance towards alcohol consumption is a requirement in hazardous environments.
	12	Examples of such areas include working in laboratories and workshops, using machinery and hand held power tools, and working as a first aid officer.
勧告	13	・Failure [[to comply with the policy]] can result in disciplinary action,
	14	which may lead to the termination of employment.
指示 (続き)	15	A copy of the policy is enclosed.
	16	You are asked
	17	to familiarise yourself with the policy
	18	and ensure [[you observe its provisions.]]
正当化 (続き)	19	Associated with the Policy are Guidelines on the Use and Management of Alcohol at University Functions.
	20	The Guidelines have been designed
	21	to assist with policy implementation in the specific settings of social functions.
	22	The Guidelines use a risk management approach
	23	to assess the potential for harm at social functions,
	24	and provide guidelines for organizers and participants [[to follow in regards to these functions]].
結び	25	Your supervisor will be reinforcing the policy with you in the following months.
	26	Any questions [regarding the Policy or guidelines] can be raised with them, or directly with the OH&S Unit via extension XXXX.
	27	Regards
	28	Sign
	29	Printed sign
	30	Position
	31	Name of university

図 4：依頼・命令を含む英語ビジネス・ライティングと GSP

(Mizusawa, 2009: 125)

唯一の必須要素である「指示」は、その要素内に依頼・命令を含む。この例では、叙述形において命令が具現されている。この例に限らず、依頼・命令の意味は、語彙－文法層において、疑問文や叙述文で表現されることが多かったが、命令文で述べられる際は、ほとんどの場合で “please” という副詞

が命令文に付加されていた。具体的には、疑問文で依頼・命令を表現していたものとして “Would you please email me with your request?” がある。叙述文では、“[An institution] requires that all sources … need to be provided.” や、命令文では、“Please supply five copies of your additional information / amended plans.” があった。

一方、5 つ存在する選択要素の 1 つである「開始」は、文書の始まりに来る。その要素内には、タイトルや相手の名前、挨拶が含まれる。次に表出する選択要素「方向付け」は、その依頼・命令が必要となった経緯が書かれている。その後に表出するかもしれない選択要素「正当化」には、その依頼・命令が正当とされる証拠として、状況や上司の名前が示されることもある。「勧告」は、依頼・命令の遂行を奨励するための要素である。具体的には、依頼・命令に応じる場合は何か利益を受け、逆に、依頼・命令に応じない場合は不利益を受けることになるという意味をもつテクスト内容である。「勧告」の要素内で見られた不利益を被る場合の具体例として、“Failure to comply with the policy can result in disciplinary action, which may lead to the termination of employment.”がある。この例文では、依頼・命令に応じなかった場合の読み手の不利益として「解雇」を示唆している。いずれの場合でも、必ず条件に当たる節、もしくは、名詞句が存在し、その条件の履行、あるいは不履行により読み手が何かの行為を受けることとなる。最後の要素である「結び」は、英文ビジネス・ライティングを終える際にあるべき要素である。例えば、“For any further information please contact me on the telephone number below.” といったような定型的な表現や、文末に付加される表現 “Thanks” や “Regards” 、“Cheers” 等が挙げられ、最後に書き手の名前が付加される。以上のように、必須要素と選択要素の合計 6 つの要素それぞれに特有の語彙や文法が使用されジャンルの個々のテクストを特徴づける。

上述の図 3 で示す英語ビジネス・ライティングの GSP は、4 種類の媒体（ビジネスレター、メモランダム、ファクシミリ、電子メール）全てに該当する GSP を提示している。そこで、本稿の目的に見合うよう、E メールに媒体を限定して再度分析を行い、E メールを媒体とする英語ビジネス・ライティングのジャンルの特定を行う。

3. データと分析

本研究は依頼・命令を含む E メールのジャンル構造を特定することを目的とする。分析するデータは全部で 20 通である。内訳は、実際に会社で使用された E メールが 12 通、英語を第一言語とする国で出版された英語ビジネス・ライティングに関する書籍や教科書から抜粋した E メールが 8 通である。実際に会社で使用された 12 通の E メールは Mizusawa(2009)から抜粋した。書籍や教科書に掲載されているデータを取り上げる理由は、学習目的で書き下ろされた E メールであるがゆえに、英文ビジネス E メールに典型的な諸要素が盛り込まれていると期待できること、また、実際に使用された英語ビジネス E メールと、書籍や教科書に記載されている英語ビジネス E メールとの

類似点・相違点が観察可能であることによる。具体的には、4 冊のビジネス E メールに関する書籍と教科書から抜粋する(Barnard and Meehan, 2005: 38-39; Chapman, 2007: 12; Canavor, 2012: 121, 124, Oxford University Press, 2012: 9)。英語ビジネス・ライティングの分野に関する書籍や教科書は、アカデミック・ライティングの分野に比べてタイトル数が少ないが、その中で、今回使用する 4 冊は、この分野における代表的なものである。

分析に際し、第 2 節で述べた GSP を明らかにするため、それぞれの要素を特定する。その際、要素内で使用されている語彙や文法と、それらが表す意味を考慮し、必須要素と選択要素を特定した。

4. 結果

分析の結果、媒体を限定しない GSP と媒体を E メールに限定した GSP に違いが見られた。また、実際に使用された E メールの GSP と、書籍と教科書から抜粋された E メールの GSP に違いが見られた。

4.1 媒体を限定しない GSP と媒体を E メールに限定した GSP の違い

媒体を限定しない GSP と媒体を E メールに限定した GSP とを比較すると、各要素に違いが見られた。媒体を E メールに限定した GSP では、「方向付け」という選択要素が存在しなかった。さらに、英語ビジネス・ライティングの GSP では選択要素だった「開始」と「結び」が、E メールには 12 通のデータ全てに見られた。それゆえ、「開始」と「結び」が必須要素となった。以下の図 5 に、実際に職場で使用されていた英語ビジネス E メールライティングにおける依頼・命令の GSP を示す。

開始 ^ [（<正当化>）・指示・（勧告）]^ 結び

図 5 : 英語ビジネス E メールライティングにおける依頼・命令の GSP

4.2 実際に職場で使用された E メールと書籍・教科書から抜粋された E メールの GSP の違い

書籍・教科書から抜粋された E メールの GSP と、実際にオーストラリアのビジネスシーンで使用されていた E メールの GSP を比較すると違いが見られた。以下、図 6 に書籍と教科書から抜粋された英語ビジネス E メールライティングにおける依頼・命令の GSP を示す。

開始 ^[（<正当化>）^ 指示]^ 結び

図 6 : 書籍・教科書から抜粋された英語ビジネス E メールにおける依頼・命令の GSP

書籍・教科書から抜粋されたEメールでは、実際に使用されていたEメールに存在した選択要素「勧告」が存在しなかった。一方、「開始」と「結び」は、どちらのGSPにおいても必須要素であった。以下の表1に今回の分析で使用したEメールごとの要素の有無と、各要素内で表わされる意味を示す。

表 1： テクストごとに表出した要素と各要素内で表わされる意味

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
		E メール																			
		実際に使用された文書												書籍・教科書の抜粋							
指示	依頼・命令	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
	情報	-	-	-	-	-	-	✓	✓	-	-	✓	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	項目	-	-	-	-	-	-	-	✓	-	-	✓	-	-	-	-	-	-	-	-	-
開始	呼びかけ	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	-	✓	-	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
	挨拶	-	-	-	-	-	-	-	✓	✓	✓	-	-	-	-	-	✓	-	-	-	-
	タイトル	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	-	-
正当化	権威ある正当化	-	-	-	-	-	-	-	✓	-	✓	✓	✓	-	-	-	-	-	-	-	-
	状況による正当化	-	✓	-	-	✓	-	-	-	✓	✓	-	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
勧告	懐柔	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	警告	-	-	-	-	-	✓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
終わり	促進	-	-	-	-	-	✓	-	-	-	-	-	-	✓	✓	-	-	✓	-	✓	-
	謝意	-	-	-	✓	-	✓	✓	✓	✓	-	✓	✓	-	-	✓	✓	-	✓	-	✓
	結語	✓	✓	✓	-	✓	-	-	✓	-	✓	-	-	✓	✓	-	✓	✓	✓	✓	✓
	署名	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓

表 1 における横列の上段にある 1 から 20 までの番号は、データに付された連番である。数字は付録として巻末に記載されたテクスト番号と対応する。実際に職場で使用された E メールは 1 から 12 まで、一方、書籍・教科書から抜粋した E メールは 13 から 20 までである。左側の列で縦に書かれた「指示」、「開始」、「正当化」、「勧告」、「終わり」が各要素である。その右横に各要素に含まれる意味的属性が続く。ここで述べる意味的な属性とは、各要素内に具現される可能性のある意味である (Hasan, 1996: 58)。

5. 考察

媒体を E メールに限定した英語ビジネス・ライティングにおいて、依頼・

命令のジャンルでは、媒体をEメールに限定しない場合と比較すると、必須要素と選択要素の表出の仕方に違いが見られた。また、実際のビジネスシーンで使用されたEメールのGSPと書籍・教科書から抜粋されたもののGSPにも若干の違いが見られた。

Eメールを媒体とした英語ビジネス・ライティングでは、まず、最初に“Dear [name]”や“Hi”といった挨拶や、相手の近況を窺う内容が必要とされる。さらに、文書を終える際、テクストの最後に、“Regards”や“Sincerely (yours)”といった結語、もしくは、“Thanks so much for considering this request.”といった感謝を表わす節も見受けられた。さらに、行を改め、書き手の名が必ず存在した。Eメールによる英語ビジネス・ライティングに限定すると必須になる「開始」と「結び」の要素においては、こうした表現が必要となる。

実際に使用されたEメールも書籍・教科書から抜粋されたEメールも、依頼・命令の背景を示す要素「方向づけ」が存在しなかった。これは、「方向づけ」要素をテクスト化するような状況では、そもそもEメールという簡便な媒体ではなく、手紙というフォーマリティの高い媒体を用いるからだと考えられる。

次に、書籍・教科書から抜粋されたEメールになかった要素「勧告」について考察する。「勧告」では、依頼・命令に応じなかった場合に読み手が被る利益、あるいは不利益が表現される。実際のビジネスシーンで使用されたEメールにのみこの要素が認められたのは、ビジネスの現場で「勧告」は必要となるものの、この要素で表現される意味は、内容が複雑で前後のコンテクストも必要になるからであり、英語ビジネス・ライティングの学習者を想定する書籍や教科書では記載されていないのだと考えられる。ただ、実際の実務では必要となることが十分考えられるため、Eメールを媒体とした英語ビジネス・ライティングを学習者に教える際には、コンテクストも加味した「勧告」要素にも言及することが必要であろう。

6. まとめと今後の課題

本稿では、まず、SFLにおいて重要となる諸概念を概説した。そして、SFLの分析枠組みの1つであるGSPを応用し、英語Eメールを媒体としたビジネス・ライティングの依頼・命令のジャンルを特定した。そして、各要素に特徴的な語彙や文法、それにより表現される意味を明らかにした。分析データには、実際にオーストラリアのビジネスシーンで使用されたEメールと、書籍・教科書から抜粋したEメールを用いたが、これらのGSPには違いがあることが分かった。書籍・教科書から抜粋したもののGSPは、実際のビジネスシーンで使用されたEメールのそれよりも、表出される要素数が少なくシンプルであった。上級の学習者には、書籍や教科書に加えて実際に使用されているEメールを提示することも指導に役立つと考えられる。

今後の課題として、以下の点を挙げる。まず、データの数を増やし、信頼性を高める必要がある。本稿のデータである実際に使用されたEメールはオーストラリアで英語を母語とする人たちにより書かれたものである。一方、

書籍や教科書はアメリカとイギリスで出版されているものであり、文化のコンテクストの違いが GSP の違いとして現れていることも考えられる。さらに、ビジネスの分野は広く、全体を網羅するにはさらなる調査が必要となる。とはいえ、本稿の分析は、英語ビジネス E メールライティングにおけるジャンル・モデルを構築する端緒となった。今後は、アカデミック・ライティングで提示されているような包括的なジャンルを、ビジネス・ライティングの分野でも提示することを目標としたい。

註

1. パーセンテージの合計は 100 とならないが、原文のままとする。
2. 紙幅の都合上、各データソースから抜粋した例を取り上げる。

謝辞

編集委員長の佐々木真先生、および貴重なご助言をくださいました査読者の先生方に心よりお礼申し上げます。

参考文献

Bargiela-Chiappini, F., and Nickerson, C. R. (eds). (2014) *Writing business: Genres, media and discourses*. New York: Routledge.

Barnard, R., Meehan, A., and Rosenberg, M. (2005) *Writing for the real world 2: An introduction to business writing*. Oxford: Oxford University Press.

Bhatia, V. K. (1993) *Analysing genre: Language use in professional settings*. N. Y.: Routledge.

Canavor, N. (2012) *Business writing in the digital age*. London: SAGE Publications LTD.

Chapman, R. (2007) *English for emails*. Oxford: Oxford University Press.

Fartousi, H., and Dumanig, F. P. (2012) A rhetorical analysis and contrastive rhetoric of selected conference abstracts. *World Applied Sciences Journal*, 18.4: 514-519.

Forey, G. (2004) Workplace texts: Do they mean the same for teachers and business people? *English for Specific Purposes*, 23.4: 447-469.

Halliday, M. A. K. (1985) *An introduction to functional grammar*. London: Edward Arnold.

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to functional grammar* 2nd edition. London: Edward Arnold. (ハリデーM. A. K. 山口登・筧壽雄（訳）(2001)『機能文法概説—ハリデー理論への誘い』東京：くろしお出版)

Hasan, R. (1985) 'The structure of a text'. In M. A. K. Halliday, and R. Hasan. (eds), *Language, context, and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective*. 52-69. Victoria: Deakin University Press.

Hasan, R. (1996) 'The nursery tale as a genre'. In C. Cloran, D. Butt, and G. Williams. (eds), *Ways of saying: Ways of meaning: Selected papers of Ruqaiya Hasan.* 51-72. New York: Cassell.

Hyland, K. (2003) Genre-based pedagogies: A social response to process. *Journal of Second Language Writing,* 12: 17-29.

Hyland, K. (2004) *Disciplinary discourses: Social interactions in academic writing*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.

Hyland, K. (2015) Genre, discipline and identity. *Journal of English for Academic Purposes*. doi:10.1016/j.jeap.2015.02.005

Iedema, R. (1997) 'The language of administration: Organizing human activity in formal institutions'. In F. Christie and J. R. Martin (eds), *Genre and institutions: Social processes in the workplace and school*. 73–100. London: Continuum.

Kress, G. (1989) *Linguistic processes in social practice.* Oxford: Oxford University Press.

Martin, J. R. (1992) *English text: System and structure*. John Benjamins Publishing.

Martin, J. R. (2014) Looking out: Functional linguistics and genre. *Linguistics and the Human Sciences*, 9.3: 307-321.

Martin, J. R. and Rose, D. (2008) *Genre relations: Mapping culture*. London: Equinox.

Mizusawa, Y. (2009) *Investigating the directive genre in the Japanese and Australian workplace: A systemic functional approach.* (Doctoral Dissertation). The University of Wollongong, N.S.W. Australia.

Nelson, M. (2006) Semantic associations in business English: A corpus-based analysis. *English for Specific Purposes*, 25: 217–234.

Oxford University Press. (2012) *Business essentials: The key skills for English in the workplace*. Oxford: Oxford University Press.

Rutherford, B. A. (2013) A genre-theoretic approach to financial reporting research. *The British Accounting Review*, 45.4: 297-310.

Santiano, N., Young, L., Baramy, L. S., Cabrera, R., May, E., Wegener, R., and Parr, M. (2011) The impact of the medical emergency team on the resuscitation practice of critical care nurses. *BMJ Quality & Safety*, 20: 115-120.

染谷泰正 (1998) 『英文ビジネス文書完全マニュアル』東京：小学館

染谷泰正 (1999) 「ビジネス英語のニーズと実態に関するアンケート調査―ライティング編」『ビジネス英語習得術』116-121. 東京：アルク

Schleppegrell, M. J. (2004) *The language of schooling: A functional linguistics perspective*. New York: Routledge.（シュレッペグレル M. J. 石川彰ほか(訳) (2017) 『学校教育の言語』東京：ひつじ書房）

Swales, J. M. (1990) *Analysis: English in academic and research settings*. Cambridge: Cambridge University Press.

龍城正明編(2006)『ことばは生きている―選択体系機能言語学序説』東京：くろしお出版

Thompson, G. (2014) *Introducing functional grammar* 3rd edition. New York: Routledge.

Zhang, Z. (2013) Business English students learning to write for international business: What do international business practitioners have to say about their texts? *English for Specific Purposes*, 32: 144-156.

日本ビジネスメール協会(2014)「ビジネスメール実態調査 2014（平成 26 年）」http://www.sc-p.jp/news/pdf/140804PR.pdf

付録: 分析に使用した E メール文書 21 例より抜粋 [2]

出典：1 (Mizusawa, 2009), 13 (Barnard, R., Meehan, A., & Rosenberg, M., 2005, pp. 38-39), 15 (Canavor, 2012, p. 122, p.124), 17 (Chapman, R., 2007, p. 12), 19 (Oxford University Press, 2012, p. 9)

1
Title: PI Action Plans
Gentlemen,
As of next Friday the spreadsheet, action plan and information

開始

detailing the plan your staff are on, are to be emailed directly
to (name of the sender) by midday, at the latest, every Friday.

指示

Regards,

結び

Writer's first name

13
Title: Catalog request
Dear Wesplas:

開始

We saw your advertisement in Plastics Monthly and
would like to know more about your molding machines.

正当化（状況的）

As you may know, Plascom is a successful manufacturer of high quality plastic household goods with an extensive sales network throughout East and South East Asia.
We are planning to replace our molding machines in the near future.

Would you please send us your latest catalog, including a full price list and
details of discounts. Please send them to the address below.

指示

I look forward to hearing from you.
Sincerely,

結び

Assistant Production Controller
Plascom
[Address of Plascom]

15
Title: Information request, Carter Project
Dear Jack: 開始

I'd appreciate it very much if I can be added to the Carter Project distribution list. 指示

I'm working on several similar smaller-scale projects right now,
and seeing how the challenges are handled will be a big help.
Also, reviewing the materials will help prepare me of for future large-scale
projects when those opportunities arise. 正当化（状況的）

Thanks so much for considering this request. – Jane 結び

17
Title: Monitors offer
Dear Mr Braithwaite 開始

I'm writing to enquire about the monitors your informed us of last month (April).

Please could you send us a brochure and price list?
We would also appreciate a visit from your rep in order to get more information
about the products. 指示

Could you ask one of them to contact us, please?

Looking forward to your reply. 結び

Euan Davis
purchasing Assistant

19
Title: Not mentioned
Dear Sir or Madam

開始

We saw your stand at the Montreal trade fair,
and we would like to know more about your CCTV products.
GFC Designs is a graphic design agency, specializing in design solutions for businesses. We have recently moved to new business premises,
and we are planning to replace our security cameras in the new future.

正当化（状況的）

Could you please send us your latest catalogue, including a full price list?
We would also like to know if you install and maintain your security systems.

指示

We look forward to hearing from you soon.
Yours faithfully
Claude Danvers

結び

小学校国語科教科書に採択された絵本において学習可能なバイモーダル・テクストの枠組み ー低学年を中心としてー

A Learnable Framework of Bi-Modal Texts of Picturebooks in School Textbooks for First and Second Graders

奥泉　香
Kaori Okuizumi
日本体育大学
Nippon Sport Science University

水澤祐美子
Yumko Mizusawa
成城大学
Seijo University

Abstract

Many Japanese elementary school teachers are of great interest in using picturebooks[1] as a classroom material, and Japanese textbooks for elementary school students, which are authorized by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, employ some excerpts from famous picturebooks. However, practical frameworks for teaching and learning from picturebooks have not been fully developed. From a metafunctional viewpoint, this paper aims to develop one of those frameworks by investigating famous picturebooks employed in authorized Japanese textbooks for first and second graders: *Otegami* (Lobel, 1972), *Swimmy* (Lionni, 1969), and *Ookina Kabu* (Tolstoy, 1962). The results show that metafunctional approaches are of great use for teachers and children to make meaning from picturebooks and can enhance children's learnability when academic terms are properly adjusted to fit first and second graders.

1. はじめに

国語科の学習において、絵本の活用に興味を持つ教師は、これまでも少なくなかった。それだけ絵本は、国語科学習にとっても魅力ある潜在的要素を備えた媒体であると言える。例えば滑川道夫は、1989 年に「絵本を読む」と題された月刊『国語教育研究』の特集において、国語科教育の観点から絵本を活用した多様な学習の可能性に言及している。その例を挙げるならば、同論考において滑川は、「補充教材として利用する、進んで単元学習にとりいれる、国語科指導目標に照応させて教材化する、読み聴かせする、読書感想文・読書感想画の指導する（ママ）、学級読書会の資料とする、音読・朗読・朗誦の

指導する（ママ）」(滑川、1989: 1) 等の学習可能性を挙げている。

そしてこの特集以後も、滑川が言及したように、国語科教育においては絵本の多様な活用が行われ、それに関する研究も行われてきている。最近の研究としては、余郷 (2004、2006、2010) における、読み聞かせの重要性や絵本モンタージュの研究、山室 (2004) における文法意識形成と絵本との関わりの研究が行われている。また松山 (2005) における多様なメディア体験に通底するクライマックスの造型と、そこに関わる自己決定に関する研究や、山元 (2011) における文学の読みの学習との関連性に関する研究、奥泉・山元 (2013) における、絵本の登場人物の造型を視覚的側面から分析する枠組みの研究等も行われている。

こういった流れの中で、国語科における絵本の活用は、新たな側面に光が当てられ始めている。例えば山元 (2011) は、絵本の文学的な「読解力育成材」としての可能性に言及し、Kiefer (1995) の提案に基づく「絵本に対する読者反応を捉える枠組み」の提示や、Sipe (2008) や Anstey (2002) を中心とする現代絵本の活用可能性についての分析を行っている (山元、 2011) 。そしてこれらの提案を通して、山元 (2011) は以下のような提言を確認・提示している。

(1) 現代の学習者は、多様な形態のテクストから、複数の種類の文法や記号システムを利用して意味構築を行う必要がある。
(2) そのための学習材として、絵本の活用可能性が高まっている。
(3) このことによって、広い意味での読みの力の育成も促進することができる。

この山元 (2011) でも言及されているように、学習者を取り巻くテクスト環境が大きく変化してきている現在、学習者はこれまでに類を見ない程のテクストの多モード化に直面している。そのため、国語科学習においても、これまでの学習に加え、上記 (1) のような「複数の種類の文法や記号システムを利用して意味構築を行う」学習が必要視されてきている。そして、こういった変化の中で、絵本はまさにその「複数の種類の文法や記号システムを利用して意味構築を行う」学習材として、新たな光が当てられ始めている。

冒頭に挙げた滑川 (1989) においても、上掲の絵本を用いた学習可能性は、「絵本を総体として読む指導」、「絵と文を関連一体の（ママ）読む指導」が、その基盤となっていることは述べられている。しかしこれまでは、その複数の記号システムを往還する枠組みの開発が伴ってこなかった。このため、現代の国語科において、上述の目的で絵本を教材として用いる場合には、絵本における絵とことばという「複数の種類の文法や記号システムを利用して意味構築」が行えるよう、学習の枠組みの開発や整理が必要となっている。特に教師が、絵本を教材研究する際や、学習者に説明を行ったり考えさせたりする際に利用可能な形での、枠組みや関連するメタ言語の整理・構築が必要である。

このため、本稿では上述の背景を受けて、複数の記号間から意味を構築する教材として絵本に焦点を当て、絵とことばという 2 種類の異なる記号シス

テムから構成されているバイモーダル・テクストとして扱い、教師が教材研究をしたり、子どもとの学習の中で説明したりするための枠組みを、選択体系機能理論を援用して整理・提示する。国語科の中でも小学校に焦点化した理由は、次節 2 の方法でも言及するように、小学校から高等学校までで使用されている国語科の教科書中で、絵本が採択されているのは小学校が圧倒的に多いためである。また同様の理由で、本小論では、国語科の教科書中、絵本の採択が圧倒的に多い低学年に焦点を当て、学習に活用可能な枠組みを分析して整理・提示する。

2. 方法

上述の目的のために、本小論では、小学校国語科教科書に採択されている絵本の中から、以下の基準で次の 3 冊を抽出し、学習に活用可能な枠組みを分析して整理した。小学校の教科書に絞ったのは、前節 1 でも言及したように、小学校から高等学校までで使用されている国語科の教科書中で、絵本が採択されていたのが、小学校の教科書に圧倒的に多かったためである。また以下の表に示すような 5 社の小学校国語科の教科書を検討した結果、教科書会社の別を問わず、学年別に見ると低学年向けの教科書に絵本の採択が集中していた。

そのため、本小論ではまず低学年用の国語科教科書中に採択されている絵本作品を、全 5 社において調査した。その結果、現行の低学年用国語科教科書においては、以下のような作品が、以下のような学年において採択されていることがわかった。その結果を表 1、表 2 に示す。

表 1: 教科書会社 5 社と掲載絵本

光村図書	1 年生上	はなのみち	おむすびころりん	おおきなかぶ	ゆうやけ	
	1 年生下	ずうっと、ずっと、大すきだよ	たぬきの糸車	だってだってのおばあさん		
	2 年生上	スイミー	ミリーのすてきなぼうし	どうぶつ園のじゅうい		
	2 年生下	おてがみ	スーホの白い馬	十二支のはじまり		
学校図書	1 年生上	たねをみつけた	たぬきのじてんしゃ	おおきなかぶ	うみのみずはなぜしょっぱい	つきよに
	1 年生下	はじめは「や！」	ろくべえまってろよ			
	2 年生上	スイミー	きつねのおきゃくさま	ヤマタノオロチ	おまえうまそうだな	
	2 年生下	かさこじぞう	おてがみ	お父さんの手		
教育出版	1 年生上	おおきなかぶ				
	1 年生下	てんにのぼったおけやさん	りすのわすれもの	おてがみ		
	2 年生上	きつねのおきゃくさま	わにのおじいさんのたからもの			

	2年生下	かさこじぞう	アレクサンダとぜんまいねずみ			
東京書籍	1年生上	おおきなかぶ	わたしのかさはそらのいろ			
	1年生下	スイミー				
	2年生上	おてがみ	あしたも友だち	いなばのしろうさぎ		
	2年生下	なまえをみてちょうだい	かさこじぞう			
三省堂	1年生上	おおきなかぶ	どうぞのいす			
	1年生下	いなばのしろうさぎ	あいしているから	ゆうひのしずく		
	2年生*	フレデリック	かさこじぞう	きつねのおきゃくさま	おてがみ	

*三省堂2年生向け教科書は、上下区別なし。

表 2:　3種類の絵本と教科書における学習学年

	おてがみ	おおきなかぶ	スイミー
1年上		学 教 東 三	
1年下	教		東
2年上	学 東		光
2年下	光 三		学
光：光村図書、学：学校図書、教：教育出版、東：東京書籍、三：三省堂			

上記の表を見ると明らかなように、5社全ての教科書に『おおきなかぶ』(アレクセイ・N・トルストイ再話）が採択されている。また、3社以上の教科書に共通して採択されている絵本として『おてがみ』(アーノルド・ロベール作)と『スイミー』（レオ・レオニ作）がある。

そこで、この3冊を選出して分析し、現行の国語科教科書を使用する中で、これらの教材で学習可能な「複数の記号間からの意味構築」の枠組みを分析・整理する[2]。

3.　3種類の絵本の分析から整理できる枠組み

それでは、上記の方法で抽出した3種類の絵本を分析し、それぞれの分析から得られた枠組みを整理する。

3.1 『おてがみ』の分析から整理できる枠組み

『おてがみ』は、アーノルド・ロベール（三木卓 訳）が書いたがま君とかえる君の物語である。この『おてがみ』は、かえる君が、これまで一度も手紙をもらったことがなく郵便配達のある時間帯を憂鬱に過ごしていたがま君に、手紙を書いて出してあげ、その手紙をかたつむり君が届けてくれるのを、がま君と二人で一緒に待つというほのぼのとした友情物語である。

この作品では、まずバイモーダル・テクストの学習として、次の基盤的な学習及び、そのための枠組みを分析・整理することができる。まず、冒頭の

下の頁を参照する形で、その枠組みや学習内容を見てみよう。

図 1: 『おてがみ』in『ふたりはともだち』(p.53)

まず、上掲の頁の絵の部分から、どのような意味を構築することができるのかを、選択体系機能理論を絵本に援用した Painter et al. (2013) の枠組みを参照しながら分析してみる。そしてその後、それらとことばの部分との関係からの意味構築について検討する。

具体的には、選択体系機能理論における 3 つのメタ機能の観点から、例示の頁について、どういった意味が構築できるのかを検討する。選択体系機能理論は、ことばから成るテクストだけでなく、絵のような図像や音楽等様々な記号過程においても活用することができる。したがって、例示絵本の絵の部分からも、以下のような三つのメタ機能から同時に意味を構築することができる (Kress and van Leeuwen, 1996: 40-41; Painter et al., 2013: 7)。

① 観念構成的メタ機能 (ideational metafunction)
② 対人的メタ機能 (interpersonal metafunction)
③ テクスト形成的メタ機能 (textual metafunction)

①の「観念構成的メタ機能」では、絵本の場合テクスト中で展開される出来事やそこに関与する者や物、またその状況や場の意味構築を行うことができる。また②の「対人的メタ機能」では、テクストと読み手との関係や登場人物相互の関係に関する意味構築を行うことができる。特に絵本においては、Painter et al. (2013) は対人的メタ機能において、1) 登場人物相互 2) 登場人物と読み手との関係という 2 種類の対人的な意味構築を検討する必要があると述べている (Painter et al., 2013: 15-16)。そして③の「テクスト形成的メタ機能」では、①と②の意味を相対的重要度や配置関係等によって、テクストとして編成し、それらの観点から意味を検討してみることができる。

これら 3 種類のメタ機能から、例示絵本の頁における絵の部分の意味を構築してみる。

3.1.1 観念構成的メタ機能による意味構築

上で述べたように、観念構成的メタ機能とは「テクスト中で展開される出

来事やそこに関与する者、またその状況や場」について意味を構築する機能である。例えば、例示の頁では「茶色のがまがえるが、椅子に座っている」。また手前を見ると、「緑色のかえるが、その前を歩いている」。このように、観念構成的メタ機能の観点から、テクスト中の絵の部分で展開されている出来事や事象を解釈・構築していくことができる。

そしてその際、テクストから意味を切り出す単位として、言語の場合同様過程構成 (transitivity) の枠組みを用いることができる (Painter et al., 2013: 54-55)。

その過程構成の枠組みとは、以下の a~c の要素の組み合わせによって、内的世界、外的世界で起きていることを意味構築していく枠組みである。

a. 「過程中核部 (process) 」
b. 「参与要素 (participant) 」
c. 「状況要素 (circumstance) 」

この過程構成の枠組みは、「思索の様式 (mode of reflection) 」（山口・筧, 2001: 157）とも言われているため、こういった絵の中から、子どもが意味の単位を切り出す枠組みとしても、有効に活用できる。絵という境界や構成単位が必ずしも明確ではないテクストから、「出来事の際限のない変化と流れに秩序を与える」助けとなる。

また、絵における参与要素 (participant) は、Kress and van Leeuwen (1996) の議論を経て輪郭線で括られた対象 (figure) として意味を捉えることができ、過程中核部 (process) は、テクスト中の形象を描くために用いられた角度を持った線や、参与要素の向き、それらの手足の方向によって示されるベクトル (vector) や視線等によって意味を構築できるよう整理されている。さらに、これらの背景に描かれた情景は、状況要素 (circumstance) として設定 (setting) の意味を捉えることができる (Painter et al., 2013: 55)。

このように、言語同様例示した絵のような図像テクストにおいても、過程構成の枠組みを用いることによって、内的世界や外的世界における事象の意味を捉えることができる。

3.1.2　関係過程による登場人物の造型 (characterization)

絵本において重要な役割を果たす登場人物は、上で述べた参与要素として捉えることができる。そしてその特徴や属性を視覚的側面から造型 (characterize) していくためには、過程構成の一種類である関係過程における下位枠組みを活用することができる。関係過程における下位枠組みとは、以下のような枠組みである。

・内包的（intensive: a は b である）
・状況的（circumstantial: a は b にある in, on, for）
・所有的（possessive: a は b を持っている）

絵に描かれた登場人物を見れば、その服装や色、身体的特徴等、ある程度その外見から人物像を分析することができる。しかしそれらの属性がどのように関連し合って、その人物の造型を構築しているのかを検討するためには、

選択体系機能理論が提示する上記の枠組みが助けとなる。

例えば、椅子に座っている方のかえるは、茶色の身体をしており、淡い緑色の服をきている。身体の特徴のような属性は、「内包的」な枠組みで捉えることができ、服装のように身に着けている特徴は、「所有的」な属性として捉えることができる。そして「状況的」な属性に着目すると、茶色のかえるは室内に座っていて、緑色のかえるは、外に居るということを意識させることができる。このように、登場人物の造型は、周りの状況的な属性によっても特徴づけることができる。低学年の子どもでも、勿論絵を見て、かえるが二匹描かれていることはわかる。しかし、その片方は自宅に居て、もう一方が他の場所からこの場所に歩いてきたという状況を、即座に絵からも読み取れ、意味を構築できる子どもばかりではない。この頁の絵を漫然と眺めるのではなく、こういった点を絵から意味構築できることは、後続の頁の読みにも影響を与える重要な学習となり得る。

3.1.3 ことばの部分と絵の部分との関係における意味構築

今度は上で見てきた絵の部分を、同頁のことばの部分との関係で分析したり学習させたりするための内容や枠組みについて述べる。同頁には、絵の下に次のようなことばが書かれている。

「がまくんは げんかんの まえにすわって いました。かえるくんが やって きて いいました。『どうしたんだい、がまがえるくん。きみ かなしそうだね。』」(＊原文に分かち書きが採用されているため、そのママ記す)。

先の絵の部分と対照させて見てみると、この頁では、絵の部分から意味構築できた内容と、ことばの部分に書かれている内容とは、ほぼ一致しているように見える。この点においても、小学校低学年においてバイモーダルなテクストからの意味構築の学習に用いる教材として、この絵本が適していると見ることができる。絵本の冒頭である第一文目と第二文目が、それぞれ絵から意味構築できる内容と一致性を示している。しかし、低学年の子どもの中には、こういったテクストを前にした際、一読しただけでは、どちらががま君でどちらがかえる君なのかを読み取れない子どももいる。そこで、ことばの部分における「過程中核部 (process) 」と、絵の部分から解釈・構築した場合の「過程中核部 (process) 」とを対照させて、二匹のかえるの識別を行わせる方法が考えられる。

また、上記のことばの部分と絵の部分とを対照することによって、ことばの部分だけでは詳細に表現されていない、がま君とかえる君の身体上の特徴や服装、状況等を、絵の部分から上述した関係過程の枠組みを用いて解釈・構築できることを学習することもできる。また逆に、この同じ頁では、絵からはわからない会話の内容が、ことばの部分から解釈・構築できることも学習することができる。

そして、こういった検討や学習の場面では、これらことばの部分からはわからないが、絵からはわかるような、論理-意味的関係における「敷衍」の関係性 (Halliday, 1994: 219) を、教師の教材研究や子どもへの説明のためのメ

タ言語として、「情報の例示・明確化」と言い換え使用することも考えられる。また、絵からはわからないが、ことばの部分で直接的に「　」で会話の内容を補う働きが見られる場合には、論理-意味的関係における「投射」の概念を用いて、小学校国語科でも使用できるメタ言語として、「会話の足し算」と称して使用することも考え得る。

3.1.4 対人的メタ機能による意味構築

次に、同じ作品の次の頁を使って、対人的メタ機能による意味構築の分析について述べる。

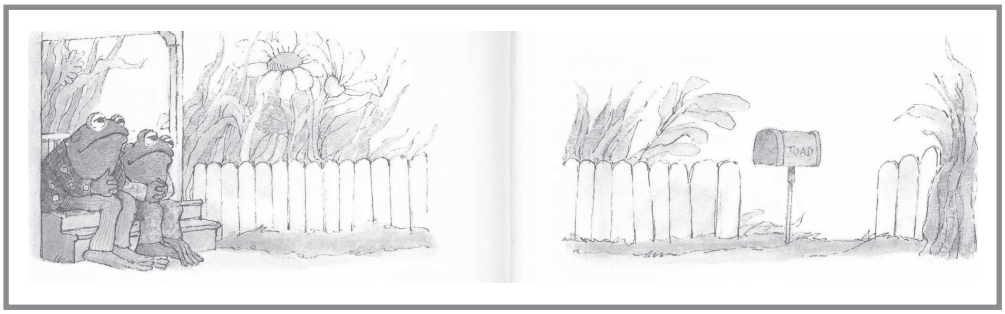


図 2.『おてがみ』in『ふたりはともだち』(pp.54-55)

上掲の絵は、がま君とかえる君が、来る保証のないがま君宛ての手紙を、一緒に待っている場面である。こういった対人的な意味の観点から絵を分析する場合には、Kress and van Leeuwen (1996) や、それを基に改良を加えた Painter et al. (2013) の枠組みを援用することができる。Kress and van Leeuwen (1996) は、絵や写真における読み手と対象との関係について、社会的距離 (SOCIAL DISTANCE) や、関与 (INVOLVEMENT) といった枠組みを提示している。社会的距離 (SOCIAL DISTANCE) とは、登場人物相互の親疎関係を表す枠組みであり、写真のフレーム内や絵本の見開き内に占める登場人物の大きさにより具現されると説明されている。また関与 (INVOLVEMENT) とは、読み手がテクストの中で起きていることに、どの程度同調し関与しようとするのかを捉える枠組みであると説明されている。これらを基に、Painter et al. (2013) は絵本における絵を分析するための枠組みを、次のように整理している。社会的距離 (SOCIAL DISTANCE) の枠組みを、登場人物と読み手との関係に使用し、登場人物相互の距離には近接性 (PROXIMITY) という枠組みを用いて、対人的意味を検討する 2 種類の枠組みを提示している。上掲の絵では、この近接性 (PROXIMITY) の枠組みを使用して、二匹のかえるが接近して並んで座っている様子から、二匹の関係の親密さを、絵からも意味構築させる学習が可能となる。また二匹のかえるの視線が右のポストに注がれ、その光景を読み手が水平な角度から傍観している関係であることも、社会的距離 (SOCIAL DISTANCE) や、関与 (INVOLVEMENT) といった枠組みを使って、学習の中で検討させることができる。この場合も、社会的距離は「登

場人物と読み手との距離感」、関与はテクスト中で起きていることへの読み手の「関わり方」と言い換えて、学習場面で使用させる必要が考えられる。

また、この頁の検討を、後半部の以下の頁と対照させることによって、対人的メタ機能からの意味構築の検討をさらに進めることも可能である。

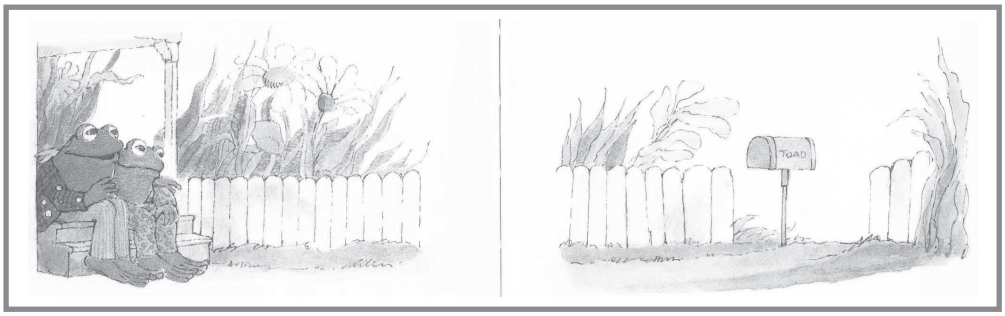


図 3: 『おてがみ』in『ふたりはともだち』(pp.62-63)

上の絵を先の図 2 の絵と対照させて見ると、図 3 では、二匹のかえるが肩を組み合い、より密着・接近して並んで座っている様子が分析できる。つまり、この作品の中では、展開する事象の進展だけでなく、その展開に伴って二匹のかえるの関係や友情も、より親密になっていることが、絵の部分を対人的メタ機能の枠組みを用いることによって分析することができる。

3.1.5 テクスト形成的メタ機能による意味構築

また、冒頭で述べた 3 つのメタ機能の内、3 番目のテクスト形成的メタ機能からの意味構築についても、この頁の同じ場面を用いて学習させることが可能である。図 2 と図 3 を対照させてみると明らかなように、この二つの絵は、同じ構図によって描かれている。そしてそのことによって、この作品の発端の場面と終結部の場面とが、対になって問題解決的に収斂されていることを、絵の構造からも意味構築することができる。図 2 も図 3 も、絵の左端に二匹のかえるが並んで座っており、右の頁には手紙が配達されるポストが描かれている。また、左のかえるとそのポストとの間は離れて描かれており、かえるの視線は 2 枚の絵とも、ポストに注がれている。

またこの図 2 と図 3 の頁のことばの部分は、双方とも最終部分が次のような形で終わっている。図 2 の頁では、「ふたりとも かなしい きぶんで げんかんの まえに こしを おろして いました。」で終わっており、図 3 の頁では、「ふたりとも とても しあわせな きもちで そこに すわっていました。」となっている。つまり、この二つの見開きは、絵の構図もことばの部分の最終部も、似た構造になっているとみることができる。そして、これら絵の構造的類似性とことばの部分の類似性を、対比的・構造的に検討してみると、両者の類似性とは対称的に、図 3 ではかえる君が書いた手紙を待つ、近未来を信じた明るい二匹のかえるの友情が、より深まっているという意味も構築することができる。

以上のように、小学校低学年においても、この絵本の教材や選択体系機能理論の枠組みを援用することによって、絵とことばという異なる記号間から意味を構築する学習の基盤を整える可能性を見出すことができる。

3.2 『スイミー』の分析から整理できる枠組み

次に、とり上げる『スイミー』においても、3.1 で分析した 3 つのメタ機能からの意味構築の学習やそのための枠組みを分析することができる。そしてそれを基盤とした、以下のような状況要素の比較を加えた意味構築の学習の可能性も検討することができる。

以下の図 4、図 5 は、『スイミー』の 1 見開き目、3 見開き目である。

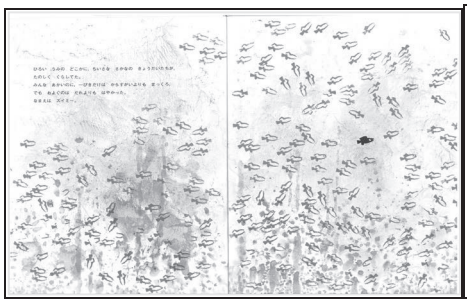


図 4: 『スイミー』(pp.1-2)

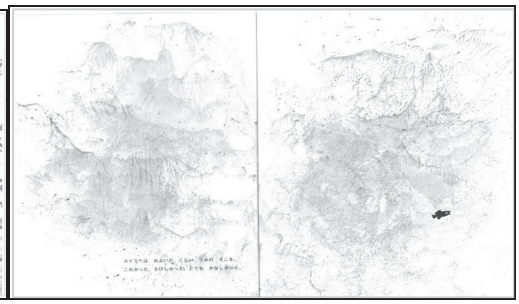


図 5: 『スイミー』(pp.5-6)

図 4 の見開きを、まず観念構成的メタ機能の観点から検討してみよう。図 4 では、黒いスイミーの周りには、赤い小さな魚がたくさん泳いでいる。またその小さな赤い魚は、それぞれ異なる方向を目指して泳いでいる。こういった分析では、上述の Kress and van Leeuwen (1996) の研究から、魚の絵に小さなベクトルを書き込むことによって、低学年の子どもでも容易に検討できる。つまりこの場面では、小さな魚はそれぞれに別方向を向き、スイミーとも別の方向を向いて泳いでいるという意味を構築することができる。

しかし、その後大きなまぐろにこれらの魚が食べられてしまった後のスイミーは、図 5 のように表わされている。そこで、ここからはこれら二つの見開きを、テクスト形成的なメタ機能の観点から検討してみる。これら二つの見開きにおいて、スイミーは右頁に、右を向いてほぼ同じように描かれている。そして、このレイアウトの類似した構造に着目することによって、これら二つの見開きは、対比的に意味構築しやすくなる。図 4 と図 5 では、スイミーの描かれている位置や、大きさ、向きは類似しているが、スイミーの周りの状況要素が大きく異なる。図 4 の見開きでは、スイミーはたくさんの似た大きさの魚に囲まれ、明るい緑色の海藻ゆらめく淡い桃色の水中を泳いでいる。これに対し図 5 の見開きでは、右端のスイミー以外には何も描かれておらず、見開きのほとんどは暗い灰色で描かれている。そして、これら二つの見開きを関連づけて見てみると、スイミーを取り巻く周りの状況要素が、図 4 から図 5 へと変化していると意味づけることができる。こういった検討

も、先の Kress and van Leeuwen (1996) の視覚におけるコードの研究を援用すると、見開きの中の時間の流れが左から右に進行しているという意味も構築することができる (Kress and van Leeuwen, 1996)。そしてこのような内容もまた、小学生に検討させる場合には、「周りの要素」といった用語の言い換えが必要であると考えられる。

最後に、この図 5 の見開きを、対人的メタ機能の観点からも検討してみる。この見開きには、以下のような「スイミーは およいだ、くらい うみの そこを。こわかった、さびしかった、とても かなしかった。」が書かれている。

このことばの部分と上掲の絵の部分との関係を検討する場合にも、倒置法によって後部に表わされた「くらい うみの そこを」の部分が、有標性を有するため、この絵の状況要素との関係から、この部分が、次のことばの部分「こわかった、さびしかった」という対人的な評価表現(Affect)と呼応して、一匹だけになってしまったスイミーの孤独感や恐怖心の累積という意味構築を検討することができる。こういった対人的な評価表現を小学生に検討させる場合にも、スイミーの「気持ちがわかる表現」といった用語を工夫して、学習させる必要が考えられる。

また、この同じ部分は、上で言及したテクスト形成的メタ機能から検討してみると、「こわかった、 さびしかった、とても かなしかった。」という形容詞の連用形「〜かっ」＋過去形の「た」の組み合わせが連続して 3 回繰り返されることによって、リズム感をもった構成が工夫されていると読むこともできる。

3.3 『おおきなかぶ』に対する枠組み

『おおきなかぶ』はトルストイ (Tolstoy) が書いたロシアの再話である。日本語の絵本は、内田莉莎子が訳し、佐藤忠良が絵を描いた。ここでは、どのような意味構築が『おおきなかぶ』から可能になるかを考える。

3.3.1 『おおきなかぶ』のことばと絵

『おおきなかぶ』において、ことばの部分は次のように記されて進んでいく。

「おじいさんが かぶを うえました。『あまい あまい かぶになれ。
おおきな おおきな かぶになれ』」(p. 2)

「あまい げんきのよい とてつもなく おおきい かぶが できました。」(p. 4)

「おじいさんは **かぶを ぬこうと しました。**
『うんとこしょ どっこいしょ』
ところが かぶは **ぬけません。**(p. 6)

「おじいさんは おばあさんを よんできました。
おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
おじいさんが **かぶをひっぱって—**

『うんとこしょ　どっこいしょ』
それでも かぶは ぬけません。」(p. 9)

「おばあさんは まごを よんできました。(p. 11)

「まごが おばあさんを ひっぱって、
おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
おじいさんが かぶをひっぱって—
『うんとこしょ　どっこいしょ』
まだ まだ かぶは ぬけません。(p. 12)
「まごは いぬを よんできました。」(p. 15)

「いぬが まごを ひっぱって、
まごが おばあさんを ひっぱって、
おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
おじいさんが かぶをひっぱって—
『うんとこしょ　どっこいしょ』
まだ まだ まだ まだ かぶは ぬけません。」(p. 16)
「いぬは ねこを よんできました。」(p. 19)

「ねこが いぬを ひっぱって、
いぬが まごを ひっぱって、
まごが おばあさんを ひっぱって、
おばあさんが おじいさんをを ひっぱって、
おじいさんが かぶをひっぱって—
『うんとこしょ　どっこいしょ』
それでも かぶは ぬけません。」(p. 20)

「ねこは ねずみを よんできました。」(p. 23)

「ねずみが ねこを ひっぱって、
ねこが いぬを ひっぱって、
いぬが まごを ひっぱって、
まごが おばあさんを ひっぱって、
おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
おじいさんが かぶをひっぱって—
『うんとこしょ　どっこいしょ』(p. 24)
「やっと、かぶは ぬけました。」(p. 27)

ことばの部分では、全頁に「かぶ」が登場する。次の見開き （図 6）のこ

とばの部分では、おじいさんが話すことばの「投射」はない。しかし観念構成的メタ機能の視点により、絵の部分からおじいさんの驚きを解釈・構築することができる。右頁全面には、おおきなかぶが、左頁には、おおきなかぶを見たおじいさんの様子が描かれている。おじいさんが片足を上げ、ひっくり返りそうになっている様子、両腕が開かれている様子などからおじいさんの驚きが累積されている。

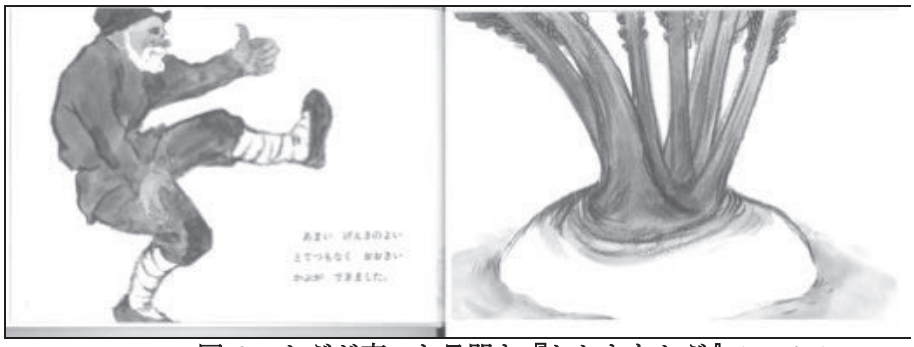


図 6:　かぶが育った見開き『おおきなかぶ』(pp. 4-5)

そしてその後、物語が展開するにつれ、おおきなかぶを抜くために、登場人物がひとり（一匹）ずつ増えていく。物語の最後では、登場人物が勢ぞろいし、かぶを抜く見開きとなる（図 7)。

図 7:　登場人物総出でかぶを抜く見開き『おおきなかぶ』(pp. 25-26)

図 7 の見開きにおいて、中心に存在する女の子の様子に注目する。図 6 の見開きと同様に女の子が話すことばの「投射」はない。しかし、女の子は顔を赤くし、力一杯引っ張っている様子が絵の部分から解釈・構築できる。さらに、対人的メタ機能の観点からも検討してみる。図 7 の見開きの登場人物全員が右を向き、かぶを引き抜こうとしている。この様子から、登場人物相互の協力的な関係性を意味構築できる。

次に、この物語の展開をテクスト形成的メタ機能から検討すると、非常に規則的な描写になっていることがわかる。以下の図で示すように、ことばの部分において、主題 (Theme) と題述 (Rheme) の展開がジグザグなパターン

として表現されている（図 8）。

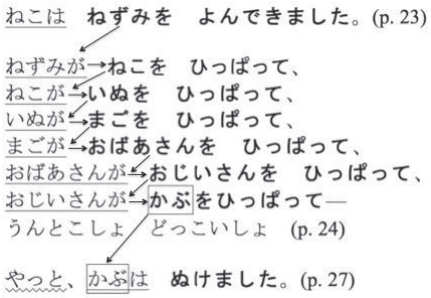


図 8: 『おおきなかぶ』の主題-題述

このように、ことばの部分では、かぶを抜くという行為が始まった見開き (pp. 6-7) から、このようなジグザクなパターンが絵本を通して続く。これにより題述が、次に続く節の主題になり定着する機能を果たしている。このジグザグなパターンは、図 8 からもわかるように、一つの見開きの単位で終わることなく、頁を超えて析出されている。そしてこのことにより、絵本にリズミカルな文体が生まれている。こういった「展開の技法(method of development)」(Halliday, 1994: 61) がもつ「談話のリズム」 (Martin and Rose, 2008: 34) は、大人向けのテクストではより複雑になるが、子ども向けのテクストにはよく見られる。そのため、こういった学習を、さらに他の絵本も使って展開させることも可能である。

また、この談話のリズムは、絵の部分ともリンクさせて意味構築することができる。例えば、「おばあさんは まごを よんできました。」と同じ頁に描かれた絵では、題述にあたる新出情報である呼んでこられた孫は、頁の中央に描かれ、その孫を連れてきた主題にあたる既出のおばあさんは、その脇に描かれている。同じように、次に新しく呼ばれた新出情報にあたる犬は、次の頁の中央に描かれ、その犬を呼んできた既出の孫は、その脇に描かれている。このように、主題-題述のテクスト形成的な意味が、ことばと絵との関係からも検討することができる。

次に「かぶ」が抜けるまでに、「かぶ」が主題[3]として現れる箇所をまとめてみる。

ところが　かぶは　ぬけません。(p. 6)
↓
それでも　かぶは　ぬけません。(p. 9)
↓
まだ まだ　かぶは　ぬけません。(p. 12)
↓
まだ まだ まだ まだ　かぶは　ぬけません。(p. 16)
↓
それでも　かぶは　ぬけません。(p. 20)

↓

やっと、かぶは **ぬけました**。(p. 27)

上に見るように、「かぶ」が主題として描写されることばの部分は、物語を通してほとんど変わらない。その前に接続詞 (上記〰部分) が必ず付記されるが、この接続詞の部分が変化するのみである。この接続詞と「かぶ」は、複合主題 (multiple Theme) (Halliday, 1994: 54) として両者が主題として機能する。「かぶ」に対する主題の展開は、登場人物がジグザグに表出されていたことと比較すると、「かぶ」は、「一定」に主題として提示されている。ここでも、前述のジグザグパターンの主題のように、頁を超えながらもテクスト形成的メタ機能のリズミカルな文体が継承されていることがわかる。教師が以上のような教材研究を行うことができることによって、低学年の子どもでもテクスト形成的に主題が繰り返されているとう意味構築を学習する可能性が拡がる。

3.3.2　繰り返される「うんとこしょ　どっこいしょ」

日本語に再話された『おおきなかぶ』において、ひとつの特徴的なことばである「うんとこしょ　どっこいしょ」は、絵本の 6 頁目から繰り返される。この擬態語は日本語の再話『おおきなかぶ』のみに使用される効果であるため、英語の “The Gigantic Turnip” (Tolstoy and Sharkey, 2005) には記述されていない。代わりに、“pulled and heaved and tugged and yanked” (Tolstoy and Sharkey, 2005) と描写されている。しかし、いずれの言語にしても、記述の繰り返しにより、テクスト形成的メタ機能がもたらすリズミカルな文体が生まれている。これらの場面では、かぶを引っ張っている人や動物の様子は絵で描かれているが、その掛け声はことばによって表現されている。これもまた、上述した「会話の足し算」の一種類として学習させることが可能である。このことをことばとの関係で検討するならば、ことばの部分の「うんとこしょ　どっこいしょ」に呼応する形で、絵の部分において登場人物の身体の向きや動作、顔の表情や顔の色が「足し算」となって力を入れて引っ張っている様子を読み手が解釈・構築できる。

3.3.3 主題と題述における層

上述の二つの主題の展開パターンである、「ジグザグ」と「一定」の主題パターン、および「うんとこしょ　どっこいしょ」による繰り返しは、意味を蓄積させ、さらに次に起こる物語の展開を予想させることが可能となる。これは Martin and Rose (2008: 36) に記載された談話における主題と新出情報の積み重なりによって説明することができる。

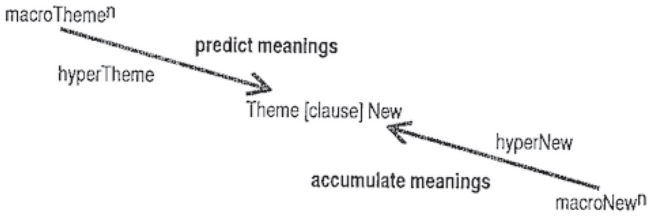


図 9: 談話における主題と新出情報の積み重なり (Martin and Rose, 2008: 36)

図 9 のように、ここではマクロな新出情報 (macroNew) により意味が積み重なる。一方、学習者は、マクロな主題 (macroTheme) により、物語の意味を推測することができる。これを『おおきなかぶ』に当てはめると、ジグザグパターンの主題から、頁をめくる見開きごとに登場人物がひとり（一匹）ずつ登場し、次頁で力を合わせてかぶを抜こうとする行為が、さらに、一定パターンの主題「かぶ」からは、頁をめくるごとにかぶが抜けない状態の変化という意味を蓄積する。同時に学習者は、このパターンによって次に起こることを類推することが可能となる。

以上のような検討や教材研究を教師が行えるようになることによって、『おおきなかぶ』という小学校低学年向けの教科書教材を使用して、低学年の子どもでも、絵とことばとの関係で作られ繰り返されるパターンの効果や面白さを検討し学習することができる。

4. 考察と今後への課題

以上述べてきたように、本小論ではこれまで小学校低学年において多くの教科書に採択されてきた教材を使用して、これまで明示的には検討されてこなかった絵とことばとの関係から意味を構築するための枠組みや、その使用によって可能となる検討や学習内容を整理して提示した。

このように見てくると、低学年の国語科に採択されている絵本には、3-1 で検討した『おてがみ』のように、絵とことばとの基本的な関係が、小さな子どもにもわかり易くデザインされているものが選択されていることが改めてわかった。また、3.2 の『スイミー』や、3.3 の『おおきなかぶ』に見られるように、ことばの部分がリズム感をもった構成に工夫されているものが多く、そのリズムのパターンが、絵の部分でも繰り返されたり類似のリズムを構成していたりするように工夫されているものがあることもわかった。

しかし、これまでの国語科学習において、こういったリズムやテクスト構成のパターンを、充分分析して子どもとの学習に活かしてくることができたかというと、3 節で具体例を挙げて整理・提示したような検討や、そのためのメタ言語の整理・開発は、充分なされてきたとは言えない。こういった意味においても、絵とことばという異なる記号システムから意味を構築するバイモーダル・テクストの学習を契機として、本小論で検討・提示したような内容をさらに発展させていく必要性があると考えられる。また、理論的に援用した選択体系機能理論の側からも、3 節において例示したように、今後こ

ういった教育場面での活用のために、用語の改名や使い分けを工夫していく余地があることも痛感した。

今回本小論では、小学校低学年の教科書教材に焦点化して、こういった学習の可能性を検討したが、今後はこの検討を基盤として、こういった用語の検討も含め、さらに上級学年用に採択されている絵本教材についても分析を行い、小学校 6 年間において継続的に学習していくことのできるようなバイモーダル･テクストの学習内容やそのための枠組みの開発を行っていきたい。

註

1. Nicolajeva and Scott (2001) や Sipe (2008) は絵とことばの有機的な統合の形として picturebooks ということばを提示している。本小論では彼らの提案に従い、絵本に対する訳語として picture books でなく、picturebooks を使用する。
2. 教科書に掲載されている内容は、作品によってはその一部を著作権者に承諾を得る形で抜粋して示されている場合があるため、本小論では元の絵本を分析に用いた。また、多くの教科書では、本小論で扱っている作品は、縦書きに変換して記載されているため、本研究の知見をさらに検討して応用する必要がある。
3. Halliday and Matthiessen (2004: 64) によれば、日本語における主題は助詞「は」で明示されるとしている。

謝辞

編集委員長佐々木先生と本小論の作成にあたり、貴重なコメントをくださった査読者の先生方に心よりお礼申し上げます。

参考文献

Anstey, M. (2002) It’s not All Black and White. *Journal of Adolescent and Adult Literacy, 45*(46): 444-445.

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar* 2nd ed. London: Arnold. （ハリデー M. A. K. 山口登・筧壽雄（訳）(2001)『機能文法概説ーハリデー理論への誘いー』くろしお出版）

Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar* 3rd ed. London: Arnold.

Kiefer, B. Z. (1995) ‘Responding to Literature as Art in Picture Books’. In N. Roser and M. Martinez (eds), *Book Talk and Beyond: Children and Teachers Respond to Literature*. 191–200. Newark, DE: International Reading Association.

Kress, G. and van Leeuwen, T. (1996) *Reading Images: The Grammar of Visual Design*. London: Routledge.

Lionni, L. (1973) *Swimmy*. Decorah: Dragonfly Books. （レオニ L. 谷川俊太郎（訳）(1976) 『スイミー』好学社）

Lobel, A. (1970) *Frog and Toad are Friends*. New York: Harper & Row. （ロベール A. 三木卓（訳）(1972) 『ふたりはともだち』文化出版局）

Martin, J. R. and Rose, D. (2008) *Genre Relations: Mapping Culture*. London: Equinox.
松山雅子 (2005)「読み手が自己決定を迫られる瞬間」『月刊国語教育研究』 399: 4-9
滑川道夫 (1989)「絵本を読む機能」『月刊国語教育研究』205: 1.
Nicolajeva, M. and Scott, C. (2001) *How Picturebooks Work.* Routledge: London.（ニコラエヴァ M.・スコット C. 川端有子・南隆太（訳）(2011)『絵本の力学』玉川大学出版部）
奥泉香・山元隆春 (2013)『国語科学習において絵 本を活用するための発問開発』第 125 回全国大学国語教育学会, 広島大学教育学部
Painter, C., Martin, J. R. and Unsworth, L. (2013) *Reading Visual Narratives: Image Analysis of Children's Picture Books*. Equinox: Sheffield.
Sipe, L. R. (2008) 'Learning from Illustrations in Picturebooks'. In N. Frey and D. Fisher (eds) *Teaching Visual Literacy: Using Comic Books, Graphic Novels, Anime, Cartoons, and More to Develop Comprehension and Thinking Skills*.131-148. California: Corwin Press.
Tolstoy, A. (1956) *The Turnip-An Old Russian Tale*. London: Puffin.（トルストイ A. 内田莉莎子（訳）佐藤忠良（絵） (1962).『おおきなかぶ』福音館書店）
Tolstoy, A. and Sharkey, N. (2005) *Gigantic turnip*. New York: Barefoot Books.
山室和也 (2004)「就学前児童の文法意識形成と絵本との関わり」『月刊国語教育研究』387: 48-53
山元隆春 (2011)「ポストモダン絵本論からみた文学教育の可能性」『国語教育研究』52: 72-93
余郷裕次 (2004)「絵本とその読み聞かせによる国語学習の改革」『月刊国語教育研究』387: 4-9
余郷裕次 (2006)「絵本モンタージュの研究」『月刊国語教育研究』410: 46-53
余郷裕次 (2010)『絵本のひみつ』徳島新聞社編集局情報出版部

絵本における文と絵の補完関係
Complementarity between Words and Pictures in Picturebooks

早川知江
Chie Hayakawa
名古屋芸術大学
Nagoya University of Arts

Abstract

This paper is a part of the multimodal study which focuses on a typical bimodal text, picturebooks. Pictures (visual text) in picturebooks do not merely repeat the same meanings as words (verbal text), but complement words by adding more information.

This paper focuses on symmetrical cases (words and pictures being supposed to communicate the same meanings) and how redundant the meanings are. I analyze symmetrical scenes from the classic picturebook, *Millions of Cats* by Wanda Gág (1928), and conducted comparative analysis on words and pictures. The analysis shows that i) the meanings conveyed by words and pictures are never the same even in symmetrical scenes; ii) pictures tell the meanings that words do not tell, but the same thing also applies to words (i.e. words communicate the meanings that pictures do not show) and iii) the difference between symmetrical and complementary relations are not typological but topological.

I integrate these findings into a revised system of RELATIONS BETWEEN WORDS AND PICTURES IN PICTUREBOOKS. The analysis overall reveals the strength and weakness in meaning making of verbal and visual texts and shows how picturebooks unite these two to create the utmost meanings and effects.

1. はじめに： bimodal text としての絵本の特性

本稿は、絵本の特色や可能性を言語理論の観点から明らかにしようとする研究の一環である。他の意味手段と異なる絵本最大の特徴は、文と絵という二つの意味モードの組み合わせである（複数モードを組み合わせた multimodal text の中でも、特に bimodal text にあたる）。この組み合わせ方を工夫することで、文だけでも、絵だけでも表せない意味を生み出せるところが、絵本の魅力であり可能性だといえる。では具体的に、「文と絵の組み合わせで生まれる絵本の魅力・可能性」とは何なのか。それを、言語学の分析枠組みを用いて客観的に説明したいというのが、本稿を含めた私の絵本研究の目標である。

その大きな目標の中で今回特に注目するのは、文と絵の表現の分担、あるいは相補関係である。絵本というと一般的に、文が語る内容（ストーリー）に対し､その内容通りの挿絵が載せてあるというイメージを抱きがちである。しかし実際には、文と絵の内容は必ずしも一致しない。意味のうち、ある部分は文が、ある部分は絵が担当し、両者が合わさった時の効果を念頭に描かれるのが絵本である。このことは、早川(2014, 2015a)で、文と絵の関係性を

分類する中で詳しく論じた。本稿は、その研究の発展にあたるため、議論に入る前に早川(2014, 2015a)の概要をまとめ、まだ解決できていない問題を提示する。

2. 早川(2014, 2015a)の概要と問題の所在

早川(2014, 2015a)の要点は、次の 2 点にまとめられる：

1. 絵本の文と絵は、必ずしも内容が一致しない。
2. 絵は、文を補足したり、大げさにしたり、ときには文と矛盾する。

例えば、Ian Falconer 文・絵の *Olivia* シリーズから実例を挙げる（早川(2014)においては「場面 2」）。主人公の Olivia が、弟たちにパンケーキを食べさせ、使った食器を片づける場面には、This is a big help to her mother.という文がある。しかし同ページの絵は、散らかり放題の台所を描いて、母親にとっては big help どころか、余計な仕事が増えていることを示している。つまり、意図的に文と絵の内容を矛盾させることで、「big help になっていると思っているのは本人だけ」という皮肉のこもったユーモアを生んでいる。

このように、絵本の絵は、文と同じ意味を繰り返すだけでなく、様々な関係性・機能をもって文と結びついている。そのため早川(2014)では、その機能を分類し、選択システムにまとめることで、文と絵の組み合わせ方の可能性を示した。その結果できあがったシステムの、最初の選択肢のみ示したのが図 1 である。

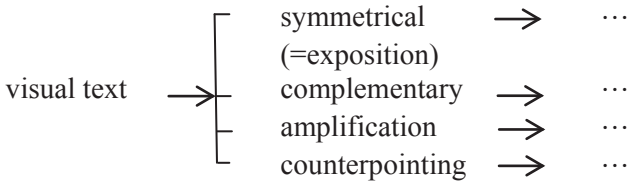


図 1: 絵本の絵の機能システム

図 1 に見られるように、絵本の絵の機能は、大まかに言って、symmetrical（文と一致する場合）、complementary（文にない意味を補足する場合）、amplifying（文の意味を大げさにする場合）、counterpointing（文と対立する場合）の 4 タイプに分かれる。早川(2015a)はさらに、実例を示しつつ各選択肢の下位分類を行った。

本稿で新たに問題にしたいのは、symmetrical と complementary の区別である。symmetrical は定義上、「文と絵の表す意味が一致・重複する」場合であるが、これはあくまで、文と絵に目立った意味の矛盾がないということである。実際には、文と絵は異なるモードのため、表す意味が「完全に一致」することはありえない。例えば、文で「Olivia は歩きました」と書かれているページに、Olivia が歩いている絵が描いてある場合、もちろん上記のシステ

ムに基づいて分類すれば symmetrical となる。しかし、絵には必然的に文では表されていない情報も含まれる。例えば Olivia の顔かたちや服装、背景などである。それらが、文とは重複しない、絵独自の意味となる。逆に、文の中に、絵では伝えられていない意味が含まれることもあるだろう。このように、絵本の文と絵は多くの場合、一致しているように見えて、実は各モードのみが伝える意味を出し合って補完し合い、全体でより多くの意味を伝えているのである。このため、symmetrical（絵が文と一致）と、complementary（絵が文の意味を補足）の区別は非常に曖昧となる。絵が、常に文にない意味を含んでいるならば、絵本の絵は決して symmetrical にはならず、常に complementary と分析されるべきだからである。

早川(2014)の時点では、この問題を回避するため、暫定的な判断基準を設けていた。それは次の基準である：

> 絵が補っている意味が、その後のストーリー展開や読者に及ぼす効果の上で「有意味」か

例えば、先述の「Olivia は歩きました」の作例において、絵に示された Olivia の顔かたちや服装、歩いている背景が、特にその後のストーリーを理解する上で重要な意味をもっていなければ、この場面の文と絵は symmetrical となる。

一方、次の場面はそうではない。同じく *Olivia* シリーズで、Olivia が美術館を訪れた絵に付されているのは、On rainy days, Olivia likes to go to the museum. She heads straight for her favorite picture.という文である。しかし、her favorite picture が誰のどんな絵かという説明は、文では一切なされない。この説明を、代わりに絵が行っている。絵の中で Olivia が見ているのは、エドガー・ドガ(Edgar Degas)の踊り子の絵である。このページが symmetrical と分類されるか complementary と分類されるかは、以降のストーリーにかかっている。この後、Olivia looks at it for a long time. What could she be thinking?と続き、Olivia がバレリーナ姿で舞台で踊る絵が載せられている。この絵は、「自分がバレリーナになって舞台で踊る」という Olivia の空想を表して、What could she be thinking?という問いへの回答になっている。Olivia の空想はもちろん、踊り子の絵に触発されてのことであるが、そのつながりは、文だけ読んでいては分からない。つまり、Olivia がどんな絵を見ていたかは、ストーリー理解や読者に及ぼす効果の上で「有意味な」情報である。そのため、この場面は complementary と分類される。

以上が、これまでの暫定的な分類法である。本稿で扱うべき課題はここにある。symmetrical と complementary の区別は、それほど単純なのか？文と絵が表す意味の間に、「ストーリー理解や読者に及ぼす効果の上で有意味な差がある」かは、常に明確に判断できるのか？また、これまでの基準には、「文になくて絵にある意味が、ストーリー理解にどの程度影響するか」という視点しかなかったが、絵になくて文にある意味はどう考慮するのか？

本稿は、これらの疑問に答えるため、早川(2014, 2015a)で用いた暫定基準

を見直すことを主眼とする。そのため、以下の 3 点を分析課題とする：

1. 今までの暫定基準で symmetrical な関係にあると分析された文と絵は、実際にどの程度意味が一致しているのか。
2. Symmetrical に対して complementary は、「絵が文の意味を補う関係」と定義してきたが、絵は常に文より多くの意味を表しているのか。
3. Symmetrical な文と絵でも、表す意味が完全に一致しないとすると、それらの間に「ストーリー理解や読者に及ぼす効果の上で有意味な差がある」かどうかは、どう区別するのか。

これらの問いに答えることで、絵本における文と絵の協力関係の一端を明らかにするとともに、両者の関係のシステムをより精緻にするのが本稿の趣旨である。

分析部では、一冊の絵本を用いて、絵と文が表す意味を詳細に検討する。絵と文の相補性については既にいくつかの研究がなされており、特に Painter, Martin and Unsworth (2013) Chapter 5 が参考になる。この研究は、絵と文が生み出す意味量(commitment)の差や、絵と文の生み出す意味の組み合わせ(coupling)のパターンが、作品全体にどのような効果を生むか、絵本をより深く解釈するのにどう役立つかを論じている。このため、文と絵の内容・情報量に明らかなギャップのある作品が選ばれていたが、本稿の目的はやや方向性が異なり、一見「同じ意味」を表している絵と文でも、詳細に見れば、いかにうまく意味を「分担」しているかを分析によって明らかにすることにある。そして、この分析を単なる事例研究とするのではなく、分析で得られた絵本の特性をよりよく捉えることができるように、絵本の文と絵の関係性システム記述を改善することにつなげる。

以下、第 3 節で分析テクストと分析枠組みを提示したのち、第 4 節で一冊の絵本を詳しく分析し、絵のみ / 文のみで表されている意味と、その具現手段を見る。第 5 節では、それらの意味がストーリー理解や読者にどのような影響を及ぼすか分析する。その結果、symmetrical な関係と complementary な関係には明確な区別はないことを示し、その結果を踏まえた新たなシステムを提案する。

3. 分析テクストと分析枠組み

3.1. 分析テクスト

分析に用いるのは、Wanda Gág (1928)の *Millions of Cats* である。日本では、『100 まんびきのねこ』というタイトルで、石井桃子氏の訳で出版されている。あらすじは次の通り。子どものいない老夫婦がいて、老人は遠くの丘に猫を拾いに行く。最も可愛い一匹を選んで連れ帰ろうと思うが、見る猫みな可愛いように思え、丘中の猫をみな連れ帰ってきてしまう。老婆に「こんなにたくさんは飼えない」と拒否されると、猫たちは口々に、「自分が一番可愛いから、飼われるのは自分だ」と主張し、大げんかの末、互いに食べ合って

いなくなってしまう。一匹だけ、「自分が可愛い」と主張しなかったために生き残った猫を、老夫婦は慈しんで育てる、というものである。

この作品を選んだ理由は、全編にわたり、文と絵が（これまでの基準によると）symmetrical な組み合わせになっているからである。つまり、文と絵の意味が大きく乖離している部分がなく、ほぼ、文が構築するストーリーに沿った内容の絵がついている。しかし実際にどの程度「一致」しているかは、第 4 節で分析する。

3.2. 分析枠組み

文の分析枠組みとしては Halliday and Matthiessen (2004)を、絵の分析枠組みとしては Kress and van Leeuwen (1996)を用いる。これらの研究はいずれも、Systemic Functional Linguistics（以下 SFL）の枠組みで様々な意味の選択システムを提案している。両者の扱う意味領域を表 1 にまとめた。

表 1: Halliday and Matthiessen (2004)と Kress and van Leeuwen (1996)の研究領域

文の分析枠組み Halliday and Matthiessen (2004)	絵の分析枠組み Kress and van Leeuwen (1996)
Ideational meaning (PROCESS TYPE, LOGICO-SEMANTIC RELATION)	Chap 2. Narrative representation
	Chap 3. Conceptual (Analytical) representation
Interpersonal meaning (POLARITY, MODALITY, MOOD etc.)	Chap 4. Interactive meaning (CONTACT, SOCIAL DISTANCE, ATTITUDE)
	Chap 5. Modality
Textual meaning (THEME, INFORMATION STRUCTURE etc.)	Chap 6. Compositional meaning (INFORMATION VALUE, SALIENCE, FRAMING)

左欄と右欄の対応に注目してほしい。つまり、Halliday and Matthiessen (2004)の ideational meaning の領域は、ちょうど Kress and van Leeuwen (1996)の narrative representation と conceptual representation の領域に相当し、どちらも「誰がどこで何をしているか」という観念的意味内容を扱う。同様に、interpersonal meaning は、画像の interactive meaning や modality の領域に相当し、どちらも対人的な意味を生み出すシステムを扱う。textual meaning は画像の compositional meaning に相当し、情報の組織立てに関わる。このように互いに対応した枠組みの中で分析できるため、例えば、文で表される観念的な意味が絵でどの程度重複して表されているか、あるいは、文と絵で表される対人的意味はどう異なるかなどを、容易に比較検討できる。

今回の分析では、この 3 つの意味の中でも、特に観念構成的な領域に絞って、*Millions of Cats* の文と絵が表す意味を比較した。分析にあたり、言語のシステムに比べ、画像（絵）の分析システムはあまり知られていないため、図 2 として、画像の representational system を簡単にまとめる。

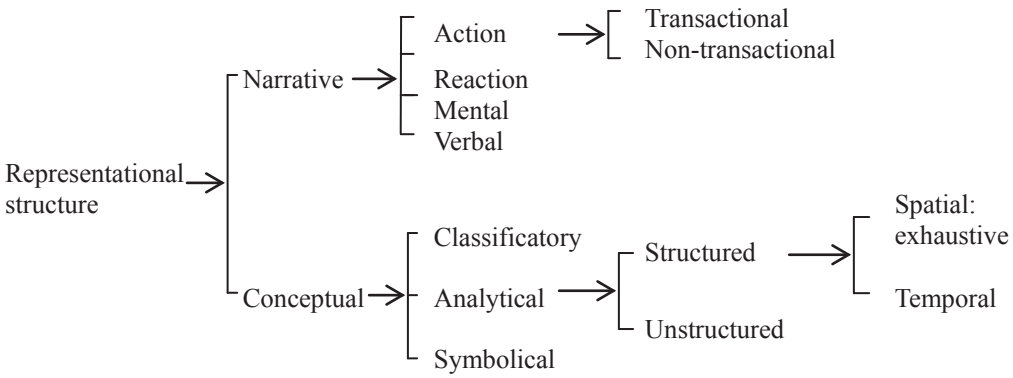


図 2: 絵の REPRESENTATIONAL SYSTEM
（Kress and van Leeuwen (1996) Fig 2.12 (p56)、Fig 2.32 (p73)、Fig3.32 (p107)をまとめたもの）

図 2 が示すように、絵の REPRESENTATIONAL SYSTEM は、まず動きを表す絵(Narrative)と動きのない絵(Conceptual)に大きく分かれる。Narrative はさらに、動作の描かれた絵(Action)、視線によって反応を表した絵(Reaction)、表情や吹き出しによって気持ちや台詞を表した絵(Mental、Verbal)に分かれる。一方の Conceptual はさらに、分類関係を図示した絵(Classificatory)、ものの外見を描写した絵(Analytical)、何かを象徴した絵(Symbolical)に分類される。Analytical はさらに、空間的に外見を描写した絵(Spatial: Exhaustive)と、時系列的に発展段階を描写した絵(Temporal)に分かれる。言語の分析システム、例えば PROCESS TYPE SYSTEM については、Halliday and Matthiessen (2004: 168-305) に詳しいため、ここでは説明を省く。

4. *Millions of Cats* 分析

ここからは、冒頭に立てた 3 つの分析課題のうち、最初の 2 つについて分析を進める：

1. 今までの暫定基準で symmetrical な関係にあると分析された文と絵は、実際にどの程度意味が一致しているのか。
2. Symmetrical に対して complementary は、「絵が文の意味を補う関係」と定義してきたが、絵は常に文より多くの意味を表しているのか。

1.に対する結論から述べると、*Millions of Cats* 全体を通して、文と絵の表す意味が完全に一致するページはなかった。この中から、典型例として、冒頭部の文と絵の分析を見る。

4.1 *Millions of Cats* 冒頭部の分析

4.1.1 文と絵に共通する意味

文から見ると、絵本の出だしは以下の通り：

> Once upon a time there was a very old man and a very old woman.
> They lived in a nice clean house which had flowers all around it, except where the door was.
> But they couldn't be happy because they were so very lonely.

このページに描かれた絵は、図 3 の通りである：

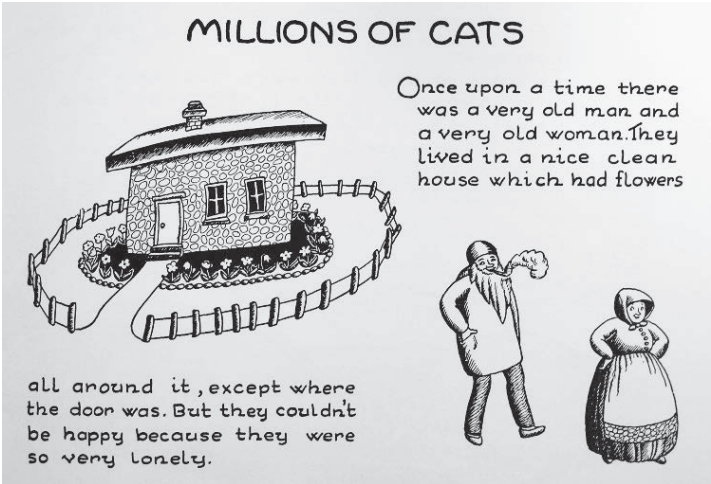


図 3: *Millions of Cats* p.3 の絵

図 3 が示す通り、絵は、老人(very old man)と老婆(very old woman)と家(house)を並べて描いており、人物や家の外観がよく分かる。ただし家は人物とほぼ同じ大きさで描かれており、現実的な比率では描かれていない。これは、絵の目的が、「これらの人物がこの家に住んでいる」という状況を表すこと（図 2 の Narrative な選択）よりも、人物および家の外見を紹介すること（図 2 の Conceptual な選択）にあるためと考えられる。

「老人と老婆がいて、家に住んでいた」という文の通りに、老夫婦と家が描かれただけの単純な絵である。この意味で、冒頭部の文と絵の関係性は、一見 symmetrical である。しかし、文と絵の内容はまったく同じではない。このことは後に詳述するが、ここではまず、文でも絵でも共通して表されている意味と、それを具現する文法手段を表 2 としてまとめた。

表 2 にあるように、例えば、「老人と老婆がいた」という存在は、文では Relational: Existential Process（つまり「there was 誰々」という節）で構築されている。一方、絵では、Conceptual: Analytical: Exhaustive Process で老夫婦の姿をそのまま描写することで具現している。以下、家の存在や、老夫婦の属性（年寄り）、家の周囲の様子（花が植えてある）は、すべて文と絵共に表されている。

表 2: 冒頭部で文と絵に共通する意味と具現手段

共通する意味	文の具現手段	絵の具現手段
老人と老婆の存在	Relational: Existential Process の Existent として (there was a very old man and a very old woman)	Conceptual: Analytical: Exhaustive Process で人物を描写
家の存在	Material Process の Circumstance として (They lived in a … house)	Conceptual: Analytical: Exhaustive Process で家を描写
老夫婦の属性：年寄り	名詞群の Epithet として(a very old man and a very old woman)	Conceptual: Analytical: Exhaustive Process で人物を描写（白髪・白髭（老人）、顔のしわ（老人・老婆））
家の周囲の様子：花が植えてある	Relational: Possessive process の Attribute および Circumstance として (which had flowers all around it, except where the door was)	Conceptual: Analytical: Exhaustive Process で家とその周囲の様子を描写

これらの意味を具現するための手段を、文と絵、どちらの意味モードも備えている。文の場合は主に Relational Process という過程型を選択することで Existent の存在や Carrier の属性（=Attribute）を表すが、それ以外にも、名詞群の Epithet に old のような形容詞を持ってくることでも属性を表せる。一方の絵は、Conceptual: Analytical: Exhaustive Process を選択して、老夫婦や家の外観を描くことで、その存在や属性を直接的に表現している。

4.1.2 文だけが伝える意味

では、文では表されているが、よく見てみると絵には含まれない情報を探してみる。表 3 としてその結果をまとめる。

表 3: 冒頭部で文だけで表されている意味とその具現手段

意味	具現手段
時：過去	CIRCUMSTANCE: Location: Time として (Once upon a time there was a…) Verbal group の Tense: Past として(There was / They lived / which had / the door was / they couldn't be / they were)
関係性： 老夫婦と家の関係（住んでいた）	Material Process の Actor と Circumstance として (They lived in a nice clean house…)
因果関係： 「寂しい」ことが「不幸せ」の原因	LOGICO-SEMANTIC RELATION: Causal-conditional: Cause: Reason (they couldn't be happy because they were so very lonely)

文だけで表されていた意味の一つは「時」、すなわち、おはなし全体を「過去に起きたこと」と位置付ける設定である。文法手段としては、冒頭の節の Once upon a time という Circumstance によって具現される。またすべての節の時制が、There was、they lived、they couldn't be と過去形になっていることでも具現される。「時」は、絵では全く表されていない情報で、絵をいくら見ても、それが昔の様子か今の様子か、未来の様子なのかは分からない。この絵に限らず、絵は一般に時を表すのが不得手といえる。例えば絵の中に時計やカレンダーを描きこむとか、登場人物が時代を象徴する服装をしているなどの特殊な場合でなければ、時は表せない。

次に、登場人物の関係性、この場合は老夫婦と家の関係が挙げられる。文では、They lived in a house という Material Process 中で、老夫婦が Actor、家が Circumstance とされているため、老夫婦と家は「住む」という関係で結びついていることが分かる。ところが絵では、老夫婦と家は横並びで描かれているだけなので、これが彼らの住む家なのか、彼らが家を訪ねてきたところなのか、あるいはこんな家が欲しいと想像しているところなのか不明である。これは絵が、図 2 に示した REPRESENTATIONAL SYSTEM でいう Unstructured analytical process で描かれているためである。Unstructured analytical process とは、複数の部分から成るものを、全体像を示さずに部品だけ並べて描く選択肢である。冒頭部の絵も、家とその中の住人という一種の「全体－部分」関係の中から、構成要素だけを取り出しているので、互いの関係性が分からなくなっている。

最後に、文だけで表された重要な意味として、因果関係がある。文では、because という原因の論理-意味的関係を選択することで、「老夫婦が not happy な理由は lonely だったため」という因果関係がはっきり具現されている。一方絵では、そもそも not happy とか lonely という感情が表されていないと同時に、それらの感情の間の因果関係も表されていなかった。もし not happy, lonely という感情を何らかの方法で表したとしても、それらの感情の間の因果関係を絵で説明する方法は思い浮かばない。絵本の絵と文の関係を分析した Nikolajeva and Scott (2001)が"Pictures, iconic signs, cannot directly convey causality and temporality, two most essential aspects of narrativity." (p26)と述べるように、因果関係(causality)は絵が不得手とする意味領域といえる。

このほか、性質の程度を表す Graduation（例：very old のように、名詞群中の Epithet を強調することで、単に「年寄り」でなく、「どの程度年寄りか」を具現）や、人や物を主に良し悪しの観点から価値づける Judgement（例：家を単なる「家」と観念構成的に表すだけでなく、「nice で clean な家」とする）、登場人物の感情を表す Affect（例：老夫婦が lonely で not happy である）などの意味も、すべて文によってのみ表されていた。しかしこれらはいずれも APPRAISAL SYSTEM に属する意味であり（APPRAISAL SYSTEM については、Martin and David Rose, 2003: 22-65 を参照のこと）、メタ機能的には対人的(Interpersonal)な意味に属する。観念構成的(Ideational)な意味に焦点を絞った本稿ではこれ以上言及しない。

4.1.3 絵だけが伝える意味

逆に、絵でのみ表され、文では表されていない意味を表 4 にまとめる。

表 4: 冒頭部で絵だけで表されている意味とその具現手段

意味	具現手段
老人の外見	Conceptual: Analytical: Exhaustive process で描写 縁なし帽 長い顎鬚 パイプを吸っている スモックのような上着 シンプルなズボンと靴 [後略]
老婆の外見	Conceptual: Analytical: Exhaustive process で描写 [詳細は省略]
家の外見	Conceptual: Analytical: Exhaustive process で描写 石造り ドアが 1 つ、窓が 2 つ、煙突が一本 家の周りの花はすべて同じ種類だが花の向きが一つ一つ違う 花の外側に石が並べてある（花壇になっている） 庭の周りに柵 柵の杭は間隔がまちまちで傾いているのもある 柵に一か所出入り口 家のドアから柵の出入り口まで小道がある [後略]

表 4 が示すように、絵のみで表される意味の代表は、人や物の外見である。例えば、文では there was a very old man としか書かれず、老人の見た目は一切説明されない。しかし絵ではそれが一目でわかる。Conceptual: Analytical: Exhaustive process を使って、老人の外見をそのまま描写しているからである。具体的には、老人が縁なし帽をかぶっている、長い顎鬚をもっている、パイプを吸っているなどの情報が与えられている。しかも、さらに詳しく見ようと思えば、パイプの形や服の模様も絵から読み取れる。分析絵本はたまたまモノクロ版画だが、カラーだったら絵のもつ情報量は更に多くなってくる。老婆や家の外見も同様である。家が石でできている、ドアが 1 つで窓が 2 つある、そのドアと窓の形状は…など、挙げればきりがないので省略する。

これらの情報と同じ内容が、文で表せるか考えてみたい。不可能ではないが、非常に長い説明が必要となる。次のような感じだろう：

> 昔々、老人と老婆がいました。その老人は縁なし帽をかぶり、長い顎鬚があり、パイプを吸っていました。そのパイプは木でできていて、柄の部分が湾曲しており…

このように、描写はきりがない。しかも、どれだけことばを費やしても、必ず描写されない部分が残ってしまう。例えば、登場人物の髪型については描写しても、目の形には言及がないなどの現象が起こる。絵なら全身の様子が

まんべんなく示せる。このため、外見描写は絵の得意分野といえるだろう。

以上、節 4.1.2-4.1.3 で見たように、一見 symmetrical な文と絵も、詳細に分析すれば、重なり合わない意味が多くあることが明らかになった。絵本はこのように、文と絵、それぞれが表現しやすい意味を分担して出し合い、両方合わさったときに最大の効果を生むように計算されたジャンルといえる。

4.2 文の得意分野：その他

4.1 節では冒頭部のみを詳細に分析したが、それ以外のページはどうだろうか。冒頭部を含め、*Millions of Cats* 全体の文と絵を分析し、「文のみで表されていた意味」「文・絵両方で表されていた意味」「絵のみで表されていた意味」を、それぞれ具現件数とともに、表 5 としてまとめる。左欄は文のみによって表されていた意味分野、右欄は絵のみによって表されていた意味分野、真ん中はどちらのモードでも表わされていた意味分野である。

表 5 が示す通り、冒頭部でみた「時」「人や物の関係性」「因果関係」以外にも、文だけが表していた意味は多い。その中には、発話役割（情報を与える/求める、行為を与える/求める）の区別（言語的には叙法(Mood)の選択によって具現される）やモダリティー（情報の信憑性、行為の必要性などを表す意味領域で、言語的には助動詞、副詞の選択などによって具現される）も含まれるが、これらはすべて、対人的な意味領域に属するため、観念構成的な意味に対象を絞った今回の分析からは除いて考える。同様に、同じフレーズの反復によるリズム的な意味も、テクスト形成的(Textual)な領域に分類されるため、ここでは扱わない。

表 5: 文と絵の得意分野（括弧内は具現方法）

文のみで表されていた意味（135 節のうち）	文・絵両方で表されていた意味	絵のみで表されていた意味 (15 見開きのうち)
・時 (CIRCUMSTANCE / TENSE) 131 件（基本的に tense のある節ではすべて具現） ・人やものの関係性 (PARTICIPANT ROLE) 98 件 ・因果関係(LOGICO-SEMANTIC RELATION) 20 件 ・投射 27 件 ・未実行の行為（発言・思考内容を含む）35 件 ・心理過程 11 件 ・物質過程の音・温度に関わるもの 2 件 ・比較 7 件 ・一般化 4 件 ・方向性 1 件 ・aspect 1 件	・ものの存在 ・単純な属性 ・動作・移動 ・属性・存在の変化	・服装・外見／それによる全体的印象 (Conceptual: Analytical: Exhaustive process) 15 件 ・（人物の）ポーズ・表情・視線・リアクション (Narrative: Reactional Process) 13 件 ・人やものの相対的位置・大きさ (Conceptual: Analytical: Exhaustive process) 13 件 ・風景・背景・それによる場面設定 (Conceptual: Analytical: Exhaustive process) 13 件 ・対比 (Conceptual: Analytical: Structured: Temporal＊複数の絵の並置による) 6 件 ・個別化 2 件

4.2.1 発言過程と投射関係

ここからは、文でのみ/絵でのみ表されていた意味のうち、冒頭部に見られたもの以外の代表的なものについて、いくつか実例を挙げる。実例に付された番号は、分析テクスト中の節番号を示す。

文のみで表された意味としてはまず、発言過程(Verbal Process)を選択することで具現される、投射(projection)の関係がある。例は以下の通り：

節 6: “If we only had a cat!”
節 7: sighed the very old woman.
節 8: “A cat?”
節 9: asked the very old man.

節 6-9 に見られるように、文では通常、say, cry, ask, sigh, think, wonder などの動詞を用いることで、発言行為と発言内容間の投射関係を表し、被投射節（言った/思った内容）は、投射節（言った/思ったという行為）とは別の次元の現実であることが示されるが、絵でその関係を具現した例はなかった。絵でも、吹き出しの中に文や絵を描き込めば同様の効果が得られるが、そうした漫画的手法を用いない今回の分析絵本では、文のみが投射関係を担っていた。

4.2.2 心理過程

投射以外の心理過程も、文のみで具現される典型的な意味である：

節 50: and before he knew it,
節 51: he had chosen them all.

節 50-51 は、老人が丘で一番可愛い猫を選ぼうとしたとき、見る猫みんな可愛いように見え、気が付くと全部の猫を選んでいたという場面だが、ここに見られるように、know、choose という心の動きは典型的に文でのみ、心理過程(Mental Process)を選択することで具現されていた。心の動きは当然目に見えないため、絵画化するのが難しいためと考えられる。

4.2.3 音・温度を表す物質過程

発言過程、心理過程と違い、物質過程(Mental Process)は比較的絵でも具現されやすい意味領域である。絵では、人物の動きのあるポーズや、動いている（ように見える）物体を描くことでなんらかのベクトルを表せば、Narrative: Action の選択となり、物質過程と同等の意味を具現できる。例外は、音や温度に関わる物質過程である。例は以下の通り：

節 98: and made such a great noise
節 101: But after a while the noise stopped

節 98 と 101 はそれぞれ、老夫婦に選んでもらおうと猫たちが大騒ぎを始めた

場面と、その騒ぎが収まった場面である。音を絵で表すことはできないため、節 98 のように、made such a great noise という意味内容は主に文でのみ語られることになる（もっとも絵でも、周囲の人間に、耳に手を当てたポーズをとらせることなどによって具現できなくもない）。節 101 のように、目に見えない音が stop するというのはさらに表現し難い。また、音と同様、温度・触感などに関わる物質過程（熱する/冷ます、乾かす、ツルツルに磨くなど）も、絵より文の方が伝えやすい意味領域だろう。

4.2.4 総括・一般化

言語の重要な機能の一つに、「総括・一般化」がある。文では「以上の例をまとめると、人間はみな一般的に…」などと、個別例を総括して一般論に結びつけられるが、絵で描かれた人物はどうしても、絵に示されたその特定の外見を備えた「個別の人物」になってしまうため、一般化が難しい。

本文中で総括・一般化が行われていたのは、先にも挙げた節 50-51 である。絵では、老人がとある猫を拾い上げている場面、また別の猫を抱き上げている場面、というのが 4 つ続くが、いつまでたっても「また別の特定の猫を拾った」ことにしかならない。しかし文では、all という単語で総括することができる。絵では、猫を拾った個別事例をどれだけ連ねても、「たくさんの猫を拾った」ことにしかならず、「すべての猫を拾った」ことは表しづらい。

4.3. 絵の得意分野：その他

ここからは逆に、絵でのみ表された意味を見る。絵の得意分野は、要するに視覚的要素である。冒頭部に見た、人物やものの外見以外にも、人物の「ポーズ・表情・視線」や、それにより表される「リアクション」、人物や物の「相対的位置関係や大きさ」、「風景や背景とそれによる場面設定」、「対比」「個別化」はすべて絵によってのみ表される傾向があった。これらの意味領域について、簡単に 1 つずつ例を挙げたい。

4.3.1 リアクション

人物の「ポーズ・表情・視線」や、それにより表される「リアクション」に関しては、8 見開き目の絵が好例である。老人がたくさんの猫を連れて帰宅する途中、池にやってくる場面である。文は They came to a pond.である。絵では、文の内容通りに、池の畔に老人と猫が描かれ、確かに文と絵は symmetrical な関係に見える。しかし文では、池に対して老人と猫がどう反応したかは分からない。

図 4 の絵を見てみよう。

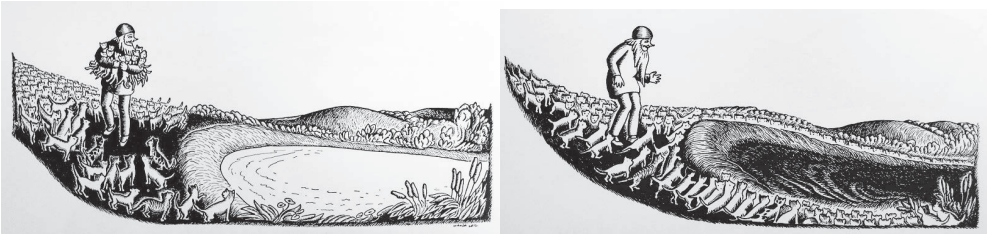


図 4: *Millions of Cats*. p.16 と p.17 の絵

見開きの左右に、同じ大きさと構図で池が描かれ（構図の反復効果については 4.3.3 節で触れる）、どちらも池の畔に老人と猫が立っている。左の絵では、老人は猫を抱え、顔だけ横に向けて右手の池を見ている。その表情は笑っていて、猫たちに水を飲ませることができて嬉しいと、池の出現に対して好意的なリアクションをしている（図 2 でいう Narrative: Reaction の選択）。猫は、老人を取り巻くように地面に座り、視線は池ではなく老人の方を向いている。ほとんどの猫が老人を見上げ、口を開いて、鳴き声を上げているように描かれている。これらのポーズや視線から、猫が「水を飲ませるよう老人に要求する」というリアクションをしていることが分かる。

右の絵では、池の水がからっぽになっている（文でも and the pond was gone! と書かれている）。それに対して老人がどう反応したかは、やはり文では触れられないが、絵では、老人は池に向かって正対し、やや上体を屈めて両腕を持ち上げ、何かにたじろいだようなポーズをしている。これは、猫たちが池の水を飲み干してしまったことに驚き、当惑していることを表している。一方猫は、からっぽになった池を無表情に覗き込んでおり、驚いているというよりむしろ、悪びれもせずに「もうないの？」という反応をしている。このいかにも猫らしい無頓着な反応に作者のユーモアが感じられる。

4.3.2 相対的位置や大きさ

「相対的位置関係や大きさ」についても、同じ池のシーンを例にとる。文では、老人、猫、池それぞれの位置関係や、相対的大きさは分からない。しかし絵を見れば一目瞭然で、画面の右端半分ほどを池が占め、その左側の、岸から 1、2 歩下がったところに老人が立ち、猫たちはその周りを取り囲むようにして岸を埋め尽くしている。大きさは、猫 1 匹 1 匹は老人の顔くらいで、それほど大きい猫ではない。池は、岸から老人の身長の倍ほどの距離までが描かれ、残りは画面の向こうまで続くように描かれている。岸の緩い湾曲から推測すると、画面上に見えているのはほんの一部で、実際はかなり大きな池だと推測できる。このことが、エピソードの面白さを際立たせる効果を挙げている。つまり、猫が一口ずつ水を飲んだ結果、こんなに大きな池の水が干上がってしまった、それくらい猫がたくさんいた、というユーモアである。

4.3.3 対比

池の絵は、「対比」という、絵に特有の意味の好例としても用いることがで

きる。文でも、and the pond was gone!と書くことで、池の水が干上がったことは伝えているが、絵は、さらにダイナミックで視覚的に強い印象を与える。それは、見開きの左右の絵が、まったく同じ大きさ・構図で描かれているからである。ただ、老人と猫のポーズと、池が左は水が満杯に、右は干上がっていることだけが異なっている。このように、同じ構図を並べることで差異が際立ち、いわば「猫以前／猫以後」の世界の対比、そしてその差をもたらした猫の（無邪気な）破壊力を強く印象付けることができる。

4.3.4 場面設定

「風景や背景と、それによる場面設定」について、冒頭部（図 3）は例外的に、背景のない白地の上に老夫婦と家を描いていたが、それ以外の場面ではほとんど、背景に小高く連なる丘と灌木の林、丸く形の整った雲の浮かぶ空が描かれている。図 5 を参照のこと。

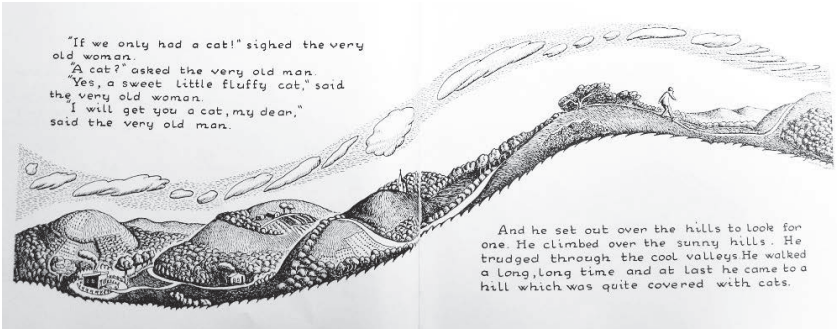


図 5: *Millions of Cats*. pp.4-5 の見開きの絵

こうした背景が、老夫婦が緩やかな丘陵地帯に住んでいること、老人が猫を探しに行ったのは穏やかに晴れた日だったこと、などの場面設定をし、物語に牧歌的な彩を添えている。これらの場面設定は、文では一切されていない。

4.3.5 個別化

最後に、絵の「個別化」機能を見てみたい。第 3 見開きの絵が示しているのは、老人が a hill which was quite covered with cats にたどり着いた場面である。文では Cats here, cats there, / Cats and kittens everywhere, / Hundreds of cats, / Thousands of cats, / Millions and billions and trillions of cats.と書かれ、猫の多さは充分に強調しているが、猫はあくまで cat として十把一絡げにまとめられている。

では絵（図 6）はどうだろうか。まさに猫で覆いつくされた丘が描かれているが、特に前景の大きく描かれた猫たちは、個性たっぷり、それぞれ模様も違えば、表情も違う。老人の足元にすり寄る愛嬌たっぷりの猫もいれば、後脚で立ち上がって奇妙なダンスを披露する猫、すまして背筋を伸ばした猫、老人は眼中になく、互いにじゃれ合うのに夢中になっている二匹の猫もいる。もちろんこのような一匹一匹の差異を文で描写することも不可能ではないが、

すでに「外見描写」の部分（節 4.1.3）で述べたように、文による描写は長くしかも不完全になりがちである。また、文は頭から順に一文一文読んでいくしかないため、一匹の猫の描写が済んでから次の猫の描写が始まる。この点絵は、複数の猫を同時に見渡せるように描くこと、つまり、各々の猫の差を見比べられるように描くことができ、個別化に適した意味モードといえる。

第 4.2.4 節に、「総括・一般化」は文が担っていた意味だと述べた。文が「一般化」絵が「個別化」という、まさに逆の方向性に利用されていることは、絵本が文と絵それぞれの特性をうまく生かし、意味を補わせながら活用していることを示す重要な例だと考えられる。

図 6: *Millions of Cats*. p6 の絵

4.4 まとめ：文と絵の得手不得手と協力関係

このように、文と絵はそれぞれに、表すのを得意とする意味と不得意な意味をもつ。誤解のないように申し添えておくと、本稿で「文/絵のみが表していた意味」としたのは、決して「絵/文では表すことのできない意味」ではない。例えば本稿で「絵では表すのが難しい」とした「時」も、登場人物や周りの建築、小物を厳密な時代考証に則ったデザインにするなどの技法を用いれば、絵でも具現できる（絵本の文を絵で表す実験的調査については、早川(2016)を参照のこと）。逆に、本稿で絵の代表的な得意分野とした「人物の外見」についても、第 4.1.3 節に見たように、長々とした描写をすればある程度同じ意味を表せる。本稿が強調したいのは、これらの意味が「表現可能か不可能か」ではなく、symmetrical に見える文と絵も、実際にはこれほど多くの意味を共有していないという点である。このことを、一冊の絵本を例にとって証明した。

付表 1、2 に、*Millions of Cats* の各見開き（絵本では通常、見開きが絵の単位となる）で、文と絵だけが表していた意味をまとめた。これらが表しているのは、文だけが表している意味がない見開きは 1 つもないこと、また、絵

だけが表している意味がない見開きは 1 つもないことである。言い換えると、*Millions of Cats* では、どの見開きにも必ず、文だけが表す意味、絵だけが表す意味があったということである。このように、文と絵それぞれが、別の意味を持ち寄ることで、1 つのページで伝えられる意味は倍増する。つまり、絵本というのは、文と絵、それぞれの得手不得手を踏まえ、両者を協力させることで、最小の材料で最大の情報を伝え、最高の効果を生み出すように工夫されたジャンルだといえる。そのことを指して本稿のタイトルを、「文と絵の補完関係」とした。

以上の分析をまとめると、問 1（今までの暫定基準で symmetrical な関係にあると分析された文と絵は、実際にどの程度意味が一致しているのか）、問 2（Symmetrical に対して complementary は、「絵が文の意味を補う関係」と定義してきたが、絵は常に文より多くの意味を表しているのか）に対して、以下のような明確な結論が得られた：

問 1 に対し：
一見 symmetrical な文と絵でも、片方のモードのみが表している意味は数多くある。分析絵本中で、文と絵の意味が完全に一致している見開きはなかった。

問 2 に対し：
絵のみが表している意味も数多くあるが、文のみが表している意味も多い（第 4.2 節参照）。すなわち絵本における文と絵は、どちらが主でどちらが従という関係ではなく、互いに意味を出し合って、補い合う関係にある。

5. 文と絵の関係システム再考

5.1 symmetrical と complementary の区別

この節では、文と絵の関係システムの改善につなげるため、まず冒頭に立てた問 3 に従い、symmetrical と complementary の違いを考える：

> 3. Symmetrical な文と絵でも、表す意味が完全に一致しないとすると、それらの間に「ストーリー理解や読者に及ぼす効果の上で有意味な差がある」かどうかは、どう区別するのか。

Millions of Cats 内で、絵だけが表していた意味を改めて見ると、以下のものがあった：

① 服装・外見／それによる全体的印象（節 4.1.3）
② （人物の）ポーズ・表情・視線・リアクション（節 4.3.1）
③ 人やものの相対的位置・大きさ（節 4.3.2）
④ 対比（節 4.3.3）
⑤ 風景・背景・それによる場面設定（節 4.3.4）
⑥ 個別化（節 4.3.5）

このうち、これまで symmetrical と complementary の暫定的な判別基準としてきた、「ストーリー理解や読者に及ぼす効果の上で有意味」な意味はどれだろうか。この問いには、簡単に答えられないことが分かる。

まず、①の老夫婦や家の外見、④の風景描写による場面設定（老夫婦は穏やかな丘陵地帯に住んでいる）は、ストーリー理解に直接は影響がない。つまり、これらの外見や場面設定を知らないと理解できないような部分やエピソードは物語中にない。しかし、これらの情報から総合的に得られる「全体的印象」はどうだろうか。老夫婦やその家の簡素な外見から、私たちは、これらの人物にたいして（無意識にだが）正直に質素に生きている善良な人々という印象をもつ。また、家の周りの牧歌的な場面設定も手伝って、総合的に、「この穏やかな土地に住む善良な老夫婦に飼われることは、猫にとって良いことだ」と判断をするだろう。そのことが、後半で猫たちが老夫婦に飼わる座を巡って喧嘩し始める理由を説明し、また、最後に 1 匹だけ残った痩せっぽちの猫が、その後可愛がられて幸せに暮らしたであろうことを予想する手助けになる。老夫婦がいかにも性格の曲がった意地悪な外見で描かれていたら、これらの前提はまったく違ってくるだろう。

②リアクション、③相対的位置や大きさ、⑤対比についても、節 4.3.1-3 で見た池の畔のシーンを例にとって考えてみよう。例えば、老人と猫が池の左側に立っていたという相対的位置関係は（絵には必然的に表れてしまう情報だが）、ストーリー理解や読者への影響という点ではほとんど無意味といえる（情報構造的には意味があるが、本稿では観念構成的意味に絞って議論するので、このことについては扱わない）。しかし、そうではない情報もある。同じ構図を反復し、しかも片方の絵では池に水がないという対比を描くことで、猫が水を飲みほしたことが強調されていた。また、そのことに老人が驚いたというリアクションや、池が（猫に比べて）とても大きいという相対的大きさは、いずれも、ストーリー展開自体には影響がないが、「読者に及ぼす影響」という点では大きな差がある。すなわち、既にみたように、「これほど大きな池の水も、猫が 1 口ずつ飲んだらなくなってしまった。それくらい猫がたくさんいた」という絵のみが伝える意味こそが、なんでも大袈裟に表すアメリカン・ジョークとして、この絵本にユーモアを添えているのである。またそのことに、老人は驚いているが猫はすまし顔というリアクションのギャップも、二重のユーモアで読者に影響を与えている。

⑥の個別化についても、丘中の猫が一匹一匹個性的に描かれていること自体は、ストーリー展開に何の影響もない。しかし、絵の細部まで味わう読者にとっては、こうした描き込みは絵本を楽しむうえで重要である。また深読みすれば、この時点で「猫はそれぞれ違う個性、すなわち自我をもっている」と示しておくことが、後半、猫が互いに対抗意識を燃やして争い始めることの伏線になっているとも言えるだろう。また、一匹だけ自己主張しない変わり者の猫がいたことの説明にもつながってくる。

以上の考察から言えることは、絵だけが表す意味が、「ストーリー理解や読者に与える影響の上で有意味」かどうかは程度問題であり、「有意味/無意味」

の二分法では測れないということである。どのような意味も、絵本の中に表されている限りは読者に何らかの影響を与えるし、その後のストーリーを解釈するためのバックグラウンドとなって、ストーリー理解に大なり小なり影響を与えるからである。また、読者が絵本の絵や文をどれほど詳細に読み取るか、絵から得た情報をどれほどストーリー理解に結びつけようとするか、という読者の態度にも依る。

以上のことから、symmetrical と complementary の区別は、typological というより topological なものと言えるだろう。typological とは、事象を明確にカテゴライズする見方、topological は、カテゴリー間の差異は明確なものでなく連続的に推移していくとする見方である（詳しくは Halliday and Matthiessen, 1999: 68-71 を参照のこと）。すなわち、絵のみ/文のみで表される情報は、「ストーリー理解や読者に与える影響の上で、まったく無意味」（この場合、典型的に symmetrical と分類される）から、「非常に有意味」（この場合、典型的に complementary と分類される）まで、連続的に存在する。上記の例でいえば、「老人が池の左側に立っていた」という位置関係は、ストーリー理解にまったく影響しない例と言える（右側に立っていても全く構わない）。それに対し、見開きの左右に描かれた池の、片方は水が満杯、片方は空という対比や、それに対する老人や猫のリアクションは、読者への影響という点でかなり有意味である。

5.2 システム再考に向けて：絵と文の意味の多少

上記の点とは別に、図 1 に示したシステムの根本的な問題は、常に文の意味を中心に据え、絵が「文と一致」「文を補足」「文を誇張」「文と矛盾」と分類していたことである。既に分析課題 2 に対して「絵本における文と絵は、どちらが主でどちらが従という関係ではなく、互いに意味を出し合って」いることが明確になったため、文が「絵を補足」「絵を誇張」「絵と矛盾」するという視点も同様に必要であることが分かる。

また、それと絡む重要なポイントとして、絵本を語るには、文と絵が担う意味の比率の問題を避けることはできない。絵本を「絵の付いた本」と非常に大きく定義するならば、その中には、文だけで物語が完結していながら、子どもの目を楽しませるため、数ページに 1 枚程度挿絵を添えた子ども向けの書物も含まれるだろう。一方、1 文字も字がなく、絵だけでできた絵本もある。「挿絵の付いた本」において文が意味の 100 パーセントを担い、「絵だけの絵本」において絵が意味の 100 パーセントを担うならば、通常の絵本はその間に位置し、比較的文の意味が多いものから絵の意味が多いものまで、それこそ topological に存在する。

上記 2 点、すなわち、i) 意味を補足する/誇張する/矛盾するのは、絵が文に対してと、文が絵に対しての双方向があること、ii) 通常の（絵と文が両方ある）絵本は、「挿絵の付いた本」と「絵だけの本」の間に位置するメディアであることを記述できるよう、図 1 に示したシステムを改良した。図 7 がその改訂版システムである。すなわち、絵本というものをまず「挿絵入りの本」

と「絵だけの絵本」、「その中間に位置する通常の絵本」に分類する。通常の絵本は、文と絵が必ず意味を出し合っているため、さらに、文が絵に対して「意味が一致」「意味を補足」「意味を誇張」「意味が矛盾」する場合と、絵が文に対してそれらのことを行う場合とがあることを示した。ただし、この場合の symmetrical はあくまで、「付け足している意味がストーリー理解や読者に影響を与えない」という意味であり、文と絵の意味が完全に一致しているという意味ではないことは、本論の中ですでに述べた通りである。

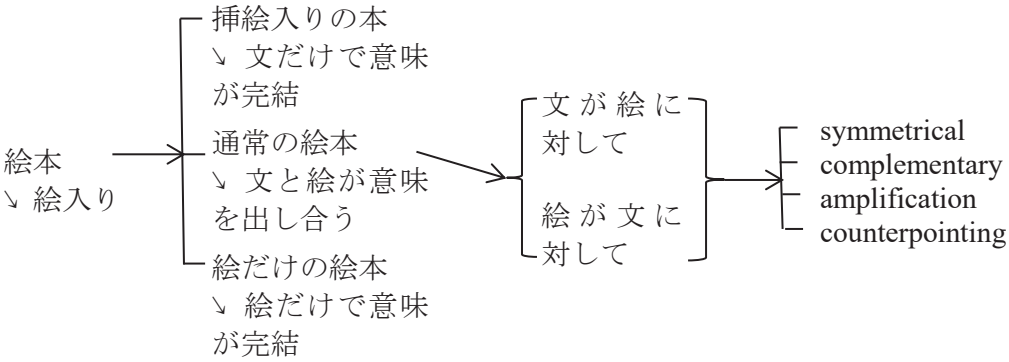


図 7: 絵本の文と絵の関係性システム（改訂版）

6. おわりに

以上、絵本の文と絵の関係について 3 つの問いを立て、実際の絵本を分析することでこの問いに答えてきた。それぞれの問いに対し、今回の分析から明らかになったことをまとめる：

1. 一見 symmetrical な文と絵でも、片方のモードのみが表している意味は数多くある。分析絵本中で、文と絵の意味が完全に一致している見開きはなかった。すなわち、絵本の文と絵には、必ず「どちらかしか表していない意味」があり、互いに意味を補い合っている。
2. 絵のみが表している意味も数多くあるが、文のみが表している意味も多い。すなわち、絵本における文と絵は、「絵が常に文を補う」という関係ではなく、「互いに意味を出し合って補い合う」関係にある。
3. Symmetrical と complementary の区別は、typological ではなく topological である。すなわち、文と絵の意味は「完全に一致している」場合と「片方がもう一方を補足している」場合に明確に分かれるのではない。両者には必ず一致しない意味があり、その意味は「ストーリー理解や読者に与える影響」という点で無意味なものから有意味なものまで、連続的に存在する。

これらの点を踏まえて、絵本の文と絵の関係性のシステムをより精緻に、また実際の絵本に合うように改善するのが本稿の目的であった。

この目的以外にも、今回の分析を通して、絵本の絵と文がどれほど緊密に意味を補い合い、複合的な意味を生み出しているかが明らかになったと考える。分析絵本中には、文と絵の意味が完全に一致している見開きが一つもなかったという結果は特に重要で、このことがまさに、絵本というジャンルが存在する意義を示しているといえる。絵本は確かに、文(verbal text)と絵(visual text)をくっつけたものではあるが、小説(verbal text)でも表現できたはずの内容に、わざわざ子供用に絵をつけてみたジャンルでもなく、あるいは絵(visual text)でも表わせるような意味にわざわざことばの解説をつけたジャンルでもない。まさに、文と絵両方が対等に（しかも独自の）意味を出し合って成り立つ、小説や絵とは独立した、独特の意味媒体であることが改めて示されたと考える。

付録

付表 1: 文のみが表している意味（ideational な意味のみ；各見開き）

第 1 見開き(p1)	時（以下すべての節）、論理（原因）
第 2 見開き(p2-3)	未実行の行為（仮定）、投射、論理（目的）、未実行の行為、時の幅、
第 3 見開き(p4-5)	数値化
第 4 見開き(p6-7)	投射、比較（最上級）、未実行の行為、論理（理由）、論理（逆説）、論理（時）、未実行の行為、比較、論理（逆説）、投射
第 5 見開き(8-9)	未実行の行為（仮定）、投射、論理（理由）、比較（直喩）、未実行の行為
第 6 見開き(p10-11)	総括・一般化、心理過程、未実行の行為、論理（時）、
第 7 見開き(p12-13)	論理（目的）、未実行の行為、
第 8 見開き(p14-15)	投射、総括・一般化
第 9 見開き(p16-17)	投射、総括・一般化
第 10 見開き(p18-19)	時の幅、投射、
第 11 見開き(p20-21)	未実行の行為、投射、論理（イディオムの中に含まれる）、心理過程、時の幅、論理（時）、比較（最上級）、論理（理由）、アスペクト
第 12 見開き(p22-23)	物質過程の音・温度に関わるもの、論理（原因）、比較、心理過程、指示代名詞、時の幅、論理（目的）、総括・一般化、投射、未実行の行為、
第 13 見開き(p24-25)	投射、論理（時）、比較（最上級）、発言過程、心理過程、
第 14 見開き(p26-27)	時の幅、一般化、時
第 15 見開き(p28-29)	投射、比較（最上級）、心理過程

付表 2: 絵のみが表している意味（各見開き）

	外見	ポーズ・表情・リアクション	相対的大きさ・位置	風景・背景	反復・対比	個別化
第 1 見開き（P1）	✓					
第 2 見開き（P2-3）	✓		✓	✓		
第 3 見開き（P4-5）	✓	✓	✓	✓		✓
第 4 見開き（P6-7）	✓	✓	✓	✓	✓	
第 5 見開き（P8-9）	✓	✓	✓	✓	✓	
第 6 見開き（P10-11）	✓	✓	✓	✓		✓
第 7 見開き（P12-13）		✓	✓	✓		
第 8 見開き（P14-15）	✓	✓	✓	✓	✓	
第 9 見開き（P16-17）	✓	✓	✓	✓	✓	
第 10 見開き（P18-19）	✓	✓	✓	✓		
第 11 見開き（P20-21）	✓	✓	✓	✓		
第 12 見開き（P22-23）	✓	✓	✓	✓	✓	
第 13 見開き（P24-25）	✓	✓	✓	✓		
第 14 見開き（P26-27）	✓	✓			✓	
第 15 見開き（P28-29）	✓	✓	✓	✓		

謝辞

本稿中、図 3-6 として *Millions of Cats* の絵を再掲するにあたり、出版元の Penguin Random House より許可をいただいた。ここに credit line を記すとともに、謝意を申し上げる。

CREDIT LINE: “Illustration”, copyright 1928 by Wanda Gag; copyright renewed © 1956 by Robert Janssen, From MILLIONS OF CATS by Wanda Gag. Copyright 1928 by Wanda Gag; copyright renewed © 1956 by Robert Janssen. Used by permission of G. P. Putnam's Sons, an imprint of Penguin Publishing Group, a division of Penguin Random House LLC.

参考文献

Halliday, M. A. K and Matthiessen, C. M. I. M. (1999) *Construing Experience through Meaning*. New York/London: Cassell.

Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd edition. London: Hodder Arnold.

早川知江 (2014)「絵本の文と絵：bimodal text における意味の相補性」*Proceedings of JASFL* 8: 1-14 日本機能言語学会

早川知江 (2015a) 「絵本の文と絵の関係性システム」『機能言語学研究』8:

115-140 日本機能言語学会
早川知江 (2015b) 「絵本の絵と文：表現の得手不得手と協力関係」 *Proceedings of JASFL* 9: 1-14 日本機能言語学会
早川知江 (2016) 「絵で表せる意味、文で表せる意味：絵本の文を絵にする」 *Proceedings of JASFL* 10: 1-13 日本機能言語学会
Kress, G. and Leeuwen, T.v. (1996) *Reading Images: The Grammar of Visual Design*. London & New York: Routledge.
Martin, J.R. and Rose, D. (2003) *Working with Discourse: Meaning beyond the Clause*. London / New York: Continuum.
松居 直 (1973)『絵本とは何か』東京：日本エディターズスクール出版部
松居 直 (2001) 「物語絵本の発見——ワンダ・ガアグ『100 まんびきのねこ』——」河合 隼雄、松居 直、柳田 邦男『絵本の力』（P72 と P73 の間に挿入）東京：岩波書店
Nikolajeva, M. and Scott, C. (2001) *How Picturebooks Work*. London & New York: Routledge.
Painter, C., Martin. J.R. and Unsworth, L. (2013) *Reading Visual Narrative: Image Analysis of Children's Picture Books*. Sheffield and Bristol: Equinox.
Unsworth, L. (2001) *Teaching Multiliteracies across the Curriculum: Changing Contexts of Text and Image in Classroom Practice*. Buckingham & Philadelphia: Open University.

用例出典

Ian Falconer (2000) *Olivia*. New York: Atheneum Books for Young Readers. (ISBN: 0-689-82953-1)
Ian Falconer (2001) *Olivia Saves the Circus*. New York: Atheneum Books for Young Readers. (ISBN: 0-689-82954-X)
Wanda Gág (1928) *Millions of Cats*. New York: Puffin Books. (ISBN: 978-0-14-240708-0)

自閉症スペクトラム障害者の物語絵本のナラティブから検証する認知的共感の欠損[1]

Cognitive Empathy Deficit in Adolescents and Adults with Autism Spectrum Disorder as Identified from their Narrating Stories

加藤　澄
Sumi Kato
青森中央学院大学
Aomori Chuo Gakuin University

Abstract

The deficit in empathy has been cited as a central characteristic of autism spectrum disorder (ASD). This study investigated narrative abilities and their relation to cognitive empathy by observing evaluative lexis used in oral narratives. The underlying concept of this study is that the affective feelings are relevant to evaluative processes and, therefore, narrating the characters' affective feelings in a story book using evaluative lexis reflects the narrator's cognitive empathy ability. Fifteen autistic subjects who ranged in age from late adolescence to adults in the early twenties and fifteen regularly developed counterparts were asked to spontaneously narrate a story from a wordless picture book. The data showed that the autistic subjects, compared to the control group, produced significantly shorter stories with less evaluation as well as less use of onomatopoeia and both internal and external speech. From these findings it is highly probable that autistic individuals tend to be less cognitively empathic than regularly developed individuals. These findings are discussed in relation to the theory of mind hypothesis of autism.

1. 目的

2013年に出されたDSM-5で、DSM-Ⅲ以来の発達障害を示す定義が変わり、自閉症障害・小児期崩壊性障害・アスペルガー障害・特定不能の広汎性発達障害を包括して自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder、以後ASDと略記する）というカテゴリーで一括りにされた。その診断基準としては、(1)社会的コミュニケーション及び相互関係における持続的障害、(2) 限定された反復する様式の行動・興味・活動があげられる（森・杉山・岩田、2014）。そのうち(1)が示すものは、(i) 社会的、情緒的な相互関係の障害、(ii) 非言語的コミュニケーションの障害、(iii) 関係性の発達・維持の障害である (森・杉山・岩田、 2014) 。これら3点に共通して必要な資質の1つは、他者理解と共感性を備えているかどうかである。このうち他者理解、つまり他者の心的状態を推論する能力のアセスメントは、「心の理論(Theory of Mind)」[2]として研究されてきている。

かつて自閉症の第1次障害として、認知・言語の障害を柱とする「認知障

害説」が有力視されてきたが、高い認知・言語能力を持った高機能の自閉症者の存在が認められるようになって、かつての説では説明できなくなった。そこで Baron-Cohen et al. (1985) の「心の理論(Theory of Mind)」欠損仮説が注目される。この仮説を提示するために、Baron-Cohen et al.は誤信念課題(False-belief task)[3]を用いて、自閉症児・定型発達児・知能に遅れのあるダウン症児を対象に実験を行った。結果、定型発達児とダウン症児がほとんど正答したのに対して、ASD 者では 20%しか正答しなかった。このことからこの課題を通過できない高機能自閉症者は、「心の理論」の仕組みが欠損しているとしたのである。これは、この分野では支配的な説となっている。

この ASD 者の「心の理論」の欠損仮説は同時に ASD 者の共感心の低さを説明する。共感心の欠如ないし低さは、ASD 者の中心的な特徴の 1 つである。例えば、ASD のアセスメントの金字塔とされる ADOS (Autism Diagnostic Observation Schedule) には、”Comments on Other’s Emotions/Empathy” など、共感心を観察する項目が含まれている。共感は、認知的共感 (cognitive empathy)と情動的共感(emotional empathy)の 2 つに分けて研究されてきている（浅田・熊谷、 2015）。前者は他者の心的状態の推論で、身体的反応を前提としないが、後者は他者の心の状態を、頭の中だけでなく身体反応[4]を伴って理解することで、他者の感情状態に同期することである。ASD 者は他者の心的状態の推論の能力が低いために認知的共感度が低く、付随的に情動的共感に伴う身体的反応も得られないという傾向があるとされる。

本研究ではこの 2 つの共感概念のうち、認知的共感に注目し、ASD 者の認知的共感が定型発達者よりも低いという仮説をたて、その検証を試みる。認知的共感は「他者の視点に立って、その人の考えていることや感じていることを理解しようとする傾向」（櫻井・村上、 2015）である。そこで本研究では、認知的共感が物語のナラティブにおいて、ナレーターが登場人物やその行動を描写する際に、言語に反映されるという前提に立ち、ASD 者に共感が欠損するのか、あるいはそれが低いものかどうかを検証する。ナラティブを使って心の理論の欠損を説明した研究に Tager-Flusberg (1995)、Tager-Flusberg and Sullivan (1995)があるが、これらは ASD 児を話者として、そのナラティブの中の物語スキーマ、指示(reference)、ナラティブを豊かにする登場人物の意図や心理状態を表現する言語能力、結束性(cohesion)、ナラティブの長さなどを調べたものである。また Loch and Gordon (2014) も ASD 児を話者として、物語の再現ナラティブと自発的ナラティブ能力の測定を試みている。本研究ではアプレイザルを使って、「心の理論」形成期を過ぎた 10 代後半から 20 代前半の ASD 者及び定型発達者を対象とし、その評価体系及び情動の活性化を反映する要素として、(1) 登場人物の直接話法のセリフ及び内言、(2) オノマトペによる評価要素をみることで ASD 者の共感心の欠損を検証する。なお、この研究は、より大きなデータをとるためのパイロット・スタディとして実施したものである。

2. アプレイザル理論に基づく方法の組み立て

2.1 アプレイザル理論の理論的枠組み

Martin and White (2005) は、評価言語の対人的機能に着目し、選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics)の枠組みによってアプレイザル(Appraisal) 理論を組み立てた。アプレイザル理論は、(1)態度評価、(2)程度評価、(3)評価スタンスを表す言語を扱い、話し手/書き手がそれぞれの命題・提言を対人的に位置づける言語資源を体系化したものである。本研究では、これら 3 つの評価カテゴリーのうち、(1)の態度評価のマッピングを行う。態度評価とは、話し手/書き手が間主観的な価値あるいは評価を、参与要素とプロセスに付与することにより、感情的な反応や文化的価値観システムを示す意味資源で、(a)感情 (Affect)、(b)判断 (Judgment)、(c)査定 (Appreciation) の 3 つのカテゴリーから成る。それぞれ下位基準が設けられているが、本研究では、Martin and White (2005)の分類を基に、加藤が臨床テクストに合わせて修正した辞書構成を用いる [5]。以下にその定義を示す。

(a)**感情**：評価者の評価対象に対する感情的な反応を表出させたもので、評価者がある現象によって感情的にどのように影響されたか、そして感情を表す語彙-表現を用いて、どうその現象を査定するのかを表す。
【想望】物事・人物に対する好悪の感情である（好き・嫌い）。
【情動】喜怒哀楽といった感情の起伏を表す（例：嬉しい・悲しい・楽しい・怒る）。
【心境】精神的な安定・不安定を表す（例：心配・不安・安心・恐がる）。
【満足】満足・不満足の程度を表す（例：満足する・納得する・飽きる・諦める）。
(b)**判断**：制度化された規範、社会的・道徳的判断に基づく人の行為やパーソナリティーの評価カテゴリーである。評価対象は人の行為・性格などで、それらが倫理的か非倫理的か、法に適ったものか違法性を有するものか、社会的に容認できるものかそうでないかを査定する。(i)行動規範、(ii)社会的評価の 2 つの下位区分がある。
(i)**行動規範**
合法性あるいは道徳体系に関わるもので、対象となる人物の行動・パーソナリティーが社会的規範に沿うものであるか、あるいは反するものであるかを評価する。
【倫理性】倫理・道徳的見地から見てそれに従うものか、逸脱するものかを表す（例：人道的・正当な・不謹慎・不正・不当・理不尽・邪悪）。
【真/誠実性】誠実さ・正直さに関する評価語彙群である（例：真面目・純朴・不貞・誠意・健気・忠実）。
(ii) **社会的評価**
対象の行動・パーソナリティーが社会的に、あるいはその人物の所属コミュニティの評価基準に照らして、望ましいかそうでないかに関する評価資源

であるが、法的、あるいは倫理的な含みはない。
【能力】その人物がどれだけ有能かを表す　（例：卓越した・熟達した・優れた・劣った）。
【信頼性】その人物がどれだけ信頼できるか、あるいは社会的に好ましい性向を有しているかを表す（例：信用できる・頼もしい・軽率な・信実）。
【その他】上述 2 項目に当てはまらない社会的評価語彙を入れる。
(c)**査定**：審美的あるいは社会的価値観から査定される事象・具象に対する評価カテゴリーである。一般に生産物、製造物といった実体的なもの、また抽象的な構築物に対してなされる評価である。人間についての評価も含むが、その場合は行動主体としてよりは実体的な存在として捉えられる。
【所感】対象に対する反応である（例：面白い・つまらない・興ざめ・刺激的・啓発的）。
【構成】対象の構成・バランスについての評価である（例：均整のとれた・複雑な・論理的な・単純な）。
【社会的評価】様々な社会的慣習の見地からの評価で、対象となる内容の価値・有効性・真偽的観点からの評価である（例：信憑性のある・無意味・重要・意義深い・有効）。
【位地相】社会階層・速さ・程度・時間軸など、一定の拡がり・範囲の中の程度を示す評価である（例：中流の・遅い・上層部の・早期の）。

なお、表現形態のカテゴリーとして、明示的評価 (inscribed appraisal) （「明示的」以外に適訳がないだろうか）と喚起的評価 (evoked appraisal) の別が設けられている。明示的評価は、「賢い子供」、「邪悪な政府」などのように、態度評価を表す評価語彙によって明示的に示され、喚起的評価は、「よく本を読む子供」、「蝶の羽をむしり取る子供」などのように、明確な評価語を含まず、行動情報、出来事や状態を指し示すことによって間接的に表現される。

2.2 共感と評価の関係

Tangney (2003) は、一個人の感情形成はその人間が対象に対して持つ評価的過程が影響しているとし、1 次的評価として特定イベントに対する個人的な肯/否定的な意味合い、2 次的評価として、そのイベントに対処できるかどうかの評価・査定によって感情が形成されるとしている。つまり、常に自己の対象に対する評価が感情形成の母体であるとする。Lewis et al. (1989) は喜び・悲しみ・恐れ・嫌悪・興味・怒りを 1 次的感情、そして内省を伴う共感・同情・恥・羨望・罪悪感・誇り・後悔を評価的自己意識感情として 2 次的感情と名付け、1 次的感情と区別している。岩壁 (2009) も感情を 1 次的、2 次的感情に分けているが、1 次的感情を「ある場面において個人が最も初めに体験する感情」、2 次的感情を「1 次的感情に対する反応として、ある認知プロセスや心的プロセスに続いて起き、対人関係における感情表出に関する暗黙のルール、性の役割や上下関係などといった社会的慣習や規範から個人が身につける価値基準と関わっている」としている。Ekman and Friesen (1969)

は、非自己意識的感情と自己意識的感情とに分けて、前者を基本感情として、喜怒哀楽を入れ、後者は当惑・誇り・罪悪感・恥などを入れている。

これらは心理学では支配的な議論とされていて、これらの議論に立脚すれば、Martin and White (2005)による感情評価はほぼ 1 次的感情に相当するものと見なすことができる。2 次的感情はいわば社会化された感情と言え、これを Martin and White (2005)の評価システムに適用すると、2 次的感情が判断と査定評価に相当することになる。Martin and White (2005)の概念では、判断・査定評価は感情を基盤にして慣習化またはコード化されるもので、判断は評価者の感情に基づく人の行為やパーソナリティーに対する提言(proposal)、つまり、われわれがどのように振る舞うべきか、あるいは振る舞うべきではないかを述べ、主語がその提供・命令を実現する責任を担うことになる。一方、査定は物事の価値を述べる命題 (proposition) を形作るもので、命題の責任者は主語である。3 者の関係は図 1 に示すように、感情が核心にあり、この核心部から方向を違えて派生するものが他 2 つのカテゴリーと言える。

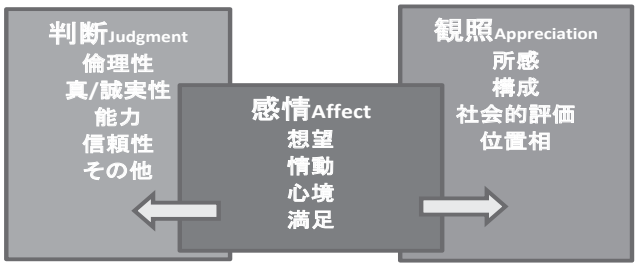


図 1　アプレイザルの評価カテゴリー

これらの概念より、ナラティブにおける評価言語の観察は、ナレーターの他者及び状況に対する共感を反映するものと考えられる。物語のナラティブで評価語彙・表現を入れて登場人物及びそれを取り巻く状況のことを語るということは、他者の視点に立脚することであり、他者の視点を獲得できるということは、認知的共感を反映するものであると考えられるからである。

2.3　方法

(i) 被験者

16 歳から 27 歳までの ASD と診断された IQ 70[6] 以上の 15 名（うち 10 名が女性）と、同じく 10 代後半から 20 代前半の定型発達者 15 名（うち 7 名が女性）が被験者である。

これらの被験者は自閉症スペクトラム障害でも軽度から中度の症状を有する人達である。重症となると、多くの場合、発語は見られずデータとはならない。本実験でも、被験者候補の 1 人に全く発語が見られず、データ収集に不適として含めていない。

知的能力に顕著な遅れのないこうした軽度の例が増えていることが近年

の傾向として言われている。発達障害者支援法（発達障害者支援法ガイドブック編集委員会、 2005）では、軽度発達障害を「知的障害はほとんどないか、あっても軽微である。発達期に明らかになるが、対応によっては、援助が不必要になることもあるし、思春期以降に、社会生活が困難になることもある」として、高機能広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害(ADHD)をあげている。

(ii) 課題絵本

絵本は、デヴィッド・ウィーズナーの「かようびのよる」を使用した。この絵本を採用した理由は、ASD 児（幼児から 12 歳児）20 名に対し、この絵本を含めた 10 冊の絵本を見せて、興味を持った絵本を選ばせたところ、本絵本が最も関心を引き寄せたことによる [7]。なお、本研究の被験者のいずれもがこの絵本を見るのは初めてである。

この作品は、物語中 4 か所に時間が記してある他は文字が記載されていない。物語部分だけで全 30 頁である。絵柄は細部にわたって微細に描きこまれ、登場人物の物理的な動きが明確で、ストーリーの流れが把握しやすい。絵の流れとしては、「火曜の夜 8 時ごろ」と記された頁から、ある沼沢地に場面が移り、亀の登場とともに、葉っぱに乗って空を飛ぶカエルの集団が現れる。カエルの集団は沼沢地から人家のある地域へと飛び、人家の間をそれぞれ悪戯、冒険をして飛び回る。夜明けとともに飛べなくなったカエルは、元の住処に戻る。次の火曜の夜 8 時ごろ、今度は豚が飛び回ることを示唆して物語は終わる。これが粗筋である。

(iii) 手法

被験者に対象絵本を見せ、自由にプロットを組み立てて語るよう指示し、それを録音した。所定の部屋では、課題を指示する実験者 1 名と被験者が向き合って座り、他に関係者は不在である。時間制限は設けていない。

録音データをトランスクライブして態度評価の辞書にかけ、自動的に拾い出された評価語彙-表現の分類についてさらに、2 名の確認者によるマニュアル作業によってコンテクストとの整合性の確認を行った。また分類されたカテゴリーが複数に及ぶ場合も、同様の作業工程がとられた。出された結果を集計し、それぞれ全ナラティブ量、全評価頻度、感情・判断・査定の各カテゴリー別評価頻度、プロンプト [8] 頻度について、定型発達者・ASD 者それぞれ 2 グループ間に違いが見られるかどうかを見るために、独立したサンプルの t 検定にかけた。

3. 結果

ASD 者と定型発達者 2 グループ間で、(1) ナラティブ量 (形態素を計量) 、(2) プロンプト頻度、(3) 全評価頻度、(4) カテゴリー別評価量において違いが見られるかどうかを検定するために、独立サンプルの t 検定を行った結果、ナラティブ総量($t=4.763$, $df=28$, $p<0.01$)、プロンプト頻度($t=3.012$, $df=28$, $P<0.01$)、全評価頻度($t=4.399$, $df=28$, $p<0.01$)。感情評価頻度($t=3.087$, $df=28$, $p<0.01$)、判断評価頻度/($t=3.197$, $df=28$, $p<0.01$)、査定評価頻度($t=3.197$, $df=28$,

p<0.01) の項目とも有意水準 1%で、ASD 者が定型発達者に比べて量及び頻度が少ないことが検証された。表 1、表 2、表 3 は、これらの検定結果を示したものである。

表 1: 独立サンプルの t 検定結果－全ナラティブ量とプロンプト頻度

全ナラティブ量－グループ統計量

	グループ	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
形態素	定型発達	15	459.47	147.143	37.992
	ASD	15	242.20	97.811	25.255

独立サンプルのt検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限	差の 95% 信頼区間 上限
形態素	等分散を仮定する。	1.493	.232	4.763	28	.000	217.267	45.620	123.818	310.716
	等分散を仮定しない。			4.763	24.351	.000	217.267	45.620	123.183	311.350

プロンプト頻度　グループ統計量

	グループ	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
プロンプト頻度	定型発達	15	.07	.258	.067
	ASD	15	2.60	3.247	.838

独立サンプルの検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限	差の 95% 信頼区間 上限
プロンプト頻度	等分散を仮定する。	19.631	.000	-3.012	28	.005	-2.533	.841	-4.256	-.811
	等分散を仮定しない。			-3.012	14.177	.009	-2.533	.841	-4.335	-.732

表 2: 独立サンプルの t 検定結果－全評価頻度

全評価頻度－グループ統計量

	グループ	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
評価数	定型発達	15	22.40	8.733	2.255
	ASD	15	10.47	5.842	1.508

独立サンプルの検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限	差の 95% 信頼区間 上限
評価数	等分散を仮定する。	2.088	.160	4.399	28	.000	11.933	2.713	6.377	17.490
	等分散を仮定しない。			4.399	24.439	.000	11.933	2.713	6.340	17.527

表 3: 独立サンプルの t 検定結果－カテゴリー別評価頻度

感情評価－グループ統計量

	グループ	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
評価数	定型発達	15	7.07	5.021	1.296
	ASD	15	2.73	2.086	.539

独立サンプルの検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限	差の 95% 信頼区間 上限
評価数	等分散を仮定する。	4.865	.036	3.087	28	.005	4.333	1.404	1.458	7.209
	等分散を仮定しない。			3.087	18.694	.006	4.333	1.404	1.392	7.275

判断評価－グループ統計量

	グループ	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
評価数	定型発達	15	2.53	1.767	.456
	ASD	15	1.00	1.648	.425

独立サンプルの検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限	差の 95% 信頼区間 上限
評価数	等分散を仮定する。	2.486	.126	3.197	28	.003	6.067	1.898	2.179	9.954
	等分散を仮定しない。			3.197	25.329	.004	6.067	1.898	2.161	9.972

査定評価－グループ統計量

	グループ	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
評価数	定型発達	15	12.73	5.982	1.544
	ASD	15	6.67	4.271	1.103

独立サンプルの検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限	差の 95% 信頼区間 上限
評価数	等分散を仮定する。	2.486	.126	3.197	28	.003	6.067	1.898	2.179	9.954
	等分散を仮定しない。			3.197	25.329	.004	6.067	1.898	2.161	9.972

4. 考察

(1) ASD 者のナラティブ総量が、定型発達者に比べて少ないこと

表 1 に示した t 検定の結果より、ASD 者が定型発達者に比べて有意にナラ

ティブ総量が少ないことから、「心の理論」の欠損が登場人物の意図やその他の心的状態及び状況の忖度に影響しているとみなせる。

定型発達者の場合は、語り始めると実験者の相槌のみで、プロンプトをほとんど必要とせずにナラティブを続行することが観察された。一方、ASD 者の場合は、半数以上が「わからない」と言って中断しそうになるのを、実験者による「それからどうなったの？」「何でもよいから思い浮かぶことを言ってみて」などのプロンプトによって辛うじて続行が成った。定型発達者では 15 人中ただ 1 人の被験者が 1 回プロンプトを必要とした他は、プロンプトを必要としていないのに対して、ASD 者の場合は半数以上の被験者で複数回にわたってプロンプトを必要とした。表 2 より、t 検定において定型発達者、ASD 者 2 グループ間で、プロンプト頻度の違いに有意確率が得られた ($t=-3.012$, $df=28$, $p<0.01$) 。

ナラティブ総量が少ないことに関して、Tager-Flusberg (1995:54)の実験でも同じ結果が得られているが、その理由として、ASD 児は心的因果関係を示す発話が少ないからであるとしている。行動を示す因果関係の文は定型発達児と差は見られないが、心理的な動きあるいは意図を問題とする物語を、つなげて述べるのに困難を示し、このことが「心の理論」の欠損を示すものであるとしている。山田・笠井 (2011) は、「心の理論」と関連付けてはいないものの、高機能広汎性発達障害児に ITPA 言語学習能力診断検査 [9] を実施し、全検査評価点では明らかな遅れはみられないが、下位項目である「ことばの類推」「ことばの表現」「文の構成」において有意に低い評価値を示したことを報告し、同様に構文の単純性を指摘している。

構文の形態については、本研究の目的外への言及となるため、ここでは ASD 者には複文が定型発達者と比べて少ないことを、本研究から得られた観察事項として述べるに留めておく。

なお、Losh and Gordon (2014)では、ASD 児に実験者が先に物語を聞かせて、その後、被験者にナラティブの再生を行わせた場合と、文字のない絵本を用いて ASD 児から自発的なナラティブを引き出した場合との比較を行ったところ、絵本という視覚的な補助があった場合の方が、ナラティブがよりスムーズに流れたことが報告されている。この報告からすれば、本研究で得られた絵本という視覚的媒体を用いた ASD 者のナラティブは、スムーズ性が比較的高いと想定されるが、定型発達者のそれと比べると、スムーズ性がかなり落ちることがわかった。しかし内容・絵柄等のその他の変数による影響、言い換えれば、当該の絵本の絵柄・内容を感覚的に好むか好まないかといった変数については、別課題として考察する必要があるであろう。

(2) ASD 者の評価総量が定型発達者に比べて少ないこと

Miall (1989)は、物語理解に付随する読み手の感情の役割として、(1)cross-domain（領域間共通的）、(2)anticipatory （予期的）、 (3)self-referential（自己参照的）をあげ、(1)については、特定の事象に焦点をあてて読んでい

たのが、整合性を維持できなくなった場合に、別の事象に焦点を移して解釈するが、その際に読み手の感情が重要な役割を果たすこと、(2)については、読み手は生起する感情に従って物語の展開を予測すること、そして(3)については、読み手自身の経験・関心に沿って文脈を提供するとしている。つまり物語の読解には常に感情喚起が付随し、物語の登場人物をはじめそれを取り巻く状況全般に対する感情移入、つまり共感 (empathy) が付随するということである（楠見・米田、 2007）。このことから、2.2 の議論より、ナラティブに沿った感情喚起が言語使用上、反映されるのが評価言語であるので、ASD 者に評価言語が少ないことは、感情喚起および認知的共感の喚起が十分になされていないということである。

ASD 児の物語のナラティブに関する特徴として、Loveland et al. (1990)は、突飛あるいは不適切な発話といった語用論上の破綻、聞き手への配慮のなさ、また意味ある出来事の表現としてストーリーを理解できないことを報告している。このことから ASD 児のナラティブにおけるディスコース上の問題は、「心の理論」の欠損仮説と一致すると結論づけている。また Baron-Cohen et al. (1986) は、ASD 者の大部分が、定型発達者と比べて、物語のナラティブの中で、因果関係や行動を示す言語表現は用いても、心理的意図を示すために心理的状態を表す言語表現を用いないことを報告している。このことは、心理的意図をつないでゆくことに問題があること、つまり因果関係の説明的枠組みの中で、意図、動機、登場人物の認知・心理について理解したり語ったりすることに問題があることを示唆している。Tager-Flusberg(1995)は、これを「心の理論」の社会認知的欠損を反映するものであるとしている。

ジャンル構造の見地から言えば、評価はナラティブの重要な構成素の 1 つで、この部分を欠くと、単なる報告あるいは要約となる。従って、評価はナラティブの決定構成素となるものである (Linde, 1993) 。一方、リカウント (recount) は単なる出来事の語りで、出来事を語るに値するものとする話し手の評価上の態度は、話全体を通じて含意されるが、別個に独立した構成素としては示されない。そこがナラティブと違う点である。小さな山場はあっても、リカウントは必ずしも問題を扱うわけではなく、その目的は 1 つの出来事がどう次のそれにつながっていくか、出来事の連なりに焦点を置いたものとなる(Eggins and Slade, 1997)。この意味では、ASD 者のナラティブは、リカウントに近いものと言える。例えば、ASD 被験者のうち、全ナラティブ形態素数が 164 のうち、評価頻度数が 2 というケースや、ASD 者としては比較的ナラティブ形態素数が多い 256 というケースでも、評価頻度数が 4 という例などは、聴者の印象としては、単に絵柄の進行を述べているに過ぎない。以下はASD者と定型発達者のナラティブ例であるが、ASD者のナラティブに、登場人物の感情描写は皆無で、淡々とした状況描写に終始する。一方、定型発達者のそれでは、登場人物への感情移入を示す情動・想望を表す評価語彙が随所に織り込まれている。

( )内は実験者の相槌；[ ]内は沈黙秒数

（例 1）ASD 者のナラティブ例

[6s]亀が徘徊している。（うん）うん。[9s]夜にカエルが鳴いている。（うん）[21s]カエルが葉っぱの上に乗って飛んでいる、（はい）カラスと一緒に。（はい）[4s]カエルが頭上から、あ、空から、家を見てる。（うん）[13s]遅めの晩御飯。[32s]カエルと布が飛んでいる。（はい）[2s]さっきの布をカエルが着けて飛んでいる。（うん）カエルが家を見ている。[3s]カエルが家の中に入って、（うん）テレビを見ている。（うん）飛んだ、カエルが。[7s]カエルが、あ、犬がカエルを追いかけている。（うん）犬とカエルが一緒に走っている。（うん）カエルが、うん？[3s]カエルが葉っぱから降りた。で、カエルが、ぴょ、じ、跳ねている。（はい）で、水に入って、（はい）泳いでいて、[3s]カエルの乗っていた葉っぱが、ま、町中に落ちていて、「これは何だ」っていう騒ぎになっている。（うん）[31s]家、家が建っている。（うん）豚が飛んでいる。（うん）

（例 2）定型発達者のナラティブ例

まず、[1s]えー、[1s]この絵に写っている(うん)一匹の(うん)えー、亀さんが空を見上げて、(うん)なにか大量の物が、えー、飛んで、[1s](うんうん)来る、来ていると。(うん)**びっくり（感情/情動）**し、しています。(うん)(うん)[5s]何と、えー、飛んできたのは、えー、葉っぱの(うん)上に、(うん)えー、[1s]カエルが乗って(うん)いて、えー、それが大量に飛んで(うん)きました。(うん)えー、もう、亀さんは**びっくり（感情/情動）**です。(うん)[4s]えー、この大量のカエルたちを見て、えー、(うん)電信柱に留まっている(うん)鳥さんたちも(うん)えー、**びっくり（感情/情動）**してみんな逃げていきます。(うん)[3s]んー、[2s]この(うん)カエルさん達は、一体、(うん)どこへ行くつもりなのでしょう。(うんうん)えー、(うん)[7s]んー、[3s]えっと、[3s]この、え、なんていったらいいかな、これ。[6s]ある家に(うん)えー、[1s]居る男の人も、えー、(うん)その大量のカエルに気づきます。(うん)[4s]えー、(うん)[10s]えー、洗濯物の中も突っ走って、(うん)カエルはえー、(うん)飛んでいきます。(うん)えー、このカエルたちには洗濯物は見えているのでしょうか。(うん)もしかしたら、見えていないかも。(うん)[2s]えー、[2s]そして一つの(うん)家の前で、(うん)カエルたちが、えー、止まります。(うん)[3s]えー、[1s]その家には、(うん)テレビをつけたままで(うん)お婆さんが(うん)寝ていました。(うん)[4s]カエルたちはその部屋の中に入っていって、(うん)えー、つけっぱなしのテレビを消してあげました。(うん)(はい)[8s]えっと、夜明け前の四時三十八分、(うん)えー、[1s]一匹の犬が、えー、大量のカエルたちを呼びます。(うん)[2s]えー、[2s]この(うん)犬は、えー、カエルたちを引き連れて、どこへ行くのでしょう。(うん)[5s]えー、この犬が連れて行った、(うん)えー、[3s]所を見て、(うん)場所を見て、(うん)えー、カエルたちは(うん)**大喜び（感情/情動）**します。(うん)[2s]えー、[1s]次々と、(うん)あ、その、えっと、そこは一つの景色で、(うん)えー、そこには川が、(うん)あ、池がありました。(うん)それを見て(うん)このカエルたちは(うん)葉っぱから飛び降り、次々と(うん)えー、川の中へ入っていきます。(うん)んとー、これは、[1s]えっと、カエル、このカエルたちは、(うん)えーっと、[2s]居場所を探して、(うん)えーっと、居場所を探し求めてここの、(うん)ここにやって来て、(うん)えっと、[1s]きっとその、元々いる場所が(うん)**嫌（感情/ 想望）**で、こう、逃げてきた(うん)と、えー、(うんうん)私は思います。(うんうん)えっと、それでこの犬が、えっと、その、池を(うん)見つけて(うん)[1s]教えてあげたと、(うん)はい、(うん)思います。(うん)でー、えー、次の日、葉っぱだけが大量に落ちていて、(うん)えーと、駆けつけた(うん)警察や、(うん)えー、たちは、もう何がなにかさっぱりわかりません。えー、(うん)[4s]で、次の火曜日、夜七時五十八分、(うん、うん)[3s]えっとその、えっと、カエルたちが(うん)えっと、この飛んでいる豚(うん)たちに、(うん)えっと、[2s]なんか恩返し(うん)をした。というか。(うん)うん、そんな感じ。

評価はそれを通して、話し手がナラティブを聞き手にどう理解させるかを示し、何がポイントかを示すことができるという点で重要である。あるナラティブが意味のあるものとなるかどうかは、話し手がどういう評価を下すか

にかかっている。しかし、DSM-5 で定義されているように、そもそも ASD 者には聞き手に理解させようという意識が薄く、このことは ASD 者の認知構造そのものに起因するものである。こうした点が、ASD 者の対人的社会行動における問題点の根源となるものである。

ASD 者における評価総量の少なさは当然、感情・判断・査定という各カテゴリー別評価量にも反映されるわけであるが、各カテゴリーに偏りが見られるかどうかを見るために、t 検定で調べたところ、カテゴリー別の違いは見られなかった（感情 : $t=3.087, df=28, p<0.01$ / 判断 : $t=3.197, df=28, p<0.01$ / 査定 : $t=3.197, df=28, p<0.01$）。よって、1 次的感情、2 次的感情を問わず、ASD 者は感情喚起が欠損または十分ではないことがわかる。

こうした評価量の違いがどこからくるものなのか。評価をナラティブに織り込むには、絵本に示される登場人物の表情・動き、またその背景に自発的に注意を向け、それらを特別なものとして認識処理し、その脳内工程を物語の終いまで維持する必要があるが、ASD 者にはこうした工程処理能力が欠損していると考えられる。それが言語行動に反映されるということである。

一般に、定型発達者は、対人的行動において、「他者の顔や視線、表出行動に対し、低次の視覚的特徴だけからでは説明できないほど強く、一貫した注意を向け、選択的な処理を行うバイアスを有している」（千住、2014: 112）が、ASD 者にはこれらが欠けているため、社会的行動に困難をきたすとされる [10]。千住(2014)は、これが他者の心的状態を表象することそのものの障害ではなく、それを行うために必要な手段を効率的に用いて認識する工程に何等かの不十分さが関与しているとしている。ASD 者が定型発達者と異なる認知構造を持っているとすれば、社会的通念として捉えられるものとは異なるアウトプットとなっても不思議はない。

ASD 者の認知構造は、物事の部分がそれぞれ別々に存在し、1 つのまとまりとして認知できないところに特徴がある。本研究で用いた絵本の絵柄は微細で、登場人物は表情豊かに描きこまれている。この作品の絵柄の微細性に、ASD 被験者の注意が引かれることを想定したが、特定の細部に対してこだわりを示した被験者はいなかった。しかし、状況を 1 つのまとまりとして捉えるのに困難をきたしていること、あるいは因果関係の錯誤を表出させる表現が散見される例も見られた。例えば、カエルが夜中に庭に干してあるシーツに絡まって飛ぶシーンがあるが、同じ場面について以下の ASD 者と定型発達者の表現例を読み比べるとよくわかる。

（例 3）
ASD 者表現例 1 :「カエルと布が飛んでいる。」
ASD 者表現例 2 :「布団に飛ばされてる。」
ASD 者表現例 3 :「その時、 (うん) 強風が (うん) 巻き起こり、 (うん) カエル、えっと、カエル達の傍に、 (うん) 洗濯物やら何やらが飛んできました。」

定型発達者表現例 1 :「洗濯物が干してある所に (うん) 突っ込んでしまって (うん) 、布を被ってしまったカエルも居たり (ふうん) 、その間をすり抜けて (うん) 布をマントにしたり

(うん) してまた飛んでいきます (うん) 。」
定型発達者表現例 2 :「そしてカエルは、カエルたちは洗濯物に引っ掛かりました。その洗濯物をマントにしているカエルたちも居ます。」
定型発達者表現例3:「たまたまシーツにぶつかったカエルはそれを (うん) なんだろ (うん) 、体に巻いて「格好いいだろ」みたいな (ふうん) 。」

上述のような例では、言語表現の貧困を原因とする見方もあろうが、認知構造の違いに帰する見方が支配的である。千住(2014)は、ASD 者に共感性があるのかないのかを議論することは不毛で、むしろ共感行動の違いに注目して、その違いを引き起こす認知メカニズムについて検証することが必要であるとしている。

(3)情動の活性化を反映する要素

言語に反映される情動の活性化要素に注目したい。ここでは、(i) オノマトペと(ii) 登場人物の直接話法のセリフ及び内言[11]について考えたい。

(i) オノマトペによる評価

日本語は英語などと比べてオノマトペに富んだ言語であるとされる。オノマトペは基本的に音の響きから連想される意味を定着させたものであるから、感覚的なものである。その分、「臨場感のある微妙な描写を実現する」（田村・スコウラップ、 1999）表現である。

また楠見・米田(2007:57)は、感情が生まれる段階を、(1) 評価・選好、(2) 気分、 (3) 感情（情動）の 3 段階に分けている。(1)については、外界からの感覚・運動入力を分析して、「快－不快」「好き－嫌い」などを評価する段階で、(2)はポジティブ－ネガティブで特徴づけられる比較的弱い主観的な状態形成、(3)は比較的強く分化した自律神経系の反応・表出行動が出現する段階であるとし、オノマトペは、(3)の段階の生理的な身体的運動的変化を表現する言語行動であるとしている。また、Kita (1997)は、一般語彙が客観的次元である「分析的次元 (analytic dimension) 」に属するのに対して、オノマトペが主観的次元である「情動的イメージ次元(affect-imagistic dimension)」に属するとしている。

本研究では、定型発達者がナラティブの中で、「カエルはすごすごと元の住処へ戻りました・カエルはびくっとしました・街の人たちはおろおろしました」といったように用いているが、これらは感情を表す評価表現として用いられている。発話者がオノマトペを用いることは、物語の登場人物との情緒的な関わりと、場面の臨場感の認知の深さが反映されるという意味で、認知的共感能力を示すものとみなせる。

本研究では、被験者 2 グループともオノマトペによる評価が散見されたが、頻度において定型発達者が多かった。2 グループ間の違いに有意確率は得られていない。今後、大きなデータでの再検証を課題としたい。なお ASD 者使用のオノマトペに質的な特異さは見られず、定型発達者同様、慣用的な使用枠内で考えられる語彙選択であると考えてよい。表 4 は、被験者のオノマ

トペ使用の頻度を示したものである。

表 4　オノマトペ使用頻度

被験者No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
定型発達	0	0	0	2	1	0	1	3	0	1	2	0	3	0	0
ASD	1	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

(ii) 登場人物の直接話法の発話及び内言

物語を理解する上で生じる感情として、1 つは登場人物のそれと物語を客観的に語る読み手自身の感情の 2 つがあげられる。登場人物の内言、または発言を直接話法の形で発話するのは、単発の評価語彙と違い、登場人物になり切った､登場人物の視点で 1 つのまとまったことが述べられるという点で、「心の理論」が密接に関わってくる。以下は、定型発達者からの例である。

（例 4）
内言：カエルはシーツ、シーツを身に着け、思いました。「これで俺もスーパーマンだ、人間、人間、えーなに、どうしよう、ふふ、人間なんか怖くない」
登場人物の発話：家を探検していると、なんと、その家の犬に見つかってしまいました。「大変だ、助けてくれー」「大丈夫、俺たちは大勢居るから犬、犬なんか怖くない」そう言ってカエルたちは突進し、犬を追い払いました。

表 5 は、被験者 2 グループによる内言及び外言の頻度である。定型発達者にこれらの表現が多く見られるが、2 グループの違いに統計的有意確率は得られていない。この点についてもまた今後、大きなデータでの再検証を課題としたい。

表 5　登場人物の直接話法の発話及び内言の頻度

被験者No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
定型発達	5	4	2	0	6	9	1	15	1	1	1	1	5	1	1
ASD	1	0	5	9	4	0	0	0	1	8	0	1	1	0	0

(4) 包括的な視点から

先述したように、DSM-5 による ASD の診断定義の改正で、ASD は ASD 者の中心的な特徴とされる社会性の欠損のみならず、言語とコミュニケーション障害も含めて判断されることになった。ASD 者の対話における語用論的障害とディスコース・スキルはナラティブ・スキルに関わり、これらは「心の理論」の欠損から解釈されてきている (Tager-Flusberg, 1993) 。一方で､「心の理論」について、近年、その無条件な適用に批判を唱える研究者が出てきている。「心の理論」の適用は、文化によって異なる結果を生むことが確かめられているからである。櫻井・村上(2015)は、心の理論測定には限界があり、多くの場合、サリー・アン課題・スマーティ課題などの誤信念課題を通した間接的測定が主となり、心の理論の一部測定にとどまるとしている。

この「心の理論」による誤信念課題は、言語年齢が 11ー12 歳以上になると ASD 児でも解けるようになることから言語能力が関与するとされているが、これらの ASD 児および、初めから通過している ASD 児も、対人的コミュニケーション上の困難を依然として抱えるため、「心の理論」だけでは ASD 者の社会性障害を説明することはできない（千住、 2014） 。本研究の被験者が、「心の理論」形成期に、サリーとアンのリトマス紙試験を通過したかどうか、あるいはその後遅れて形成されたかどうかはわからない。しかし本研究で得られた観察から、認知的共感の低さが「心の理論」が形成されなかったことによるのか、それとも他の要因が共感形成を妨げているのかという疑問が提示される。

本研究は言語行動の観察以外のスコープを含む情動的共感についての考察には言及していないが、Rogers et al. (2007)や Dziobek et al. (2008)などによる研究では、認知的共感に関しては、定型発達者の方が ASD 者よりも高い共感度を示し、情動的共感に関しては、大きな差はみられないとの結果が報告されている。しかしながら、こうした認知的、情動的と分けて考える立場を否定的にみる立場も出てきている。例えばどの機能に認知的共感・情動的共感を見るかによって、結果に差が出てくることが示唆されている。認知的共感を見るために誤信念理解を、また情動的共感を観察するために自発的模倣を採用した場合、両観察において定型発達者の方が ASD 者よりもよい結果を示すという報告を示したのは Baron-Cohen et al.(1985)などの研究である。このような報告があるために、ASD 者は認知的・情動的両者において問題があるとされてしまうことに、浅田・熊谷(2015)は注意を促している。それよりも、認知的・情動的共感をそれぞれ独立した構成概念とは見ないで、情動認識や模倣といった個々の機能別に ASD 者と定型発達者を比較する方が、ASD 者の共感能力の観察に正確さを期することができるのではないかとしている （浅田・熊谷、 2015:383）。今後の検討課題とする。

なお本研究では、被験者の確保の問題からジェンダーによる違いについて言及していない。被験者である ASD 者 15 名のうち 7 名が女性被験者で、定型発達者では 10 名という不均衡な配分となってしまったからである。ASD は男児が 42 人に 1 人、女児が 189 人に 1 人という割合で、男児が 4.5 倍発生率が高いことが報告されている。圧倒的に男児が多いわけであるが、診断基準によるという報告もある。Kok et al. (2016)は、男女の ASD 者の共感心を比較し、女性の ASD 者が男性の ASD 者と同じパターンを示したことを報告し、定型発達者の場合、女性の方が共感心が高いという報告を出している先行研究を考えると興味深いとしている。ジェンダーによる違いについては、今後の課題としたい。

本研究では、ASD 者の認知的共感が定型発達者よりも低いという仮説をたて、パイロット・スタディとして検証を試みた結果、支持的な結果が引き出せた。よって、次のステップは、この方法論のもと、データ数を増やし、統計的に有意であることを検証することである。現在、加藤は、ASD 及び統合

失調症の言語行動のコーパスを構築中であるが、コーパスにアプレイザルを含めるため、コーパスの完成とともに大きなデータの分析結果が一覧できる。本研究で得られた結果をさらに大きなデータで改めて検証したい。また、統合失調症者のナラティブとの比較も視野に入れている。

Tager-Flusberg (1995)は、ASD 児のナラティブ研究において得られるメリットは、ASD 児のナラティブの能力をはかることで、一般的な心理言語テストでは捉えられないディスコース上の問題点がわかること、また学業遂行の上で、参考情報となることをあげている。本研究は「心の理論」形成時期を過ぎた 10 代後半から 20 代前半にかけての ASD 者を対象に、先行研究で指摘されてきた ASD 者の共感の低さを、言語面の観察から支持したものである。この年代の ASD 者の中心課題は、対人関係上の困難への対処である。対人関係は人間が社会で生存していく上で、逃れることのできない要素である。こうした言語面からの研究は、ASD 者の社会コミュニケーションを困難にする原因を究明するところに意義が見出せる。原因がわかれば、それに沿った対策を講じることができるからである。さらに検証方法の網を緻密なものとしていきたい。

註

1 本研究は、文部科学省科学研究費補助金「基盤研究 B」 (研究代表者：加藤澄) 及び「挑戦的萌芽研究」(研究代表者：加藤澄)による助成を受けて行われた。

2 他者の感情・想望など心の状態を予測・推測することで、この能力は、発達心理学で、人間の発達のある時点で獲得され、一般に 4 歳頃とされている。一方で、この能力が人間に生まれつき備わっているとする生得論もある。

3 「心の理論」の発達を査定するために作られた一連のテストである。例えば、サリーとアンと名付けた人形を用い、サリーにはかご、アンには箱を持たせる。サリーは自分が持っていたビー玉を自分のかごに入れて、自分は外出してしまう。アンはサリーがいない間にサリーのかごからビー玉を取り出して自分の箱に入れる。そこでサリーが戻ってくるとビー玉で遊ぼうとする。課題は、サリーがビー玉を探すのはどこか、というものである。このテストは、ある事象を見た人と見ていない人との差異を認識できるかどうかを問うものである。正解は「かごの中」であるが、自閉症児は、サリーの立場になって考えるということができずに、「箱の中」（誤答）と答えるケースが多い。）

4 自律神経系の興奮などにより、心拍の高まり、血圧の上昇・骨格筋の緊張などが起こることがあげられる。

5 サイコセラピー及び ASD 者と統合失調症患者を対象とした臨床言語実験のために、加藤が作成した辞書である。

6 自閉症スペクトラム障害の中でも、IQ70 以上あれば高機能で、知的障害と言葉の遅れがなければアスベルガ―である。両者の違いは、前者に言語の遅れが見られる点である。しかし、この差異は、時間の経過とともに解消していく。情緒的に問題があったり、あるいは対人関係に困難をきたすという点は両者とも共通している。

7 本研究の被験者とは別に、ASD 児と診断された児童との個別の面接で実施した。

8 ASD 児/者のナラティブが停滞した時に入れる催促あるいは促しで、「さあ、それからどうなるのかな？」「一体、何が起こってるのかな？」などの表現。

9 3 歳 - 9 歳児を対象に行う言語テストで、学習障害や言語発達に遅れを持つ子供の診断と治療教育に有用とされる。

10 認知バイアスのこと。ある事象・対象を評価する時に、自分の利害や希望に沿ったイメージで判断してしまうこと。

[11] ヴィゴツキー（1962）は音声を伴わない内面化された思考のための言語を内言と称した。これと対比するものとして外言があるが、こちらは音声を伴う伝達のための言語である。

参考文献

American Psychological Association (2013)　*DSM-5*.

浅田晃佑・熊谷晉一郎(2015)「発達障害と共感性－自閉症スペクトラム症を中心とした研究動向」『心理学評論』 58.3: 379-388

Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., and Frith, U (1985) Does the Autistic child have a 'theory of mind'**?**　*Cognition*, 21:37-46.

Baron-Cohen, S., Leslie, A.M. and Frith, U. (1986) Mechanical, behavioral and intentional understanding of picture stories in autistics children. *British Journal of Developmental Psychology*, 4: 113-125.

Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., and Jolliffe, T. (1997) Is there a 'language of the eyes'? Evidence from normal adults, and adults with autism or Asperger syndrome.　*Visual Cognition*, 4: 311-331.

Colle, L., Baron-Cohen, S., Wheelwright, S, van der Lely, H.K.J. (2008) Narrative Discourse in Adults with High-Functioning Autism or Asperger Syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*. 38: 28-40.

デビット・ウィーズナー (2000) 『かようびのよる』　東京：徳間書店

Dziobek, I., Rogers, K., Fleck, S., Bahnemann, M., Heekeren, H.R., Wolf, O.T., and Convit, A. (2008) Dissociation of cognitive and emotional empathy in adults with Asperger syndrome using the Multi-faceted Empathy Test (MET). *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 38: 464-473.

Eggins, S. and Slade, D. (1997) *Analysing Casual Conversation*. London and Washington: Cassell.

Ekman, P., and Friesen, W.V. (1969) The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1: 49-98.

畑中千紘 (2011) 『話の聴き方からみた軽度発達障害』東京：創元社

発達障害者支援法ガイドブック編集委員会 (2005) 『発達障害者支援法ガイドブック』東京：河出書房新社

Heerey, E.A., Keltner, A., and Capps, L.M. (2003) Making sense of self-conscious emotion: linking theory of mind and emotion in children with autism. *Emotion*, 3: 394-400.

岩壁茂 (2009) 「感情のアセスメント」『臨床心理』第 9 巻 4 号.東京：金剛出版

加藤澄 (2016) 『サイコセラピー臨床言語論－言語研究の方法論と臨床家の言語トレーニングのために』東京：明石書店.

Kita, S. (1997) Two-dimensional Semantic Analysis of Japanese Mimetics. *Linguistics* 35: 379-415.

Kok, F.M., Groen, Y., Becke, M. Fuermaier, A.B.M., Tucha, O. (2016) Self-Reported Empathy in Adult Women with Autism Spectrum Disorders-A Systematic Mini Review. *PLOS ONE*.

楠見孝・米田英嗣 (2007) 「感情と言語」 『感情科学』 藤田和生（編）京都大学学術出版会

Lewis, M., Sullivan, M.W., Stanger, C., and Weiss, M. (1989) Self Development and Self Conscious Emotions. *Child Development*, 60: 146-156.

Linde, C. (1993) *Life Stories: The Creation of Coherence.* Oxford Univerity Press.

Losh, M. and Gordon, P.C. (2014) Quantifying Narrative Ability in Autism Spectrum Disorder: A Computational Linguistic analysis of Narrative Coherence. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 44.12: 3016-3025.

Loveland, K.S., McEvoy, R.E. Tunali, B. and Kelley, M.L. (1990) Narrative story telling in autism and Down's syndrome. *British Journal of Developmental Psychology*, 8: 9-23.

Martin, J.R. and White, P.R.R. (2005) *The Language of Evaluation: Appraisal in English*. Palgrave Macmillan.

Miall, D.S. (1989) Beyond the schema given: Affective Comprehension of Literary Narratives. *Cognition and Emotion*, 3: 55-78.

森則夫・杉山登志郎・岩田泰秀 (2014) 『臨床家のための DSM-5 虎の巻』東京：日本評論社.

Rogers, K., Dziobek, I., Hassenstab, J., Wolf, O., and Convit, A. (2007) Who cares? Revisiting empathy in Asperger syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 37: 709-715.

櫻井茂男・村上達也 (2015) 「共感性と社会的行動の関係についてー溝川・子安論文へのコメント」『心理学評論』 58.3: 372-378

千住　惇(2014) 「共感と自閉スペクトラム症」『岩波講座　コミュニケーションの認知科学第 2 巻』東京：岩波書店

Tager-Flusberg, H. (1993) 'What language reveals about the understanding of mind in children with autism'. In S Baron-Cohen, H. Tager-Flusberg and D.J. Cohen (eds), *Understanding Other Minds: Perspectives from Autism*. Oxford University Press.

Tager-Flusberg, H. (1995) "Once upon a ribbit": stories narrated by autistic children. *British Journal of Developmental Psychology*, 13: 45-59.

Tager-Flusberg, H., and Sullivan, K. (1995) Attributing mental states to story characters: A comparison of narratives produced by autistic and mentally retarded individuals. *Applied Psycholinguistics*, 16: 241-256.

田丸育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ―形態と意味』東京：くろしお出版

Tangney, J.P. (2003): 'Self-relevant emotions'. In M.R. Leary and J.P. Tangney (ed.) *Handbook of self and identity*. Guilford Press.

レフ・ヴィゴツキー (1962) 『思考と言語』柴田由松訳. 東京：明治図書.

山田有紀・笠井新一郎 (2011) 「高機能広汎性発達障害児の言語能力-ITPA の分析から」『音声言語医学』52. 4 :366-371

JASFL
Occasional Papers

Volume 1 Number 1 Autumn 1998

Articles （論文）

Thematic Development in *Norwei no Mori*:
Arguing the Need to Account for Co-referential Ellipsis 5
ELIZABETH THOMSON

Synergy on the Page: Exploring *intersemiotic complementarity*
in Page-based Multimodal Text 25
TERRY D. ROYCE

Intonation in English – Workshop 51
WENDY L. BOWCHER

日本語の「主語」に関する一考察 69
On the Definition of "Subject" in Japanese
塚田　浩恭　HIROYASU TSUKADA

イデオロギー仮説の落し穴 79
A Theoretical Pitfall in the Ideology Hypothesis
南里　敬三　KEIZO NANRI

談話の展開における「観念構成的結束性」と書記テクストの分類 91
'Ideational Cohesion' in Discourse Development and in the Classification of Written Text
佐藤　勝之　KATSUYUKI SATO

英語における節の主題：選択体系機能理論におけるメタ機能の視点からの再検討 103
Theme of a Clause in English: A Reconsideration from the Metafunctional Perspective in Systemic Functional Theory
山口　登　NOBORU YAMAGUCHI

JASFL Occasional Papers

Volume 2 Number 1 Autumn 2001

Articles （論文）

Linguistic Analysis and Literary Interpretation 5
RICHARD BLIGHT

A Note on the Interpersonal-Nuance Carriers in Japanese 17
KEN-ICHI KADOOKA

Schematic Structure and the Selection of Themes 29
HARUKI TAKEUCHI

Theme, T-units and Method of Development: An Examination of the News Story in Japanese 39
ELIZABETH ANNE THOMSON

セミオティックベースとそれを利用したテクスト処理について 63
The Semiotic Base as a Resource in Text Processing Systems
伊藤紀子、小林一郎、菅野道夫　NORIKO ITO, ICHIRO KOBAYASHI & MICHIO SUGENO

選択体系機能文法の英語教育への応用：節、過程中核部、主題の分析による作文の評価 73
Applying Systemic Functional Grammar to English Education: Evaluating the Writing of EFL Students Base on the Analysis of Clause, Process and Theme
佐々木真　MAKOTO SASAKI

日本語の対人的機能と「伝達的ユニット」—The Kyoto Grammarによる分析試論— 99
(pp.99-113）　The Interpersonal Function and the Communicative Unit for Japanese: From the Approach of 'The Kyoto Grammar
船本弘史　HIROSHI FUNAMOTO

日英翻訳におけるThemeに関する課題 115
Thematic Challenges in Translation between Japanese and English
長沼美香子　MIKAKO NAGANUMA

テクストの中の母性 129
Maternity in Text
南里敬三　KEIZO NANRI

JASFL Occasional Papers

Volume 3 Number 1 Autumn 2004

Articles （論文）

Lexicogrammatical Resources in Spoken and Written Texts 5
Chie HAYAKAWA

On the Multi-Layer Structure of Metafunctions 43
Ken-Ichi KADOOKA

An Attempt to Elucidate Textual Organization in Japanese 63
Keizo NANRI

A Comparative Analysis of Various Features Found in Newspaper Editorials and Scientific Papers, Including 'Identifying Clauses' 81
Makoto OSHINA & Kyoko IMAMURA

Constructions of Figures 93
Katsuyuki SATO

Technocratic Discourse: Deploying Lexicogrammatical Resources for Technical Knowledge as Political Strategies 105
Kinuko SUTO

Application of Syntactic and Logico-semantic Relationships between Clauses to the Analysis of a Multimodal Text 157
Haruki TAKEUCHI

An Analysis of Narrative: its Generic Structure and Lexicogrammatical Resources 173
Masamichi WASHITAKE

選択体系機能言語学に基づく日本語テクスト理解システムの実装 189
Implementation of a Japanese Text Understanding System Based on Systemic Functional Linguistics
伊藤紀子、杉本徹、菅野道夫
Noriko ITO, Toru SUGIMOTO & Michio SUGENO

タスク解決に関する対話における修辞構造を用いたステージの規定 207
The Definition of Stages Using Rhetorical Structure in Dialogue on Task Solutions
高橋祐介、小林一郎、菅野道夫
Yusuke TAKAHASHI, Iichiro KOBAYASHI & Michio SUGENO

外国為替記事のドメインのモデル化一機能的分析 225
The Domain Modelling of Foreign Exchange Reports: a Functional Analysis
照屋一博　Kazuhiro TERUYA

機能言語学研究

Japanese Journal of
Systemic Functional Linguistics
Vol. 4 April 2007

Articles

文法的メタファー事始め 1
The Grammatical Metaphor As I See It
安井　稔
Minoru YASUI

A Systemic Approach to the Typology of Copulative Construction 21
Ken-Ichi KADOOKA

Text Structure of Written Administrative Directives in the Japanese and
Australian Workplaces 41
Yumiko MIZUSAWA

A Case Study of Early Language Development: Halliday's model (1975)
of Primitive Functions in Infants' Protolanguage 53
Noriko KIMURA

日本語ヘルプテクストへの修辞構造分析と対話型ユーザ支援
システムへの応用 83
An Analysis of Rhetorical Structure of Japanese Instructional Texts and its
Application to Dialogue-based Question Answering Systems
伊藤紀子、杉本徹、岩下志乃、小林一郎、菅野道夫
Noriko ITO, Toru SUGIMOTO, Shino IWASHITA, Ichiro KOBAYASHI & Michio
SUGENO

Proceedings of JASFL

Vol. 1 October 2007

Articles

日本語テクストにおける過程構成の統計的分析 1
藤田　透

『羅生門』の研究　―物質過程を中心に― 9
鷲嶽正道

日中・中日翻訳におけるテクスト形成的機能：
「出発点」の特徴に関する対応分析 19
鄧　敏君

日本語テクストにおける Theme の有標性への視点 21
長沼美香子

サイコセラピーにおけるクライアントの洞察と談話の結束性との連関 45
加藤　澄、エアハード・マッケンターラー

米国の煙草の広告の Reading Path 59
奈倉年江

アスペクト表現における対人的機能の考察 65
船本弘史

日本語を母国語とする幼児における Primitive functions (Halliday 1975)
の出現と使用に関するケーススタディ 75
木村紀子

日本の英語教科書にみられるジャンル 89
早川知江

The Role of Genre in Language Teaching: The Case of EAP and ESP 105
Virginia M. Peng

Texts, Systemics and Education: An Expansion of a Symposium
Contribution to the 2006 JASFL Conference 115
David Dykes

Proceedings of JASFL

Vol. 2 October 2008

Articles

The Kyoto Grammar の枠組みによる品質を表す形容詞の分析 1
藤田　透

日本語助動詞の研究：多義性から多機能性へ 11
船本弘史

Grammatical Intricacy, Genre, Language Function and Pedagogy 23
Howard DOYLE

日本語・英語の「説得」：観念構成的意味を中心に 39
佐藤（須藤）絹子

Are There Modal Imperatives? – Just Someone Dare Say No! 51
David DYKES

英語教育におけるジャンルと過程型 67
早川知江

サイコセラピーにおける問題の外在化のための語彙-文法資源 83
加藤　澄

日本語テクストの Subject と Predicate の役割に関する一考察 97
水澤祐美子

Honorifics and Interpersonal Function 107
Miroslawa KACZMAREK

イデオロギーの復興 123
南里敬三

「は」と「が」そのメタ機能からの再考 135
龍城正明

機能言語学研究

Japanese Journal of
Systemic Functional Linguistics
Vol. 5 June 2009

Articles

An Analysis of Intonation from the Viewpoints of Strata and Metafunctions 1
Ken-Ichi KADOOKA

An Analysis of the Polysemy of Processes Realised by Japanese Adjectives:
The System Network for Process Types in the Kyoto Grammar 17
Toru FUJITA

日本語の新聞報道記事のジャンル構造 33
鷲嶽正道

Genre-Based Approach to Teaching Tense in English Classes:
Tense in Art Book Commentaries 47
Chie HAYAKAWA

Interpersonal Strategies of ENGAGEMENT in Public Speaking:
A Case Study of Japanese and Australian Students' Speech Scripts 69
Keiko OZAWA

「話し言葉らしさ・書き言葉らしさ」の計測
―語彙密度の日本語への適用性の検証― 89
佐野大樹

語彙的意味の共有度より導かれる治療アプローチの違いと
サイコセラピーにおけるテクスト性の捉え方 103
加藤　澄

Concession and Assertion in President Obama's Inauguration Speech 131
David DYKES

Proceedings of JASFL

Vol. 3 October 2009

Articles

文言テクストの 2 つの解釈
—「漢文訓読」とプリンストン大学「古典中国語」— 1
佐藤 勝之

ESL/EFL リーディング教科書の批判的談話分析 15
阿部　聡、田中　真由美

ジャンルと英語教育：美術書にみる文法資源選択の偏り 25
早川 知江

日本語の形容詞と動詞が具現する過程型： 39
The Kyoto Grammar の選択体系網を用いた分析
藤田　透

日本語における無助詞の機能—主題性を中心に— 49
福田一雄

日本語における経験機能文法の構築 59
南里敬三

日本における SFL の英語教育への応用：5 文型と be 動詞を中心として 73
佐々木真

Proceedings of JASFL

Vol. 4 October 2010

Articles （論文）

日本語の呼称表現の会話における機能 1
小堀千寿

The Genre of, and the Genres within, the English Conversation:
Successfully Creating Conversational Texts in the EFL Classroom 13
Anthony G. RYAN

Critical Discourse Analysis of a Government Approved Textbook:
Aiming for its Application to English Language Teaching 29
Mayumi TANAKA

A Systemic Functional Study of Particles in Japanese and Cantonese:
an Initial Exploration 41
Ayako OCHI and Marvin LAM

日本語の Visual Syntax 59
奈倉年江

3 種類の日本語ヘルプテクストの修辞構造分析と比較 69
伊藤紀子、 岩下志乃、杉本徹、小林一郎

節境界に関わる問題：動詞の文法化 79
早川知江

Modeling Time and Space in Narrative Research Interviews 93
Patrick KIERNAN

社説からリサーチ･ペーパーへ 105
石川　彰

日本機能言語学会第 17 回秋期大会プログラム 119

機能言語学研究

Japanese Journal of
Systemic Functional Linguistics
Vol. 6 April 2011

Articles

A Cross-linguistic Study of Punch Line Paratone in Japanese and English 1
Ken-Ichi KADOOKA

機能文法における節境界の問題と認定基準の提案 17
早川知江、佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子

現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 59
—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と
脱文脈化言語・文脈化言語の関係—
佐野大樹、小磯花絵

社会的機能に基づくテクスト分類法の構築に向けて 83
—システミック理論の観点から—
水澤祐美子、佐野大樹

ジャンルによる社説記事の分析：一試案 105
石川　彰

Evaluation and Identity Extending Appraisal Theory to Explore 127
Positionings of Self
Patrick Kiernan

A Socio-Cognitive Journey: Construction of an Adiachronic LS Model 147
Keizo NANRI

In Search of the Persona of a Parenting Advice Writer 175
David DYKES

「なる」視点より「する」視点への変換プロセスの解析 187
—サイコセラピーにおけるクライエントの変化測定—
加藤　澄

Proceedings of JASFL

Vol. 5 October 2011

Articles （論文）

The Analysis of Evaluative Stances across Genres of Research
-Following the Prosodies of Value in Attitudinal Terms– 1
Tomoyo OKUDA

日本語の CIRCUMSTANCE System について 11
早川知江

The Kyoto Grammar による助動詞群の過程構成中での分析 25
藤田　透

広告画像の‘排他性’はどのように具現されるのか。 37
奈倉年江

An Expert Advice Writer's Persona: Three Faces of Role Enactment 43
David DYKES

マクロ・ジャンルとしての新聞 53
鷲嶽正道

英字新聞記事におけるアプレイザルのはたらきについて
―テクストにおける主情報の展開とその評価― 61
飯村龍一

Evaluative Resources for Managing Persona in Narrative 75
Patrick KIERNAN

An Analysis of Local textual Cohesion Surrounding Contrastive Concepts
and Positions in Lecture Texts 87
Akira ISHIKAWA

日本語関係過程の意味構造
―措定文・指定文・同定文・同一性文の区別について― 101
福田一雄

日本機能言語学会第 18 回秋期大会プログラム 115

Proceedings of JASFL

Vol. 6 October 2012

Articles （論文）

法副詞 *no doubt, doubtless, undoubtedly* の生起文脈について
—過程構成の観点から— 1
鈴木大介

A First Look at Classroom Curriculum Genres
in Japanese Tertiary EFL 11
Thomas AMUNDRUD

日本語のモダリティ：階層下降か文法的比喩か 19
早川 知江

日本語と英語の天気予報におけるマルチモダリティー 33
鷲嶽正道

修辞ユニット分析による Q&A
サイトアットコスメ美容事典と Yahoo!知恵袋の比較 45
田中弥生

Exploring Identity Negotiation in an Online Community 59
Patrick KIERNAN

Characterising the Argumentative Nature of Opinion Articles 73
Akira ISHIKAWA

日本機能言語学会第 19 回秋期大会プログラム 87

機能言語学研究

Japanese Journal of
Systemic Functional Linguistics
Vol. 7 May 2013

論文

日本語のコト、ノの扱い：名詞群の Head か助動詞化か 1
早川知江

機能文法による日本語説明モダリティの分析 23
角岡賢一

Two Characteristics of the Essay as a Genre 43
Akira ISHIKAWA

クチコミサイトにおける修辞機能の商品評価の高低による違い 59
―修辞ユニット分析による検討―
田中弥生

クライエントの過程構成のマッピングより得られる 75
変化測定尺度としての起動者性
―心理療法を基に―
加藤　澄

Proceedings of JASFL

Vol. 7 October 2013

論文

Affiliation over Crisis:Physicists' Use of Twitter Mode on
Fukushima Daiichi NPP Accident 1
Ayumi INAKO

Clause Type and Speech Functions in a Time Management Advice Text 15
David DYKES

Making the Link
–The Use of Links and Other Forms of Reference in Online Forums– 27
Patrick KIERNAN

Institutionalizing Culture: Role of Appraisal in Story Genres 37
Hyo Chang HONG and Shinji KAWAMITSU

日本語を非母語とする日本語学習者が書いたお礼の手紙の考察 47
水澤祐美子、Rowena WARD

A Registerial Study of Reporting and Exploring Text Types
in Japanese, Chinese and English 57
Sonya CHIK

日本語の心理過程：「見る」と「見える」 71
早川知江

External and Internal Conjunction Reexamined:
An Attempt to Expand the Conjunctive System 85
Akira ISHIKAWA

教科書は教育的イデオロギーを超えられるか
―事例研究『走れメロス』― 99
佐藤勝之

報道における投射文のもつ言語論理 113
照屋一博

日本機能言語学会第 20 回秋期大会プログラム 125

Proceedings of JASFL

Vol. 8 October 2014

論文

絵本の文と絵：bimodal text における意味の相補性 1
早川知江

主語省略に対するテクスト的制約要因についての考察 15
付　改華

Is Tripadvisor® a Travel Site or an Advice Site, and does it Make a Difference? 27
David DYKES

Organising Customer Actions in Commercial Context:
a Comparative Analysis in Japanese, English and Chinese 37
Sonya CHIK

Internal Conjunction as Argumentative Operations 51
Akira ISHIKAWA

Coming Clean –Evaluation and the Language of Public Confession 65
Patrick KIERNAN

How Can Systemic Functional Grammar Support the Teaching of New Technologies 75
Peter MCDONALD

日本機能言語学会第 21 回秋期大会プログラム 87

機能言語学研究

Japanese Journal of
Systemic Functional Linguistics
Vol. 8 June 2015

論文

The Language of Space: Semiotic Resources for Construing
Our Experience of Space 1
Christian M.I.M. MATTHIESSEN

Framing Success Stories: Framing and Multimodality in Learning Histories 65
Patrick KIERNAN

Multimodal Cooperation: Verbal-visual Relations in Introductory Textbooks
in Humanities and Science in English 79
Masamichi WASHITAKE

絵本における登場人物と読み手が織りなす三者関係による
対人的な意味の様相 101
奥泉　香・水澤祐美子

絵本の文と絵の関係性システム 117
早川知江

The Oral Discourse in CLIL Lessons: A Functional Perspective 143
Gilder DAVILA

名詞化された感情評価語彙の変化が特定する心理療法プロセスの
発達段階 161
加藤　澄

Proceedings of JASFL

Vol. 9 October 2015

論文

絵本の絵と文：表現の得手不得手と協力関係 1
早川知江

対人的メタ機能とテクスト形成的メタ機能の観点からの
日英コードスイッチングの分析 15
難波和彦

Utilizing Systemic Functional Grammar to Support Comprehension
in the Language Classroom 25
Peter MCDONALD

Rhetorical Relations in Japanese and English Corporate Enabling Texts 39
Sonya CHIK

A Survey of Travel Reviews for <Mount Fuji Fifth Station>
Entered on TripAdvisor.com in August, 2014 53
David DYKES

絵本における見開きを単位とした多層的意味構築の様相 63
奥泉　香

3 人会話における優位性と（非）言語行動の関係 77
伊藤紀子、鈴木紀子、阪田真己子

“Hey you, thanks for buying our stuff.” —Language, Multimodality
and Identity in Two Corporate Websites: Shimano and Surly 89
Patrick KIERNAN

Extending the Notion of Modal Responsibility 103
Akira ISHIKAWA

日本機能言語学会第 22 回秋期大会プログラム 117

Proceedings of JASFL

Vol. 10 October 2016

論文

絵で表せる意味、文で表せる意味：絵本の文を絵にする 1
早川知江

Authorial Stance on the Move: Published and L2 Learners' Research
Abstracts in Applied Linguistics 15
Ming-Chia LIN

Systemic Functional Approaches to Task-Based Language Teaching:
Developing Language and Writing Skills through Genre-Based Tasks 25
Sachiko YASUDA

Propositions of risk facing and proposals to run risks 37
David DYKES

Signalling chunking by means of topic and focus:
some patterns of text chunking 51
Akira ISHIKAWA

テクスト構造とテクスト生成者の関係をめぐる二つの課題 65
南里敬三

日本機能言語学会第 23 回秋期大会プログラム 79

『機能言語学研究』および*Proceedings of JASFL*
作成と投稿のための規約

作成と投稿のための規約

1.　使用言語

日本語または英語

2.　原稿の種類

（1）研究論文　（2）書評・紹介　（3）研究ノート

3.　独創性

投稿原稿は以下の条件を満たす場合にのみ出版の対象として考慮する。

(1)　著者のオリジナルな著作であること。

(2)　他の出版物に同時に応募しないこと。

(3)　他の学会で既に発表した内容のもの（同一の内容のもの、同一のタイトルのもの、発表言語だけを変えたもの等)、重複発表と見なされるものは受け付けない。また重複発表と見なされたものは発表後であっても採択の許諾を取り消すこととする。

(4)　著作権は各著者に属する。ただし再版の権利は日本機能言語学会に属する。

4.　投稿資格

投稿は会員にかぎる。ただし共著の場合は筆頭著者が会員であればよい。

5.　審査方法

審査の際はすべての原稿は無記名とし、３名の審査員が審査する。

6.　書式と構成

6.1　書式設定とファイル形式

用紙をB5とし、余白は上下左右各25ミリをとる。使用するワープロソフトは問わないが、ファイルはMicrosoft Word互換のファイル(docまたはdocxファイル)として保存、投稿する。

6.2　フォント設定と行間

日本語で書く場合のフォントはＭＳ明朝（11ポイント）、英語で書く場合はTimes New Roman（11ポイント）の文字サイズを用いることとし、シングルスペースの行間とする。

6.3　語数

『機能言語学研究』：日本語の場合 22000 文字以内、英語の場合 7000 語以内とする。

Proceedings of JASFL: B5 14 ページ以内とする。

6.4 要旨

執筆する言語にかかわらず、論文要旨を必ず英語で100字～200語にまとめ、冒頭に記載する。

6.5 タイトル

日本語で執筆する場合には英語のタイトルを必ず記載する。タイトルの表記法は下記を参考にする。

例：　日本におけるSFL理論の英語教育への応用
On Application of SFL to English Education in Japan

6.6 セクション構成と段落

日本語で執筆する場合、 セクションおよび段落の最初は字下げをする。ただし、英語で執筆する場合、セクションの最初は字下げ（インデント）せず、２段落目からインデントする。セクションのタイトルは左寄せとする。またセクションの番号は「１」から始めることとする（「０」は使用しない）。

7. 参照方法

参照したすべての文献（著書、モノグラフ、論文他）は本文中の適切な場所で明示すること。その方法は以下を参照すること。

7.1 直接引用

原文をそのまま引用する場合は必ず「 」内に入れる。引用文が４行を超えるときは本文の中に挿入せず、全文をインデントして本文から一行空けて切り離す。

7.2 著者への参照方法

a. 著者名が本文に記されている場合は、その直後に出版年とページのみを (　)に入れて示す。例「Halliday (1994：17) が述べているように…」

b. 特定の個所ではなく、より一般的に参照する場合は、著者名の直後に出版年のみを (　) に入れて示す。例「Hasan (1993) は次のように述べている。すなわち…」

c. 著者名が本文中に記述されない場合は、著者名も (　) に入れ、（著者、コンマ、年）の順で記載する。例 (Martin, 1992)。」

d. 著者が２名の場合は二人の姓を入れる。例 (Birrell and Cole, 1987)

e. 著者が３名以上の場合は筆頭著者名のみを出し、ほかは「他」として全著者名は出さない。(Smith et al., 1986)

f. 同じ著者の同じ年の出版物を２冊以上参考文献として使う場合は、それぞれの著作の出版年に‘a’, ‘b’ 等の文字を付記して区別する。例 (Martin, 1985a)

g. 同一個所に複数の参考文献を付ける場合には、すべての文献を１つの (　) 内に入れ、各文献をセミコロンで区切る。例 (Maguire, 1984; Rowe, 1987; Thompson, 1988)

7.3　略語

同一文献に２回目以降言及する場合にも最初の場合と同様にして、‘*ibid.*’, ‘*op.cit.*’, ‘*loc.cit.*’ 等の略語は用いない。

8.　参考文献

参考文献は本文で引用・参照したもの、および原稿の準備段階で使用した文献すべてをリストに載せること。著者の姓のアルファベット順、同一著者ならば出版年の順に並べる。

8.1　書籍

１つの文献の記述は、著者名、(　) に入れて出版年、著作名、出版地、出版社、必要ならばページの順序に出す。　記載方法は下記の例に倣うこと。

a.　単著の例：

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』第2巻 東京：くろしお出版

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2nd edition*. London: Arnold.

b.　共著の例：

益岡隆志、田窪行則 (1992)　『基礎日本語文法』東京：くろしお出版

Martin, J. R. and Rose, D. (2004) *Working with discourse: meaning beyond the clause*. London: Continuum.

c.　単一編纂者図書の例：

龍城正明（編）(2006)『ことばは生きている』東京：くろしお出版

Christie, F. (ed.) (1999) *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Process*. London: Cassell.

d.　複数編纂者図書の例：

仁田義雄、益岡隆志（編）(1989)『日本語のモダリティ』東京：くろしお出版

Hasan, R. and Williams, G. (eds) (1996) *Literacy in Society*. London: Longman.

8.2　雑誌の論文

論文名は「　」内に入れ、雑誌名は『　』内に入れ、巻、号、ページを記載する。英語の場合は雑誌名をイタリックにし、巻、号、ページを記載する。ただし英語の場合、タイトルはそのまま表記する。また編纂図書の一セクションを形成している場合は‘　’で囲むこととする。

例：

安井稔（2007）「文法的メタファー事始め」，『機能言語学研究』4：1−20

龍城正明 (2008)「「は」と「が」そのメタ機能からの再考」, *Proceedings of JASFL*, 4: 115-149

Halliday, M.A.K. (1966) Notes on transitivity and theme in English, Part1, *Journal of Linguistics*, 3.1: 37-81.

Matthiessen, C.M.I.M. (2004) 'Descriptive motifs and generalizations'. In A. Caffarel, J.R. Martin and C.M.I.M. Matthiessen (eds), *Language Typology: a Functional Perspective* 537-674. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

9.　註

註はできるだけ避ける。どうしても必要な場合は簡潔にし、本文の最後、参考文献の前に置く。

10.　図、表、地図、グラフ

これらはすべて本文中該当箇所に挿入する。コンピューターでスキャンしたり、写真撮影したりする際不鮮明にならないよう、文字、数字、線等は太く、はっきりと書いておくこと。

11.　校正

著者は編集者から送付された編集済みファイルの校正（初稿のみ）をする。

12.　原稿提出

原稿電子ファイルで、添付ファイルとして提出すること。フォーマットはMS-Word互換ファイル (.doc, .docx)とする

13.　原稿送付先

jasfleditor@gmail.com

Notes for contributors to *Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics* and *Proceedings of JASFL*

1. Language

Manuscripts may be submitted in English or Japanese.

2. Types of Manuscripts

(1) Standard Articles (2) Review Articles and Book Review (3) Research Notes

3. Originality

Manuscripts are considered for publication only on the understanding that they are not simultaneously under consideration elsewhere, and that they are the original work of the author(s). Any previous form of publication and current consideration in other languages are not accepted. If the manuscript has been deemed as the same content published before in other books and journals, the validity of selection is eliminated and the article is excluded from the journal. Copyright is retained by the individual authors, but JASFL is authorized to reprint.

4. Qualification

JASFL members are exclusively eligible to contribute to publications; however, regarding an article by multiple authors, the main author at least is requested to be a JASFL member.

5. Assessment procedures

Articles are subject to the usual process of anonymous review. Articles are read by three reviewers.

6. Formats

6.1 Document format

All pages can be created with any word processor under a condition that the file is saved as Microsoft WORD format (.doc, .docx) on B5-sized paper, with margins of 25 mm or 1 inch on every side.

6.2 Fonts and Spacing

Manuscripts are typed in Times New Roman (11 point) with single spacing.

6.3 The word limit

Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics:

Manuscripts are not allowed to go beyond 7,000 words.

Proceedings of JASFL:

Manuscripts are not allowed to go beyond 14 pages in the B5 format.

6.4 Abstract

An English abstract of 100-200 words is included in the beginning of the text.

6.5 Title

English title is required when a manuscript is written in Japanese.

6.6 Indentation and Section Number

Indentation is required from the second paragraph of a section. The first section number starts with "1", NOT "0".

7. Format for References in the Text

All references to or quotations from books, monographs, articles, and other sources should be identified clearly at an appropriate point in the main text, as follows:

7.1 Direct quotation

All direct quotations should be enclosed in single quotations. If they extend more than four lines, they should be separated from the body and properly indented.

7.2 Reference to an author and more than one authors

a. When the author's name is in the text, only the year of publication and the page should be enclosed within the parentheses, e.g. 'As Halliday (1994: 17) has observed …'

b. When the reference is in a more general sense, the year of publication alone can be given, e.g. 'Hasan (1993) argues that …'

c. When the author's name is not in the text, both the author's name and year of publication should be within the parentheses and separated by a comma, e.g. (Matthiessen, 1992)

d. When the reference has dual authorship, the two names should be given, e.g. (Birrell and Cole, 1987)

e. When the reference has three or more authors, the first author's name should be given and the rest should be written as 'et al.', e.g. (Smith et al., 1986)

f. If there is more than one reference to the same author and year, they should be distinguished by use of the letters 'a', 'b', etc. next to the year of publication, e.g. (Martin, 1985a).

g. If there is a series of references, all of them should be enclosed within a single pair of parentheses, separated by semicolons, e.g. (Maguire, 1984; Rowe, 1987; Thompson, 1988).

7.3 Abbreviation

If the same source is referred to or quoted from subsequently, the citations should be written as the first citation. Other forms such as '*ibid.*', '*op.cit.*', or '*loc.cit.*' should not be used.

8. Reference List

The Reference List should include all entries cited in the text, or any other items used to prepare the manuscript, and be arranged alphabetically by the author's surname with the year of publication. This list should be given in a separate, headed, reference section. Please follow the examples given:

8.1 Books

a. A single-authored book

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2nd edition*. London: Arnold.

b. A multiple-authored book

Martin, J. R. and Rose, D. (2004) *Working with discourse: meaning beyond the clause*. London: Continuum.

c. A single-edited book

Christie, F. (ed.) (1999) *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Process*. London: Cassell.

d. A multiple-edited book

Hasan, R. and Williams, G. (eds) (1996) *Literacy in Society*. London: Longman.

8.2 Articles in journals and edited books

Halliday, M. A. K. (1966) Notes on transitivity and theme in English, Part1, *Journal of Linguistics*, 3.1: 37-81.

Matthiessen, C.M.I.M. (2004) 'Descriptive motifs and generalizations'. In A. Caffarel, J.R. Martin and C.M.I.M. Matthiessen (eds), *Language Typology: a Functional Perspective* 537-674. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

9. Notes

Notes should be avoided. If they are necessary, they must be brief and should appear at the end of the text and before the Reference.

10. Figures, tables, maps, and diagrams

These items must be inserted in an appropriate position within the article, and should carry short descriptive titles. They must be precisely and boldly drawn to ensure scanning or photographic reproduction.

11. Proofs

Authors will be sent proofs for checking and correction.

12. Submission of a manuscript

A manuscript for submission must be saved as a MS-Word compatible file, and be submitted as an attachment file.

13. Correspondence

Manuscripts are to be sent to: **jasfleditor@gmail.com**

機能言語学研究

Japanese journal of systemic functional linguistics

機能言語学研究（第 9 巻）

発行	2017 年 7 月 31 日
編集・発行	日本機能言語学会
代表者	龍城正明
編集者	佐々木真
印刷所	株式会社　あるむ
	〒460-0012 名古屋市中区千代田 3-1-12
	Tel. 052-332-0861（代）
発行所	日本機能言語学会事務局
	〒460-0002 名古屋市中区丸の内 1-17-31
	清原名古屋ビル 5F

ISSN 1884-9504

Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics

Vol. 9 July 2017

Articles

Change of the Definition of Theme in a SFL and the Japanese Text Analysis from the Thematic Point of View 1
Masa-aki TATSUKI

Reformulation of the Framework of Rhetorical Unit Analysis 21
Hidefumi MIYAKE

Generic Structure Potential for Genre of Directives 37
Yumiko MIZUSAWA

A Learnable Framework of Bi-Modal Texts of Picturebooks in School Textbooks for First and Second Graders 55
Kaori OKUIZUMI and Yumko MIZUSAWA

Complementarity between Words and Pictures in Picturebooks 73
Chie HAYAKAWA

Cognitive Empathy Deficit in Adolescents and Adults with Autism Spectrum Disorder as Identified from their Narrating Stories 97
Sumi KATO

Japan Association of Systemic Functional Linguistics